長谷川 利春

遺歌集

長谷川 利路

目　次

はじめに　長谷川　利路
略　歴
写真集
弔　辞……松尾　鹿次　1頁
追悼文……藤木千恵子　5頁
追悼文……山本　年子　9頁
蝸牛吼ゆ……（昭和四四年）　13頁
歌作十二日……（昭和五十年）　59頁
游　神……（昭和五二年）　79頁
雲脂の跡……（昭和六二年）　127頁

父と子……（平成二年）147頁
天の力……（平成二年）163頁
犬と……（平成二年）181頁
一人の室……（平成三年）201頁
青い丘……（平成四年）219頁
未知の己……（平成四年）225頁
緑の斑……（平成五年）243頁
向日葵……（平成五年）263頁
御手の招き……（平成六年）269頁
應答……（平成七年）291頁
青い丘（Ⅱ）……（平成十四年）307頁

はじめに

父、利春は平成十年十一月満八十歳の時、碁会所にて急激な胸痛発作に見舞われ、救急車で小野市民病院に搬送、解離性胸部大動脈瘤と診断されました。そのまま、当時私が在籍していました阪大病院に緊急入院。放置すれば助かる可能性は十%、手術しても助かる可能性は十%と言われたのですが、年令のことや術後の合併症のことを考え、血圧コントロールと安静で厳重に経過観察をすることにしました。その後一旦は落ち着いたのですが、恐らく徐々に大きくなっていた胸部大動脈瘤の破裂により、平成十九年五月十六日の朝、

自宅で朝ごはんの準備中、母の傍で急に倒れこみ帰らぬ人となりました。享年八九歳。それまでの九年間、黄班変性症により低下した視力の再三の治療、八八歳の春には胃癌に対する胃切除手術をそれぞれ阪大病院で行ってもらい、その都度小康を得ていました。

医学の道を選択した私は父の病気に対し出来る限りのことをしましたが、これらの幾多の障壁を越えてきたのは、父の持ち前の明るさ、逞しさであっただろうと思います。大動脈瘤の治療が少し安定してくると、回復室で心電図や点滴ルートが付いているのにも拘らず、短歌をノートに書いており、阪大病院の医師、看護師達を驚か

せたものでした。また、徐々に低下する視力に対して「遂に片一方の眼しか見えなくなったんや」と言いながらも、大きな拡大鏡を眼に当てて、短歌や随筆を書いていました。

私の小さい頃の記憶から父は勉強家であり、西田幾多郎哲学に傾倒していました。小野の「五島」でホルモン焼きを食べても、「力」で飲んでも、家に帰ると必ず私の部屋の隣の書斎に二～三時間閉じこもり、本を読んだり文章を書いていたのをよく覚えています。商売で全国の得意先を回っている時にも汽車から見える風景や人々との会話を題材に短歌を書いていました。父は、「美加志保短歌会」の

委員や選者を長年務めていましたが、短歌という方法論を用いて、人生の喜び、悲しみ、楽しさ、苦しさといった人の生業、自然との触れ合い、さらに生命とは何か、永遠とは、など色んなことを鋭く洞察し、それを歌に託し世界に発信していたのです。また、小野市民文化賞受賞の話が持ち上がっても、「他の人にあげて下さい」と辞退し、全国短歌フォーラム（長野県、塩尻市）で、父の作品が三席に入賞したときも、「あ、そうか」と、他人からの評価については、まるで無関心であったようです。

父は私に「なあ、利路。人は口で分かったようなことを言ってい

ても、文章に書くと如何に大事なことが抜けているかがよく分かるんやで。理解できてないか分かるんやで。」と、再三教えてくれました。父は、これまでに自費出版として、「満七十才記念　随想・小論集」「初めと終わりを結ぶもの」「自覚的形成」「自己の中に」それぞれ三百頁あまりの随筆集を計四巻発行しています。偏った難解な内容も多く、すべてを理解できませんが、師を持たずに独学でこれだけの勉強をしていた父は尊敬すべき立派な人と思います。このような父の生涯勉強していた姿を受け継いでいき、父の残した業績を世に発表していくのが、私たち後に残されたものの使命であると感じ

ております。

本企画は、短歌に関して昭和四四年に初稿した小冊子「蝸牛吼ゆ」に始まる計一五冊の小冊子、六千首余りを一冊にまとめたものです。「美加志保」の「長谷川利春追悼号」での三名の追悼文を引用、また父の若かった頃からの写真を掲載し、その短歌とともに懐かしんで読んでもらうと思い、五冊目の自費出版としてここに発行する次第であります。多くの方に読んでもらえれば幸甚に存じます。引き続き、未発表の短歌や随筆を、六冊目、七冊目として発行を予定しております。

以上、本短歌集を、父、利春の「遺歌集」として、謹んで霊前に捧げたいと思います。

合掌。

平成二十年七月

長男　長谷川利路

略　歴

大正八年一月八日　（現）兵庫県小野市住吉町一八九番地の二にお
いて、父　長谷川俊二　母　長谷川ぬいの長男として出生
昭和八年三月　下東条尋常高等小学校卒業
昭和八年四月　父の経営する金物卸売業　長谷川俊二商店に入社
（後に株式会社設立し代表取締役）
昭和二一年十二月　大城戸美知子と結婚
昭和二二年三月　美加志保短歌会入会
昭和三十年九月　長男、利路　出生

昭和四二年　十一月　ライオンズクラブ会員となる

昭和六一年　美加志保第二部選者に任命

平成一年四月　上田三四二賞実行委員に任命

平成二年一月　株式会社長谷川俊二商店代表取締役を辞任

平成七年一月　美加志保発行委員に任命

他　北播短歌連盟幹事・選者

コミセン下東条短歌教室講師　等歴任

平成十年十月　第十二回全国短歌フォーラム(長野県塩尻市)にて、

三席に入賞

優秀作品

竹とんぼ過去へ過去へと飛んでゆきわれに小さきてのひらありき

平成十九年五月十六日　兵庫県小野市にて永眠

写真集

父　利春の若い時からの代表的な写真を選びました。場所と年月が明確なもののみに注釈を付けましたが、人物については、間違いがあれば御無礼になるため、紹介を一切省いたことをご容赦下さい。

尚、（　）内は満年齢を示します。

平成3年4月（72才）

平成18年2月（87才）　自宅にて

母、平成19年9月

昭和35年（39才）

昭和36年（40才）

昭和40年3月（46才）

鍾乳洞にて

昭和41年5月（47才）
日光華厳の滝にて

昭和44年（50才）　ライオンズクラブ

昭和45年5月（51才）
万国博覧会

昭和48年9月（54才）
二条城（京都）にて

昭和49年3月（55才）
道後温泉にて

昭和52年3月（58才）　ライオンズクラブ

昭和52年（58才）

昭和55年2月（61才）

昭和56年（62才）　美加志保の会

昭和58年（64才）
ライオンズクラブ
台湾にて

昭和58年（64才）　ライオンズクラブ　台湾にて

結婚式にてスピーチ

昭和60年4月（66才）　ライオンズクラブ　塩田温泉にて

平成元年11月（70才）

上田三四二賞
発表会懇親会場にて

平成7年4月（76才）

出版社にて校正中

平成9年3月（78才）　美加志保短歌会にて

平成9年3月（78才）　美加志保祝賀会

平成9年4月（78才）
憲深林苑（京都）
花見会にて

花見会にて

美加志保短歌会　飛鳥にて

86才　敬老会

遺影　平成19年5月16日永眠　享年89才

哀悼

長谷川利春様

平成十九年五月十六日（享年八十九歳）

弔辞

長谷川さん、晩年は好きな酒も断って養生につとめておられましたのに。とうとう今日の日が来てしまいました。生あるものは必ず滅びると言われていた此の日が。交わりは六十年にもなるのでしょうか。そのおりおりに思いを馳せ乍ら在りし日を偲ぶよすがに致したいと思います。

少年の頃より私淑された哲学者、西田幾多郎の影響を色濃く受けられ、一木一草に涙し、乙女の一挙手一投足、並べて美しとまで言われ、実相観入を是とした斎藤茂吉の

赤茄子の腐れてゐたるところより幾程もなき歩みなりけり

を激賞され、西田幾多郎の

わが心深き底ありよろこびもうれひの波も届かじと思ふ

と応酬し、昂揚した吟行バス旅行の一日がありました。

竹とんぼ過去へ過去へと飛んでゆきわれに小さきてのひらありき

長野県塩尻市全国短歌フォーラム入賞にさえも、てんたんとされ、言動一致の様相でした。

家長としては、家業をおろそかにされる事なく、更に進展させ、七十歳を期に余力を残し乍ら総てを仕えて来られた店の人に譲られました。見事と言うほかありません。

解らうと努めて来しが結局は解らぬといふが解りぬ

なにごとの運ぶ命ぞ昨日より歩みの軽く癒えて来りぬ

小康を得られたかに見え、手を叩いてお迎えした教室にさくさくと歯にかみ割れて病める身のリンゴの香りに包まれて

ゆく

と出された歌が、お姿が、最後になりました。

長谷川さん、不肖の後進に、いろいろお導き有り難うございました。

平成十九年五月十八日

美加志保短歌会　松尾　鹿次

長谷川利春氏を悼む

藤木千恵子

去る五月十七日、外出（そとで）より帰って部屋に入ると、机の上に「松尾様よりの連絡長谷川利春様死去、十八日自宅にて告別式」嫁の記した紙が置いてあった。私の頭から血が引いていった。指先の震えに紙がゆれた。思いもせぬ訃報であった。

「生命あるものは必ず死ぬ」この至論は承知のこと乍ら、自分の親しく身近にある人は、自分の生きる限り別離など思うにあらずとの自己納得感にあった。長谷川様もその一人にて、死去は大きな失

望と喪失感にあった。―人生という舞台より主要人物が時の流れと共に忽然と水泡のように掻き消えてゆく世の儚さ、寂しさを今更の如くしみじみと味わった。

長谷川利春様の下駄履き、磊落な笑顔は、美加志保歌友のみならず多くの方に愛されていた。あの人間像にこの世にてはもう出会うことはない。アルバムを繰ると吟行旅行の長谷川様に私は寄り添っての写真が多い。長谷川様との交流は、短歌五十年余のみならず、亡夫の囲碁の関係も長い。亡夫の遺品の中に、昭和四十七年五月二十八日「八段昇段祝賀会、神戸第一楼、企画発起人名簿に、小野囲

碁倶楽部代表、長谷川利春、福岡宗次、井上貢、との門下の名が自書してあり、祝賀会場で、この三人様と乾杯をしたことがなつかしく記念写真を眺めていた。

長谷川様の知的感覚は、余暇は囲碁に考察的でもあった。

人を憎まず、憎まれず安らかな人間道を貫かれた方と今更ながら尊敬と敬慕にある。

小野合同歌集「向日葵」下東条合同歌集「青い丘」よりの作にて長谷川様の詩情にふれてみたい。

。苔生ふる幹の崖より垂れ下がり冷えたる空気かすかに動く

。樹の蔭にベンチ幾つか並びゐて弁当食ふべき腰を下しぬ

。おのづから内藤先生井上徳二酒を好めるものの集ひぬ

。秋おそき机の横にこほろぎの僅かに動く死にてゆかむか

。必らずや死すべく生まれ来たる身を月の光りに曝してゐたり

。美しき死に態（ざま）なども撰び得ぬ我かと花殻掃き集めつつ

生と死への詠風に長谷川様の面影が彷彿するも悲しいよ。

長い間御指導、御交友を有り難うございました。心より安らかな御冥福をお祈り申し上げます。

合掌

長谷川利春氏を悼む

山本　年子

長谷川利春様！永い間の御指導ありがとうございました。

五月十六日、貴方の訃報に接しびっくり致しました。四月二十二日の「下東条短歌教室」でお出会いしました時「血色がよくなられましたね」とお話したのが、つい此の間の様に思えたからです。

長谷川さんは剛快で、その反面繊細な心の持主だと思いました。ご子息が葬儀のときのご挨拶に「朗らかな父だった」と言われました様に、まことに明るく楽しく短歌会の先頭に立って下さいました。

そして野心など微塵もなく恬淡として居られました。かつて塩尻の「短歌フォーラム」に上位入賞されたときも、入賞など問題にされず、旅馴れた方と思うのに受賞にも行かれませんでした。その時の入賞作〈竹とんぼ過去へ過去へと飛んでゆきわれに小さきてのひらありき〉は私も大変惹かれたお歌だったので、出席されなかったのを、人事ながら残念に思ったものです。

貴方は後年、いろいろと大きい病気を体験されましたが、それによって頭の衰えを見ることは全く無く、美加志保並びに下東条短歌教室の重鎮として、活躍して下さいました。

短歌の批評も、核心を突いて、独自の見解を述べられました。只ひとつ、耳が遠くなられたのが（私も少し）寂しかったのですが、独得の雰囲気を持っておられたので人気があり、若い人達が代る代る近くに寄り、通訳の様にして居られたのが、記憶に新しく残っています。

文中の「竹とんぼ」の歌の他に感銘歌の一部を抄します。

。指させし鯛は俎上に乗せられぬ一匹の死の偶然にして

。耳もとに小さな声に告げ来たり少女は秘密持ち初むらしき

。必らずや死すべく生まれ来たる身を月の光りに曝してゐたり

。手を伸ばす麦藁帽子亦転び戯画の一人となりて後追ふ

。解らうと努めて来しが結局は解らぬといふか解りぬ

。さやかなる水の記憶を喉にもつ小川はあぶく浮きて流るる

井上昇さん、岩城和子さん、長谷川利春さんと、相次ぎ天国へ昇って了われ淋しくなりました。これ以上誘わないで下さいね。そして後進の歩むべき道を照らしお示し下さいませ。

謹んで長谷川利春様のご冥福を心からお祈り申し上げます。

合掌

蝸牛吼ゆ

序

「この人を見よ」と言ったのはニイチェである。私も歌を初めた頃はそう思っていた。だが　この頃は沈黙せざるを得ない。而し次の歌集を出す時は言うつもりである。これは過去の墓標である。

まなうらに花咲かさしめアネモネの球根吾子の手に渡しやる

藁塚に脊にふれ来る青き空少年生めり翼ある言葉

灰色に雨持つ空に灰色のやや濃き煙が一すぢのぼる

赤白の棒鮮かに草を抽き遊びし原は測られてゐる

エンジンの音の絶えたる夜の更けはく製の鷹が飛翔はじめる

しわ深き手より受取りし金持ちてビヤガーデンの階登りゆく

持金と領収証を照らし合せ眠る宿屋の日日（ひび）〈糞くらへ〉

釣針の鋭き尖りに手を当てて少年直ぐく伸びし脚持つ

足らぬ金入れし鞄を持ちて行く信号燈の赤ながくして

呉服屋に今年の秋の展示され汗を拭きつつ女等廻る

翔び過ぎし窓の雀に残されて空灰色の拡がりをなす

吾がわきの下より手が出て布掴み特売場に女旺んなり

鮒食へば卵はらみてめす多し雄よ苦労をしてゐるだらう

空になりし箱を抱きて行商の列車ゆれても動かず眠る

何の人も大きな荷物荷ひ出て安宿に朝の明けるは早し

やすの動き魚の動きを脊をこごめはかりゐし少年歩み止めたり

潰したる蛾の翅しばしけいれんをなしてゐたるが夜底に澱む

人通り絶えたる夜を循りゐしネオンは突然笑ひ出したり

たたまれしシートのくぼに水溜り吹き来る風に波を立てゐる

素枯れ来て山肌見ゆる草原の葉ずれの音に送られてゆく

駅ホームに売りゐるそばは坐るより立ちて喰ふが美味いと思ふ

店頭に魚溢れしめ陽を映す波おもむろに砂濡らし去る

曇天に影なき吾となりてをり鞄に鎌の返品を持つ

かゆ煮ゆる音の次第に高まりぬ煮ゆる音とは斯く豊かにて

細き首直ぐく立てゐて利路の手より青年あらはれて来つ

吾が声の早く意外に甲高しテープレコーダー徐(しづ)かに廻る

菊の花土にさされて新しき断崖をなす道の曲りに

昼食のをはりて事務所の庭先は会話と春の光溢るる

空のみどり海のみどりと映し合ひ白帆遠くに輝きて去る

彼方まで若葉一斉にゆれ動き初夏の光は跳躍をなす

他人の噂終着駅まで止まざれば来世も女に生れたくなし

食卓の茶碗を集め終へし母早く頭にタオル巻きたり

霜柱崩(く)折れて朝日にとけゆけば地の中種子の万の歓声

同じもの何時も映してをるならん隅に置かれし鏡に怖る

貸付の眼鏡の強く光りゐて呼吸ととのへて帳面を置く

ひかがみの伸び切る歩み乙女等は駅の階段吾を残して

冬駅の隅に置かれし自販機に誰も買はざるジュースが循る

借入れを了へて出でたる冬巷の誰も脇目をふらずに歩む

殺すべき蛆にはあれど夜をこめて張りし氷の中に死にゐる

外燈の幾つか照らし空高く竝べるビルは墓に似て立つ

空にせしウイスキーびんを棚にかくし商ふ旅の一日を終へる

海に映る月の光のはるけきに向かひて直ぐくとぶ虫のあり

お互の禿の大きさ言ひ合ひて久方ぶりのあいさつとする

夜深く鉄の柱と黒き貨車駅のホームは等質の静止

吊されて鰈が冬の軒に竝ぶ干されてゐるは生命もつ故

雨たれの音の間に夜があり吾子の正しき寝息を容るる

深き闇ひしひしせめぎガラス戸に灯を恋ふ白蛾動かずにゐる

つきつめて灯りを映す虫の眼をひとり臥しつつ怖れてゐたり

うちつけて灯りを恋へる虫のゐて窓のガラスに夜深みゆく

金数へ終へたる窓に風の鳴るこの宿に寝て幾年商ふ

若き芽の萠え出し下に散り落ちし鱗皮がありて山の音なし

つながれし牛はかすみてはるかなる山にとどけと咆哮なせり

疲れ立つ人の背中が対ひゐて夜の電車に深き谷なす

顔ふれんばかりに絵を描く幼児よ母の掌の樹より大きく

足裏にわだちの跡の凍て固し今訪ひ行くは赦されん為

新しき芽の萠え出るぞあかあかと野火は冬野の静けさを焼く

草よりも青き造花を卓に置き死を持つ事をおごらんとする

とび立ちし鳥夕日に向かひゆき明日亦吾を遁さぬ明るさ

ジャンパーの脊中を深く曲げしより冬鋭角の風音となる

予感など持たざるものの静けさか俎板に鯉横たはりゐる

野にながく蓄へゐたる陽差しあり蜜柑を買ひて掌に持つ

霜の禾(のぎ)鋭く尖り寒き夜を経たりしものの必然のごと

古き家具捨てんと積みし自動車の傍(かたへ)に老母の沈黙のあり

夕べ立つ利路のまみはるかなり地(つち)は超ゆべくありたるなれば

子の投げしボールは高く空はしり原の緑は日々に新し

一様の顔の表情流れゆくコンベアーベルトに手指の早く

蚊の翅音細くひきゆきひとりゐる室に月日の流るる速し

整然と人並べられ流れ来るコンベアーベルトを敬虔に待つ

老柏に尚若き芽を萠えしめて端然吾の小さき窓もつ

戸のすきを粉雪の冷えもれ来り睫の長く吾子眠り入る

目指したる雌より外にあらざれば夕映えは犬を赤く染めたり

血をなめて傷なほしゐる野の犬のあらき呼吸を吾も夜に持つ

時計‼　夜深き壁にかかれると太古の人の脊中かがまり

来る人去りゆく人に関らねば宿の机の清しく光る

青信号待てる多数の一人故おのれを吾は愛してゆかむ

すうどんをがつがつ喰ひて食堂にシャツ破れたるその少年よ

男の子なる吾に沫きてそそり立ついはほに波は砕けて散るも

エンジンの消え去る音を耳の追ふ時より夜は吾がものならず

ほほゑみにほほゑみ呉れる君見れば誰よりも今吾は勝者ぞ

泣ける児の頬を打ちたる漁場女はせはしく網を繕ひゆきたり

捨てられしチューインガムを踏みにじり山峡の児等道曲りゆく

秋の陽にゆれる尾花の光りゐて遠し機械の岩砕く音

頌歌一つ月より来りあばら家の中に幼児やすらに眠る

茄子漬の冴えたる青に歯を入れる遠き宿屋に知る人のなく

かきたてるほだ火があかあか照らしゐて夜は独りの固き唇

行き違ふ列車待ちゐる山峡の遠き裾野の灯り消えたり

くろぐろと湖をめぐれる低き軒動かぬ灯りは人皆眠る

威勢よく魚を箱より取出せる行商の指ひび深く割れ

雲厚く枯れたる草の続く原赤き青きの屋根の家建つ

掌の中の鏡に目を映し唇映して女笑みたり

雌の姿遠くに見つけ走りたる犬ためらはず堀を跳びたり

キューピーの腕ひろげしが忘られて田舎の宿の風呂静かなり

幼な日の記憶持たざれキューピーの忘られし風呂にゆったりとゐる

出張の一日終ふる静かにて沫きて岩の削らるる音

祭の旗幾つ立ちゐる峡此処も若き男女を灯り照さず

オーバーを着てゐるものは一人のみ出張終へて切符あがなふ

ひたすらに桜の花の咲きゐるをさびしきまみとなりゐたりけり

とびたちしつばめ彼方のはるけきに消えゆき空に青の満ちたり

しろしろと航跡残り立ちゐたる舳の男も見えなくなりぬ

声高く海に向かひて呼びかける少年波は果しなきより

楢くぬぎ葉の散り落ちて光白く浮きて輝く林となりぬ

灰色にこめて動かぬ雲の下影なき街は常より低し

競ひ立ち黒く昏れゆくビルの街負けてはならぬネオンめぐりつ

昏れてゆく家々の窓に灯がともり人の生きゐる範囲小さし

逆光の中鮮烈な黒として声挙げ吾子の駆け寄りて来る

曼珠沙華照る陽に炎となりて燃え今ひと気なき秋の山道

一ところ海の最中に岩見えて寄せ来る波の其処に砕ける

屋根と屋根重なり合ふ間の空地にて幼き者ら声満しゐる

葉の落ちし山に鉄塔高ければ怒涛の如く電気はしらむ

巌立つ処より流れ分かるるを眺めてゐつつバス来る遠し

脱ぎ終へて裸の腕をたたきたり宿屋の風呂に明日知らざれば

神殿の樹に紙占ひの結ばれて知らざる明日を誰も持ちゐる

仕入値と経費素早く算ふるを値切り来る顔にやにや笑ふ

裏街の低き家並みを縫ひゆきしそば売る笛も聞えずなりぬ

夜をとほし独語の如き雨上り洗はれて高き空とはなりぬ

ひそひそと樹影に語る女二人山ははるけき輝きを持つ

跡形を残さず引くと言へるとも今雄叫びて波は逆巻く

宿の灯にジャンパーの袖とポケットが光りをり十日経て来し垢か

空の深部斯く美しく昼飯を食ひゐるひまに雨上りたり

鉢の中金魚の華麗を棲まはせて傾く峡の草家昏れゆく

自動車を見れば吠え立つ老いし犬産みし仔なべて捨てたりしより

コンクリートに学校輝き建ちてより吾の過去より吾子はみ出しぬ

夜の梢渡れる風の聞えゐて宿に出張日報を書く

小説に街の俗物と書きあるを傍線引きしは少(わか)き時なり

売る為に産ませらるとも鶏の挙げゆく声を吾は聞きをり

精液が持ちゐるまみとは思はざれ女の腿の白く豊けし

青深き海にも詐りあるべしと幾百蛸の壷編まれゆく

波の間に時にかくれつ沖の船脊をそらしゆき漕ぐ人のあり

葉裏より徐(しづ)かに森の黝ずみて鳥眠るべき夜は来れり

月光の冴え来て地(つち)に亘る夜を誰ぞ自らに笛吹きゐるは

虫よ鳴け虫よ鳴け鳴けきはまりて滅びの秋の月はゆるを

秋の夜の虫ななきそなきそ窓に立つ吾の思ひのすきとほるまで

すきとほる水を手にくみ顔洗ふあらたまる一日と言ふはあらねど

りんりんと虫は鳴くかな月高く澄みて一年吾に逝かむに

石の上によべよりの雨吸ひし種子白く割る見ゆ明日乾くとも

閉ぢてゆく目に新しき明日充たす夜の血潮と言ふはやさしき

細々と峡を流るる谷川の石円らかに研ぎし〈時〉あり

ベトナムの画面に刺されし兵這ひて知らず一人の死にゆく背後

ベトコンの画面に少年瞼閉づ自ら選びし死の一つあり

出張の一日終へし靴の音行く白雲も自在に非ず

蒼穹の果てなる塵と無重量ラジオ報ぜり吾の密室

深海に棲みたる鯛のむき出しの鋭き歯がありて夕餉を終へぬ

捨てられし塵の臭へる浜辺にて波割る時に海の青見ゆ

終れいの汽笛の響き消えゆきぬ鯖を盗みし猫も眠りし

破れたる襖に紙を詰め込みて宿に一人の足を伸ばしぬ

汝は汝で生きてゆかねばならざりし瞼閉づれば怒りのとほく

無視されてゐる事も亦楽しくて窓の柱に首もたせゐる

細き手に糸を編みゐる乙女をり未だ知らざる夫に素直に

束ねられし鋼棒のごと人詰めて夕べのバスは闇走りゆく

鶏買ひの篭に入れられし鶏の声うしなひて荒き呼吸なす

ほろ苦き土筆の頭が茎よりもこの頃にしておいしくなりぬ

冬の日を白く一すぢ輝かせひびの入りたるコップ立ちゐる

投げし石すでに水底に沈みゐて面は波紋が呼びゐる波紋

夕闇にひしと寄り来る吾子の腕其のやはらかく吾は父なり

シャボン玉空の高さに飛んでゆけ再びは来ぬ吾子の幼なき

大洋の広きは知らず巣立ちたるつばめ陽に濡れ羽根拡げゆく

腰深く曲げたる篦の重さにて山峡の駅女降りゆく

掌に並べられたる種子幾つ落されゐるは発芽の弱し

何の人も蒼く描かれし画廊にて蒼きは夕べ昏れてゆく色

花開く駅のポスター歓びに飢ゑたる人の群れが続けり

満開の桜の花に入り日映え疲れ足らざる人群続く

吹く風に和毛ひるがへる若葉道初夏の光は跳びつつ来る

芽生えたる草の緑のあはあはし素足を撫でて春となる風

陽の射せばたちまち溢るる浅緑春の山路を商ひて越ゆ

自由なる一日の飛翔をはり来てつばめやすらに巣に眠り入る

商ひの宿の夕餉を食ひ終へて瞼閉ぢゆく十年廻る

何の谷も裸木となれる冬の痩せ伐られたる木の響ける高し

葉の落ちし梢が空を指せる原冬の内耳は響きに敏し

出張日報書きて一日終りたりぽきぽき首の骨を鳴らせる

生き残るこほろぎのろき歩み止め夜のガラスを鳴らし風過ぐ

オーバーの襟立て夕べ帰りゆく海の波千の牙万の牙

冬の田の乾きて深き亀裂入る商用にながく吾が家を見ず

傾きし屋根の並べる峡の村幼な児は水を跳び超えにけり

撰り捨てし種子塵取に掃き集め吾の淋しき顔と捨てゆく

蜜蜂の翅のひびきが去りゆきて蜜なき花の紅が冴ゆ

コンパスが廻してゆける春の陽よ少年やがて乾かむ掌

古りしノートに落ちしインクの暗き青如何なる記憶をよばはんとする

夕闇の中より湧ける淋しさの過剰一人の部屋を出でたり

花びらが青き空より降り来り山路に暫し商用を捨つ

屈曲のたやすき影をひきて帰るセールスの手帳白紙のままにて

鼻すぢに白粉一本通したる子が連なりて豊年祭

たはやすくほほゑみ売りしセールスの夕は己を閉ざさむとする

この中の一枚が吾の利益にて丹念に厚き札束数ふ

己が意志他人の言葉に逆らはず通さん事も身につきて来ぬ

死の覚悟出来てゐるとぞ言へる舌飴の甘きを宥してゐつつ

吾が一夜の情緒過剰も掃き出して宿の女中はさばさばと去る

取出せし手形帳の文字うすれゐる思ひ出も今は楽しくなりゐて

鉄砲虫の芯に入りたるいちじくのこの実の竟に熟れず落つべし

吹きつける砂嵐の中一ひらの枯葉となりて街角曲る

凍傷の耳を持ちたる婦人にて話の合間を明るく笑ふ

穴あきし靴を捨てたる塵捨場さばさば過去よりきびすを返す

冬の死の一つ道辺の霜柱光り流れて崩れゆきたり

一すぢの視線がやさし皮をむくりんごに動かぬ子となりてゐる

池の水風が研ぎゆく枯野にて貨車きしりつつ長く続けり

赤と黒半ば宛編める服を着て無頼も纖き少女の行く手

野焼きせし冬野に青き芽が潜み萠え出るものの鋭さを持つ

草朽ちし池の堤の広くして尚徹せざる孤りの歩み

海底のひとでの如き収縮を了へて風評の中帰り来りぬ

威勢よき声挙げゆきし魚屋の老いし脊中が家陰に消ゆ

貨物列車玩具の如く通り過ぎ吾の戯画より吾が抜けられぬ

ふてぶてと少女顔挙げテレビの中すでに知りゐん泣けば踏まるる

一瞬に断面が持つ深き青見えてガラスのかけら落ちたり

草枯れし土にガラスの破片落ち冬白毫の沈める光り

枯原に銃持つ男あらはれて冬の空虚を撃ち落したり

撃たれたる鳥より落ちし羽毛にて捨てたる時に最もやさし

掌の撃たれし鳥に冬陽射し飛翔の血潮今冷えてゆく

溢れゐし人が去りたる公園の夕べ木馬の耳を聳てゆく

直ぐく伸びし若き裸木の光りゐる残像ありて野の道終る

はね出して冷えたる尻なし眠る児に手を当てゆけば掌の明日

洗濯の泡は乾きし石に残り夕映え早く赤さうしなふ

夜の雨の間に口笛聞え来て吾子まぎれなく明日を生きゐる

夜深く傷める空か澄み渡り月は思考の瞳(め)となりてゆく

暴動の黒人の血が咲かせゐて夕べカンナの暗き片面

バスの来るひまをせせらぐ水見をり唯流るると言ふも争ふ

雪の降る夜の静けさを聞きゐしが頭伏したる吾のみとなる

空深く吾に発(た)たすと身のめぐり雪は静けき千の純白

雪に雪つもる韻きを聞くと立つ夕べほそぼそ雪降り積る

食堂の隅を撰びて席を取る向かはむなきは斯くやすらかに

電光(いなづま)が束の間展きて夜の梢形あるもの常に淋しく

一すぢの茜をひきて昏るる空明日を信ぜし記憶を生かす

くるぶしを泥に埋めてベトナム兵は進み行くべき祖国持ちたり

足先に月の光の溢れゐる今宵静かに吾が眠るべし

飴呉れし祖母の脂(やに)浮く目を埋む碑銘侵せる苔はぎたれば

母‼　斯くの如くに生きたりや鱗被幾重に幼な芽包む

裏街の居酒屋に喚く老いし土工其のまま汝の救はれてゐよ

刈られたる稲田の跡のたで赤く吾呼ぶ吾子の声とほり来る

まろまろとてのひらの中に並びゐる此の中幾つは間引かれる種子

美しき花秘めたれば掌に並べる種子の慟悸の聞かなむ

夜の空に赤点もるる灯りあり首さらされし栄光のごと

定めゆけば未来も重し手形書くペンのきしりに沈む耳あり

低能のしぐさのテレビ笑ひ終へ蒲團を深くかぶりていねる

夕映えの速やかに去りし濠の辺に石鹸の泡の一つが消ゆる

一日の証(あかし)虚しき指を持ち時計の捩子を一ぱいに巻く

不渡りとなりし手形の上を這ひ蜘蛛が持ちゐる逃避の自由

一色に枯れたる葦の伏せる果て川と空とが白く連る

電灯の明るき下をくぐりゆく今日一日(にち)の記憶を持たず

一すぢに直ぐなる幹の木々立ちてすきとほりたる冬の空指す

開け放つ夕べの窓に闇濃き山見えてをり眠る外なし

ひらめきてライト過ぎたる夜の臥所開きしままの吾が眼なり

返品の刃の折れし鎌抱へ来る言ふべき嘘を急がねばならぬ

行き過ぎる夜の鏡に白髪のふえしが光り明日も耐ゆべき

記帳終へし夜の深さに鏡あり椅子立つ時に見なれし猫脊

轟きて汽車過ぎゆけり夜の卓に吾が手は濃き影を落しつ

しわ深き梅干卓に置かれゐて夕べ留守居の食事終れり

祝福され生れ来りし吾が神話鏡の中に猫脊映りつ

黙然とガラス戸の闇見てゐたり妻の涙と男子吾が距離

台風に裂けし葉の下無花果は甘き果漿をしづかに充たす

取引を打切りませうと言ひ終へてはやし他人の眼となりてゐる

灯の流れ暫く止みし歩道には月が照らせし鉄鋲の白

冬の水冷えたる池の底ひ見え魚の穴堀り肌寄せにけり

この鎖足首の骨とエジプトの古代の鉱山（やま）の跡より出づる

自（し）が食ふに非ずと柿植うる老人は歯のなき口を開けて笑へり

沫立ち怒号となれる冬涛の戸を閉（さ）す家を並べてゐたり

黒き頬かむり外せば若き女にて汽車は山峡の駅を発ちゆく

おばきゆうはテレビの中の漫画にてへまする時に吾はよろこぶ

閉店と貼られたる戸にガラス一つ破れゐて人の居ぬ内部（うち）暗し

集会に言ひ争ひて何の面も生きねばならぬ構へ持ちゐる

壁穴が眼となる時よ商ひて夜を宿屋に疲れてゐたり

窓ガラス距つる赤きネオンサイン歪みて此処も故郷ならず

吾が顔を不意に映せる車窓にてトンネルに入りし響きとなりぬ

生きものの眠れる如く山昏れて遠く商ふ宿の灯を見つ

乱されて顕ち来る影と光あり女濯げる水の底ひに

丈低き童の多しバス降りて山に続ける道帰りゆく

夕闇に蒼く沈みし山裾に灯り点りて吾は旅人

波幾つ起伏を持ちて流るる川捨てたる塵の行方を問はむ

妻とをれば妻との距離を測りゐる夜の底ひを打つ雨のあり

無為にして今日も過ぎぬと葉鶏頭の芯葉あかあか狂ひ出で来よ

絶え間なく口に運べる葡萄の実の甘さがありて宿の更けたり

湯の中に軽くなりゐる体あり地(つち)より黒く昏るる夕原

一日を了へて茫々と昏るる窓素直に鳥の眠る樹のあり

集金の不足は友に借ると決め手形の帳簿閉ざして寝(いね)る

子の産毛なぎゆき光る風迅し五月の山は一斉の若葉

店頭を走り過ぎたる初夏の風少女ほほゑみと剰銭呉れる

吾が決意常にたやすく挫く故女の白きししむら愛す

つややけく大きく咲ける赤きバラ夜の雨其処に冷たくそそげ

無駄なりき商用記す宿の窓闇は一日の終りを告げる

原色のシャツ一斉に陽を返し若者思考を持たざる笑ひ

食はれゐる雄かまきりは脊を深く曲げてゆきしが曲らずなりぬ

飛行雲一すぢ跡をひける時寂し蒼穹の弧に随ふ

百合の花みづからに咲く卓の上本を取らむと立ち上りたり

懸賞の歌を作らむ手に冷えてシリュースの星の太古の緑

童らとぺったんをして遊びしが同じ笑ひを持たざりにけり

枯れし木が白く塗られて生けてありセールス了へておそき宿取る

風塵の中帰り来し赤き眼が己れより不幸の記事さがしゆく

分業の黙して長き作業場にひらひら動く掌幾つ

望遠鏡の円が引寄せる海原に還りてやさし少年の期（とき）

夜業して疲れたる目に束の間を読めるは吾より不幸なる記事

一塊の怒号とよりは聞くを得ぬ魚市場に人は素早し

そり返り怖れぬ鳳凰の画幅にて斯く描かしめし背後を憎む

辛うじて生きてゆく生活たはやすく容れて胸壁の隆起逞し

嘘になると知りつつ吐きし言葉持ち逃避の如く蒲団をかぶる

金気水のあぶくの中に植ゑられし稲細けれど確なる青

発車ベル響きが止みて眼を閉づる夕べ暫しを己に非ず

奔放に拡げてゆける未来像最も己の詐りやすく

風音に爪上げてゐるかまきりの産まむ子の外容し得ざれば

一すぢの紅となる朝の空一日を熱く祷る者のため

如何ならむ浄福吾に贈らむと白百合の花ともしびに咲く

何処にか熱き祷りのなされゐむまつ毛合せて子は眠り入る

脳髄を残らず取り出しすきとほる水にて一度洗ひゆきたし

立売りの声交叉する夜の駅吾が影落つる範囲愛せり

君の目は既に知りゐる冷たさか言ひかけた嘘言はねばならぬ

鮮かに欲求あばく街の灯よとほき母胎に吾が帰るべく

一日の疲れをいれし夜の床五尺程あれば吾が足らひゐる

夜の壁に自足の笑みを湛へゐるおきなの面を問ひ詰めるべし

びっしりと葉裏につきし虫卵のかへりゆく日を夏といふべし

昼食を了へ来て窓に空が見ゆ流るる雲は還らざるべし

太陽の光を千に砕く波褐色の少年深くもぐれり

丘の上にクリーム色の家建ちて陽が生みたると見る迄明るし

留守居する傍へに猫が寄り来り風吹く音に耳を聳てゆく

風荒き夕べとなりて小屋の犬瞼閉ざして動かずにゐる

白百合の花を灯りに匂はせて少年以後は傷つきしのみ

夜の廊下母の歩める音聞ゆ力うせたる足となりゐる

どの顔も見られん演技に撮されし婦人雑誌を投げ出し眠る

枯草の葉先に光り残りゐて開墾田は土粗く昏るる

のめりたる吾見る勿れ土を掘る日役の午后をつるはし上げる

鳥の持ちし蛙が裸の木に乾き吹き来る風をかすかに鳴らす

腐りたる魚捨てられし塵捨場〈吾の死臭の激しくはあれ〉

白くなりし石炭灰を捨てゐつつ其の燃焼の完結を妬む

水の上に白き羽毛の吹かれゐて過ぎたる時の凹みをならす

丈立たぬ深さがありて山池の人影見えぬ堤過ぎたり

何処迄も追ひかけてゆく吾の戯画血を吸ひし蚊の腹の太きに

餌を待つ犬のひたすら眼となりて今日の卑屈の姿勢にかかはる

電線の鳴り明らかに夜更けて明日の手形の金まだ足らぬ

終バスの中一様に目を閉ぢつ皆一くせを失はぬ顔

夕光に伸びし樹影の尖れる秀(ほ)バス待つ吾の空白を擬す

脱ぐ服に白き埃のつくが見え宿の灯りは一人を照らす

横顔に吾も不逞のすがた持つ夜景を見むと窓ふり向けば

水害の跡の礫に陽の返り確か此処らに家のありたり

冬原に野焼の跡の黙々とありて潜める千の幼な芽

玄関を一足外に踏み出して早し女の優しき演技

少年想起　九首

果てしなく青き空より下り来る縄あり吾の登らむが為

山深く蒼く澄みたる池の水底知らざれば死霊のまなこ

走る鮒掬ふ網との速力の争ひあれば魚篭（びく）の恍惚

文字の中自在に物が変りゆく魔術書半裸の昼の跳躍

夕闇に鍬持ち出しし花盗人のうす桃色の花ふるへつつ

母持ちし父の横顔車ひきて従へば手にまぼろしの兇器

はつなつの梢鳴らして過ぎる風すでに絵葉書の家に住みたり

母の床眠らむとして女臭し母に非ざるものは憎しめ

ビー玉の中に逆さに映る山躍る血潮は撰ばれてゐて

稲刈りし跡に曇天映りゐて山の方まで人影を見ず

脂垂る煙に焼きしはたはたを頭より食ふ期となるかも

すすき原突如断たれて紅のうるし散りゆく斜面となりぬ

ともしびに狂ひて舞ひし白蛾故朝死（あした）したる形小さし

高き山のすきとほる陽射しになる紅葉山男かざして降りて来にけり

一日の首の疲れが仰向きて湯殿の水滴ふくるるを見る

水滴のふくらみゆける風呂の窓さばさば今日の汚れを洗ふ

にちにちに水気失ふ干菜にて老いし手首の並べるがごと

貝殻の皮ぽろぽろとはがるる時深海の事もいたくはかなし

藍深き海底誰も知らざれば貝殻の内の七彩（いろ）やさし

円らなる卵黄（きみ）に映りし吾の顔或は今宵幸せならん

ガラス戸に屈折したる吾の影何ぞ歩みの止まりたるは

ととのへし金を蔵ひて寄る窓にビルディング方形の影絵となる

なめくぢの板をひそかにくらひゆき時雨れてながし吾の裏窓

ひそやかに時計が十時を指す窓に闇幾つかのともしびを呑む

睡眠の苦しさとして敷布のよれ夜深く明日の予定を立てる

見上げては時計の動く音高し「アスオクラネバトリヤメニスル」

若き日の写真一枚載せゆけば掌やさし艶の失せたり

エンヂンの音過ぎてゆく夜の部屋きびしき聖者の言葉をさがす

猛禽の如き眼と思ふ時たやすく吾の値切られてゆく

西の空すでにかすかな茜にて鳥飛びたれば鳥のさびしさ

襟立ててへいに沿ひ行く朝の道冬はコンクリーの曝れたるが顕つ

一人一人枯れたる草路に別れゆき開拓場に冬はきびしき

食肉となる日の為に肥える豚吾が足音に走り寄り来る

ばりばりと氷砕きて興じゐる子等その足裏の暗さを知らず

足の下きしむと見れば凍てし土亀裂となりてうすら陽光る

氷片のもろく壊ると知れる時砕きつぎたき足裏を持つ

煉炭の灰のもろきを幾度も火著の先で突きとほしたり

鎌の目釘打ちゐる窓に虫卵の古りしが見えてくらき口開く

空深く雪は形をなしてゐん吾子は吾が手に手を置き眠る

亡き祖母のひそかな祈り吾が知れば眠れる吾子のまつ毛の長し

帰りゆく人らの足に夕迫り墓標は埴土を描きゐて白し

うつむきてひそと咲きたる白き花の蝶を呼ばなむどんらんも見むか

むかしむかし地球の上に夢を食ひ死にて絶えたる人なるありき

幾度か店頭を往きつ戻りしが入(はひ)りぬ鎌を売らねばならぬ

樫の木に色変りゆく雨蛙午の庭先は物音のなく

吹きつのり夕べの窓の揺れ止まず明日のセールス予定表開く

海岸に並べられたる干魚の目玉はやせず冬の陽返す

風青く草走りゆきめす山羊は陰部開きて高く啼きたり

痛きまで力の強く就職の少年車窓より手を握り来る

ひえびえと伝はり来る君の手の耐へ来しものを分ち持たなむ

鉄の爪ゆるさぬもののしづかにてパワーショベルは土に喰ひ入る

雪のまなざし空の深さに還りゆき高き跳躍犬は持ちたり

制服の下に乳房を熟れしめて女高生唐突に生める逆説

塩ふきて膳に焼かれし鯖の脊を喰むればくらし冬涛も死も

セールスの鞄持ちあぐむ手を走り風は枯れたる草を伏せゆく

夜の汽車を降りたる人ら振り向かぬ歩みを持ちて闇に消えたり

突起する肉体の利己を知れる時乳房やさしき母なる言葉

冬川のかれいて曝(さ)れる水位表危険水位の赤き線顕つ

どんらんに春の陽差しを奪ひ来て若芽が変ふる緑を愛す

腕の汗拭へる時に確かなる速さに時計の針めぐりゐる

さびしいなど滑稽な事止めやうよ眠りたる子のまつげの言葉

熟れざりしままに乾ける無花果の黒き炎となり冬陽没りたり

枯草の下に潜みし青き芽が野焼の灰の間に見ゆる

脱がれたる靴のかがとの片減りて汝も重き荷を持ち歩む

金数へ了へて窓見ゆ夕昏るる吾家の屋根の重量持たず

むき捨てしみかんの皮の原型に還らんとして裂目に歪む

卑屈なる己(おの)が言葉に耐へてをりセールスの靴底いたく減りゐる

かすかなる白として吾子の手の見ゆるはるかな星と光はつなぐ

臭気つく街裏の道を抜けしかば叫びもあげる脳髄となる

返答に困りし時に笑ひ声出でて来るありをかしくはなし

殺したる蚊の形未だ掌に残りて寝床に目を開けてゐる

コールタール一すぢ板を流るる時吾が敗残の涙となるな

冬近き便所の窓に外し忘れしもち紙の蝿の足が動きぬ

獲れ過ぎてたとへ捨つべき魚とも漁船旗をなびかせて来る

野火の照らす鍬持つ農夫の太き指厚き地表に突っ立ちゐたり

太き指に鍬を握りて農夫立つ野火が彫りたる深きしわあり

なべて皆あらはに秋のすきとほる夕べの呑屋の女と出逢ふな

異れる日毎の宿にて宿帳の兵庫県の文字早く目につく

壁にうつる吾が影うすく大きくて宿の夕べを首動かしゐる

屈む脊を更に屈めて荷物負ふ老行商人行かねばならぬ

果て知らぬ青き海より風来る胸壁ひろげ呼吸なすべし

一ぱいに口を開きて焼かれゐる魚よ吾の終焉の為

灰色に分たぬ海と空の色舟幾そうか高く浮きつつ

灯の下にリンゴを三つ分ちやる危険冒さん血のうすくなり

熟れざりし草の実茨の黒く枯れ冬の夕べは其処より昏るる

脊に沁みる陽は早春を伝へゐて種子店頭（みせさき）のやさしき眠り

満員の夜行列車に人を分け少女みづみづ〈湯〉売り来る

機械の音止みし工場の門を出で誰も同じき表情を持つ

今日は今日の安らぎ持たむ来月の支払手形表の頁を閉ざす

決断は今日の出逢ひに終るべしバンドの穴を一つ締めあぐ

すきすきと朝光歩む吾子の脚今日の試験に落着いてゐよ

自らに生きむとをさな児なせる宵負けてやるべき角力を取りぬ

歌作十二日

十二日ばかり出張して六百首程作歌しました。
どんな作品が出来ているか判らないので本にまとめました。

人には100%
不幸が必要である
ドストエフスキー

みずからをしばりて我のあるならん出張案内日附を入れる
ありなれし旅といえども十日まり家郷離るる切符あがなふ
動けるは我にはあらぬ汽車なれど全てのものをしりえに進む
走りゐる列車の席に足投げて常は多くの人の目をもつ
知る人のなぎ安らぎに車窓より見えゐる原は秋のたけたり
おのづから腰引き球を打つ構えテニスコートに若きは迅し
スピードを増せる列車のかすか揺れ一人となりし本取り出しぬ
とどむるなき時に列車は走りゆき幽暗に置く我の瞳は
杉木立竝べる谷の幽暗にいつしか向へる瞳となりぬ
追ひつめられし者の無明や夜逃げせし君にまつはる噂は聞きつ
君程の者がと思へど夜逃げせし後を無明の噂きくのみ
心弱き一つの言葉が言葉生む故郷捨てたる君ならざりし
あやまちの言葉が生める誤ちに潰えしならずや君弱かりき
おそらくは金利にふくれし額ならん逃げたる君の億と聞けるは
嘘となりし言葉が生みし嘘などを夜逃げなしたる君に思へり

片面に目が並びたる時ながくかれいあぶりて我は食ひおり
このところ人の栄てほろびぬと木標一つ原に立ちたり
累ねたる日々のひそまる我ならん澄みゐる水にまな底熱し
さんさんと日の降る故の木の蔭のなす幽暗を我が目は恋ひぬ
人と人対える常の煩ひを離れて車窓の光る雲見ゆ
幾本の列車走らす橋の脚巨きなる陰作りて立ちぬ
呑むべくありと呑みし亡き人の今は悔しくうかびて来る
スイッチを入れてパリーが写り来るこの不可思議の我には褪せず
葱などを植えたる畑多くなり街近づきし放送のあり
辨当の売り切れたりと告げられてひしひし空ける腹となりゐぬ
この山にたつきをなせし人ながく峯つらなりて空にそびゆる
質量の同じきさまに累々と丸太積まるる木曽と言ひけり
ボードの壁トタンを張りし屋根つづきそびゆる山を背腹にもつ
雄々しけれ天の峠を越えゆくと若き等ズックの靴底厚き
茂るべく茂りし葉群木の為に害になるとど切られておりぬ

下枝の切られて整ふ杉の木のおのれ否まむものをつくりぬ
剥落のつづきて止まぬ年の経り壁は無惨の面さらすべし
股開く女に似せし角の戯画牛の牧場指し示しあり
すずらんの里とふ駅の何時出来て用あらざれば降りずに過ぎぬ
一瞬の後のいのちは知らざると書きつつ続く言葉さがしぬ
あらざれば思ひ募れる世の常の常なる我は涙垂りつつ
幼等は管のの暗きにかくれゆく競ひ争ひかくれゆきたり
ヒューム管の中なる闇にかくれゆき幼等声を殺していたり
かくれいるいのち幼に具はると管に入りゆくすがた見ており
かくれいし管の中より出で来り幼は声挙げ走りゆきたり
更けゆきて人の見えざる公園は灯り輝く闇のありたり
ひとりゐる思ひ重ねて時の過ぎ旅館の窓に夕闇厚し
克明に一つ一つが椎の葉の形をなして一樹立ちたり
霧深き朝々となりうるし葉のくれなひ顕てる原となりたり
立ちこめし霧の動きてはれてゆき営む今日の天地開く

日の当る窓辺に今日は席をとる着増しなし得ぬ旅はるかにて
トンネルを出でたる山の霧深し鞄の中より本を取り出す
宿の灯はししみたたみに照り亘り言葉もたざる一人のありぬ
塵のなきたたみに宿の灯り照り尚徹し得ぬ孤独のありぬ
大方は人家が埋め見はるかす善光寺平陽の亘りたり
ゆるゆると走る車にいら立ちつ巡査四、五人ゐるに出合ひぬ
入り組みし屋根もつ家がアパートの横に建ちおり世の常として
水見れば我に冷えたる血のありて冬鳥過去へ遊ぎゆくかな
直線の構成潔く鉄塔の立ちいて落葉の季の過ぎたり
大きなる木の空洞の暗黒のさはあれ若芽吹くを見上げぬ
年古りて至りつくべき暗黒の空洞もちて巨木立ちたり
高原の空渡りゆく雲白く首仰向けし時の過ぎたり
襟のバッチ光らせ乗り来し男にて目を閉ぢ鼾かきはじめたり
骨のまだありと信ずる母の墓火葬の塚は土盛り小さし
母よ母七年めぐり来れども汝が墓建つるにまだ生ま生まし

より添ひてケーキを分ち食べいしが男の口辺を女拭ひぬ
石鏃の工房此処にありたりと我等も還らん大地はつづく
いのち殺す道具にありし石鏃大古にすでに工房ありき
大量の武器は即ち大量の殺りやくにして大古もありき
まがごとを運ぶが如き黒雲の我をかげりてとうり過ぎたり
しばらくを冷ゆる風もつ雲の影襟立てし我を残し過ぎたり
空洞となるべきものをもちたりと大樹は空に風を鳴らしつ
悠々と歩めるならずつまづけば転ばん年に至りたるなり
石やじり持ちたる人の脚早く信濃の山は険しかりけり
石やじり持ちて湧き来る殺りやくの力は今に伝へ来りぬ
人類の苦痛の偉大に頭垂る神よこの我を撰びゐ給え
過去、未来あらざる我の暗々と夕べの窓は昏れてゆくかな
伝え来てつたえて行けば優しかる言葉をのみど持たむと思ふ
冷え冷えとこの坂道に風の吹き口髭もちし人も死にたり
籠負ひし女の山を登りおり幾代伝えて来たるすがたに
教はりて伝えてゆくは幸せか籠負ひ女山を登りぬ
目覚めゐる限りは明りを欲しゐて更けたる夜のスイッチ切りぬ
寒風は頬に血潮をのぼらせて幼なき童つらなりゆけり
風つのるすすきの原に家見えて赤き色塗る屋根をふきたり
あをによし夜の盛りの電飾の負けてはならぬ循りもちたり
つんさける音に車を走らせる青年離れて思へはおさなし
明らかに底ひに白き石ゆれて山の裾野に水は走りぬ
山頂に白く塗りたる塔の立ち朝の光りは視野に冷ねし
背を伏せて生と死はありエンヂンの音たちまちに山際に消ゆ
人間の盛衰越えて地に降ると星は我が額照してゐたり
目の冷ゆる宿の夜の壁何程の人がなしたる汚れもあらず
けものにはけものの境界あらんかと争ふと聞く山を過ぎたり
昨日迄の寒さゆるびてバスを待つひまを草光歩みゆきたり
コスモスの花は陽に顕ち咲きゐるをこの駅無人となりたりしかな
ぬかるみて途中に歩み返したりき広き舗道が山をつらぬく

漂泊の日々といえども今立てる地あり地よりなべて生れし

日を避けて席とりたるは昨日にて背を照しゐる温みに歩む

向き合える鏡に我の写りゐて数限りなし白髪竝ぶ

くれなひをふふめるうるしの葉となりて其処より今朝の霧はれてゆく

高原の野菜はせんい少なくて大きな家を並び建てたり

この野菜とるに如何なる刃物を使うと我は通りすぎたり

降り来る火花に仰ぐ鉄構の高きに男熔接をなす

ひしひしと組まれし鉄のあはひにて男熔接の閃光放つ

轟音の何処より聞えて鉄組まる鉄帽被る男動きつ

きびきびと何か言ひゐる声聞え一人の男走りゆきたり

冬の水涸れゆき岩を縫ひゐるを魚は潜まむ譜を作るかな

岩の間を縫ひゐる水のかれゆくを走れる冬の川魚見ゆる

ああ我の人にむかひて何なせしわが死にゆくは人よ捨ておけ

老ひ来ては山中深くかくれたるいにしえ人の心も知りぬ

死者生者はるかなるかな山中に小海と言える駅名のあり

小海より二駅目なる海の口平らと言えぬ道のありたり

山峡はかげりの早く冷え来るを背中丸めて人等歩めり

にちにちに魚のまなこの冷えゆかん冬の川原は曝れ石多し

木の葉色分たぬ夕べの闇となり宿の夕飯出来ぬときむる

もしや満員思ひに宿の戸を開く我のそびらに夕闇厚し

日が落ちて襟合せゐる我が歩み誰も同じき歩みもちたり

朽ち果ててこの山中に祠ありたつきを木にもつ歩みのありき

夏すぎし高原なれば宿あらん闇の中なる駅に降り立つ

横になり寒さしのげばと思ひしが食事となりて酒をたのみぬ

三センチばかりの胡瓜が出されいて食べたる後をしばしかかはる

夕食の隣りに若き男ゐてやや食ひすぎし腹となりたり

山腹より谷に下りて点々と夕べの峡の灯りともりぬ

逆光に黒一さまの木々立ちて列車は夕べの山峡に入る

六時とはこの山峡に暗くして追ひ立てられる歩みとなりぬ

肘立てて断崖なせる腕のあり腕の間に顔うずめいる

はつなつの蕗の香は母の声吾に食えよの言葉をすまはす

紫の匂へる秋の茄子漬はしばらく卓の上に眺むる

掌をあごに当ているこの夕べながきかな窓の闇に向える

我亡きはしんしんとして暗きかなつぶさに蜘蛛の動き見ている

愛ゆえに弱く生きねばならざりし今日白菊を墓前に供ふ

楽書帳が宿屋の壁に吊られいて無意味なことを書かむととりぬ

読む人のあらずと思ひつ楽書と記すノートをとりて開きぬ

下手な字に佐久よバイバイなどありて楽書帳を書く人多し

常日頃言ひ得ぬことは楽書に記して思ひのおはりとなしぬ

名とは何生誕の地と標さるを蕭々として風渡りゆく

人並と言へる言葉の重要さを近頃知りぬおそかりしかな

鎌なぞをまだ売りるるかと冷えし手をさすりつ入りし店主の言ひぬ

灯の海となりたる街を振りかえる語りし人は淋しくありき

青かりし夏の葦葉は枯れて伏す亦新たなる芽を出たすべく

流通の機構異なり売込めぬ量販店に人の混みたり

整然と量販店に品並び売込出来ぬ我等衰ふ

量販店近くに出来て売上げの減りたることを幾度も言ふ

量販店近くに出来しを幾度も言ひて手形にしてくれと言ふ

地軸より天を抽きいて巌立つ穂高の峯は対ひこそすれ

つと止まり飛びゆきて亦つと止まるあきつは光と遊べるがごと

空洞と幹はなりつつ宮の屋根覆ひて楠は千年を立つ

宮の庭木蔭に冷えて楠は千年の葉を空に拡げぬ

自が見えぬそびらを持ちて歩むれば我が断崖の暗黒はある

縄文のけもの追ひたる血の熱く猟解禁の銃声ひびく

佃煮なぞ竝べられたる土産店いたまぬものは味悪くして

卒中になれば死ぬことを思はぬと身の深淵は覗くべからず

争える中の一人となりており着きし列車の入口開く

誰も皆坐れる席のあるものを着きし列車に押し合ひており

争ひて席とる我に餌に寄る魚の競えるすがた重なる

降りてゐる人の間をすり抜けて女乗りこむ女は強し

鉄塔の白きに光り降り来り光りは天の言葉たずさふ
死にたしと母は言ひたり言はしめしは我にあるかな骨髄に棲む
我をよぶうたげなりしが抜け来てもにぎはひ変らぬ声の聞ゆる
吠え合える犬幾匹の声止みて旅宿の夜の闇深みゆく
離り来し旅宿の室は一人にてとうく過ぎたる日々は輝く
みどり透く葡萄一皿食ひおへてしばらくきよき思ひにありぬ
舌の上を流るるジュースうす緑透ける葡萄の我となりいて
雨の降る朝となりて宿の部屋障子距てししずけさにおり
雨の降る音のほそりて来れるを出張員我敏き耳もつ
久しぶりに泊りし宿は主来て膳を並べて語りつつ食ふ
幾度か時計は見つつ降り止まぬ雲の動きにさとく立ちおり
寝具上げ机正せし簡潔に我が泊りたる跡をとどめず
最大の下落も今は目に押れて持株二、三拾ひ見るのみ
丸き石幾つ積みいて大きなる丸きを置きぬ如何なる神ぞ
直ぐく張る鎖となりて犬の立ちあるじなるらし女かへりぬ

老杉のみどりに細き雨見えて宮居の庭はしずまりにけり
ふり仰ぐ老杉の秀の天を抽き霧ながれゆく白く巻きづつ
そびえ立ち天と抽きたる杉の秀の我は経りたる年を仰ぎぬ
幹太き老杉柵に囲まれて紙新しき注連縄を張る
老杉のそびゆる幾つ年経りしもののしずかに宮居はありぬ
取引を断られたるこの店の主の頭も白くなりたり
高く長くめぐらされたる塀くづれ整枝されざる木の影濃し
我が罪の如何にか深く生れ来て隣りの老婆のしわをいとえる
この老ひのしわを刻みしながき日々喜びなりしや悲しみなりしや
晴れ渡る空にそびえし山峯は生物拒む岩肌赫し
囲ひゐる板の古り来て反れている街家の裏が車窓より見ゆ
家裏は板の古り来て反れてゐる町の生活の見えて過ぎたり
目が覚めて障子に射せる日の光り腕すこやかに伸しゆきたり
来る者去る者過ぎて変らざる宿屋の部屋を出でて来りぬ
ポスターは雪の降りおり秋の服着たるばかりの我にほほえむ

バスの発つ時間となりて人出でし待合室は斯くせまかりき
バスの出て一人となりし待合室に歌作るべきノートを出しぬ
人等皆行く目的のあるごとし茫々として空は白雲
よごれたるガラスに汚れし景となり空に白雲かかりておりぬ
雲うすれ晴れたる空に影のにぎはふ街となりてゆきたり
濃き影を緑の作る千の谷播磨山並み抱かれて来し
川面を染めて来れる夕茜乱して跳べる魚群見ゆる
西山に日の落ち空に雲浮ぶ茜の色は移りゆきつつ
鉄色に山昏れてゆきあきらかに空と境を分つさびしさ
茎折れて地につきダリヤの花咲けり赤く大きな花のさびしさ
山黒く昏れ来て灯りともりゆく高き処に人は住むかな
白鷺の白の写りてかげゆらぎ冬池の草枯れいて広し
駅前にコンパニオン等並べるを商人我はすり抜け通る
ときの声とよみゆきしは何処に消え合戦の跡と標されて立つ
この山を駆けしもののふ兵粮を担ぎし奴もありたりしかな

本心にあらぬ言葉の出でていつ吐きし言葉はなさねばならぬ
前にいひし言葉が今の言葉生む思ひ何処か離りゆきいて
不合理と思へど我は肯きぬ立場と言へる化物の故
断ると思ひおりつつ肯きぬ首と心の乖離の深し
休業と書かれし看板倒れおり閉ぢし扉のさび赤くして
一時間貸自転車四百円此処高原の駅にてありし
血縁の集ひ建ちゐる墓石の各々もてる影を見ており
寄せる波返せる波の打合える小さき池の岸と思へり
微小なる我となる故海波の果てなきものにながく立ちたり
海の波寄せ返しゐる単純にかえらんとする歩みなりけり
草まくら一人待ちゐる冬駅のかげり来れば室内に入る
枯れて来てふくらみもてる尾すすきの原ゆく歩みしたしかりけり
墓のごと高層ビルの並び立ち夜更けゆきて灯り少なし
忘れしは魔の走りたるごときにて歩める今も危ふかるかな
連なりて走る尾燈のくれなひも闇の深さの中なるさびしさ

谷に湧くもやいに朝の山ありて家の白壁いくつしずもる

連なりて朝を勤むる人下るこの山何処に住む家ありて

我が前を走りすぎゆく脚の群高校生はバスに競へり

汽車降りてバス停迄の短きを若きは競ふ脚をもちたり

少女立ち席をゆずると言ひくるるを断りなさぬ老ひとなりたり

列車降りバス停迄を競えるは未来へ駆る脚と見ていつ

轟音となりてトンネルに入りおりぬ狭きは音を高くひびかす

止まらん思ひも土に手をつきぬつまづきて老の深さの来る

転ばざる感覚すでに失せたりとひざにつきたる土を払ひぬ

鳥飛びて落ちて来りし枯葉あり其の後山に音のあらなく

十あまり超高層ビルの並び立ちテレビのままの新宿はあり

見上げゐる瞳くらみぬ人間の親縁超えしビルとど思う

雑踏のこの人達が作りたる超高層のビルとど思う

階上に登りて見んと思ひしが近くに寄りて高きに怯む

電車去り広く空きしも束の間に人連なりて階下り来る

降りゆきてはなざれ入り来る人波に押されて東京の駅はありたり

園児等の去りてゆきたるしずけさにはるかな山の青く澄みたり

憚らず車内にシャツを上げてゐる少女はまだ乳ふくらまず

変りゆく体の愛しみもたざれば少女はシャツを捲り上げおり

頬寄せて写真なるらし見ていしが互の肩をたたきて笑ふ

雑踏の街より乗りて展け来し田の平がに救はれており

死者の目は動かぬものを昼すぎても茫々として空の曇れり

傍に置きたる本を甘栗の皮幾つかをむきいて忘る

腰落し大きく曲げて魚売らん缶を背負ひし老婆等立ちぬ

夕波の轟く音を耳の海磯のなぎさはもち帰るかな

山なみはかすかに青く浮きゐるを孤客我のみ瞳の遠し

白髪をもちてゐるれば一つ空く席とることを人等よゆるせ

つまずきし若きは少し跳び上り何なきさまに歩み去りたり

窓なべて蒲団干したるマンションのひしひし人は住まひいるかな

着飾りてアパートの階を下り来るローンに苦しむ人かも知れぬ

押し合いて乗り来てたちまち声満ちぬ幼稚園児おのずからの声

乗りて来し園児に席を作りしが靴の汚れに悩まされいる

暫くの眠りをさめて席の空く広き列車となりておりたり

飛び立ちし鳥の羽音にふり向きてゆれいる紅葉の輝きありぬ

山蔭の池に幾つか鳰の押す白きさざ波立ちておりたり

円型の白き小波幾つかが移れる見えて鳰およぎおり

美しき女の説話の輝きに秋澄む月は空を渡りぬ

泣ける子を人等笑ひて見ておりぬ如何なる経緯ありたりしかな

母を打ち泣き反り返る幼な児は我が記憶なき我にあらずや

声を限り泣きゐる幼その声で貫き生きん人のいのちは

方形のビルの向ふに季移る桜紅葉のありたりしかな

秘の酒はこの町昔は栄えたり土蔵開きて鍬なぞを置く

紙や藁川辺の草木にかかりゐる草木倒して出でたる水は

白壁の映ゆる土蔵の川岸に並びて映れる歴史はとうし

壁厚き土蔵幾つも並べるを窓開かれて如露など吊るす

三春駒、三春人形かぐはしき男女(おとこおみな)の名残りなりいて

銘果とふ看板掲げし店多く時にひさげる人影のなし

山と山囲みし中の街細く衰えゆくを当然とする

その昔要衝として栄えたり高く古りたる家並みがつづく

その昔田舎にありし郡山此処より多く勤めに通ふ

山蔭に日の昏れてゆく時早くシャッター下す音響き合ふ

夕昏れとなりて閉せる店多く夜を歩める人まれにして

灯を点もし来れるバスより若き等の降りぬ朝を出でたる人等

その昔富蓄はし蔵ならん今開かれて芋なぞ並ぶ

古美術の店をと探し尋わしがあると言はれつなしと言はれつ

三春人形と書きて並べる家のあり暫く立ちしが森閑として

夕暮れと戸の閉ざされて山峡の街は間を置く外燈照す

電柱に外燈点り照しゐて街の背後の山高きかな

外燈は道一すじの街照し迫る背後の夜の山黒し

次々と戸の閉されて灯り消え外燈幾つ残りて照らす

戸を閉ぢて灯り少なき峡の街さびしきものに歩み出でたり

人を見ぬ道広くして家々の連なる軒の夕闇黒し

ひしひしと迫り来れる夜の闇山の黒きに瞳対ひぬ

手のノブは冬の朝の鉄の冷え出でねばならぬドアを押したり

熟睡をなしたる朝の目を上げて宿の玄関立ち出でてゆく

山峡の今はさびれし町裏に幾基大きな墓の立ちたり

駐車場と書かれて広き奥に立ち壁崩れたる土蔵しずもる

屋根抽きてひろがる梢が家々に見えてこの町たりて来りぬ

大太鼓まだ売れるのかと大鼓のみ並べる店を覗き込みたり

太鼓作る業を伝へし時ながく栄えいたりし町にあるべし

青き赤き色を塗りたる皮はりし太鼓もありてこの店ながし

大太鼓色塗る太鼓なぞ並ぶ古き時代のさながらにして

みのを着る姿に積む稲累なればこの辺一揆多かりしかな

霜に萎えし桑の葉群の畑つづき青く枯れたもののさびしさ

駅前に銘菓の看板ひしめくを老ひては食ひたきものの少なし

ながながと尿の出ずる出しおえて解き放たれし吾のありたり

車窓より指を差しゐる人見えて紅葉幾株日に照りおりぬ

山迫る家は庭先せまくして何処も明るき花を咲かせぬ

峯近く通る列車となり来り重なる山は悠然と見る

くれなひの鮮に顕つつたうるし我はくぬぎの枯れゆくを見る

鎌もちてすすき刈れるを振り返り見ており遠く鎌売る我は

背を向けて白き標柱立ちおれば読めざる心少し騒ぎぬ

いかつき顔したる男がおのが子にせがまれジャンケンなしはじめたり

幾重にも山竝み見えてあはひには人生きるべき田畑を抱く

藁焼きし跡くろくろと田に見ゆる人いとなみしもののしたしく

身を灼かん苦しみもつとも雑踏の中なる一人の歩み小さし

中腹に植えし葡萄の棚見えて山なざらかに平に下る

鈴虫のにわかに数の減りしこと聞けば雄食ひ卵産むとど

雄食ひて卵を産むこと人間の性にもひそみゐるにあらずや

雄食ひて種族を保つ鈴虫の性はあまねくもてるならずや

雄を食ひ卵を産まむ虫の性鬼女に思ひの至りて止めぬ
雄食ひて卵を産む鈴虫の人も鬼女の話しもちたり
どの店もこけし人形なぞ並ぶステーションビルは唯に歩みて
バスを待つひまを一すじ青き峯見えいて仰げるものは見飽かぬ
かすかなる青となりいて山並みの一すじ高く天にかかれり
頬かぶりしたる女の並びいて山峡のバス発車の近し
山峡に帰る老女等それぞれに購ひて来し物を見せ合ふ
見えおりし山並何時か沈みいて我が沈黙は闇より来る
バスを待つ者減りゆきて二人のみ老婆は我に何処えと問ふ
盃の空きしを待たず注きくるるみちのくおばこ指白くして
なめこ汁吸えばたちまち注ぎくれてここみちのくのいたく酔ひたり
この胡瓜おらが漬けしと出しくるるを腹満ちたるに一つ食ひたり
乳熱き体温肩に覚えいてその夢見たる所以は知らず
起されし朝の六時この家の男はすでに出でておりたり
借金に喘ぐと言ひつつ来る嫁のために新たな車買ふとど

六、七、八　三月仕事のなかりしと繰り返しつつ酒に額照る
案内を見しよりしまひおきたりとしめじの汁は三杯替ふる
掌を開けば光り亘りゐるいのち蓄はふながき時あり
時ながくあつめて経りしまな底のしずかなるかな亘る陽差しは
いとなみしたつきの業は今すぎていのち表はす新たなる手は
激流の時すぎ去りて平かに河口の岸辺を写す瞳は
我が横をすり抜けゆきて脚早き高校生の靴裏つづく
ヒューム管高く積みたるトラックが山の坂道登りゆきたり
園児等の声去りゆきて何処にか水の流るる音の聞ゆる
襟立て歩む街角みどり透く葡萄一粒落ちていしかな
我を待つ手拭き茶菓子を卓に置きこの家人の何処へ行ける
となり家の出入りの顔なぞ覗ひて人居ぬ家に一人待ちおり
岩ばしる水を引き来て山峡の庭先多く鯉をやしなふ
水上に農具洗える人の来てひれ振る鯉の見えなくなりぬ
轟きて水の落ちゐる音聞へ道に添ひたる流れの早し

足浸す思ひは川の水澄みて底ひに白き砂のゆらめく

草たけて枯れたる原の一ところ耕されいて双葉をかかぐ

くれなひの葉影落ちゐるくれなひの下葉の色の少しく濃し

手をつきて今日わあと頭下ぐ去年は障子にかくれておりし

母の背にかくれいし子が手をつきて挨拶なしぬ一年経たり

八幡は戦の神を安産の文字も書かれて守護札を売る

どの神も札に安産と記しおり其の危さに我も産れぬ

寒風を帰り来りてストーブにやや温もれる時にふるいぬ

いかつき顔もつはやくざの親分となりてテレビのドラマは進む

顔のもつイメージにテレビの役ありて我が適役なぞを思ひぬ

パンツ見ゆる脚に出で来し画面にて怖れもたざる名を告げており

噂多き女なれども清純の役演ずべき顔をもちたり

演じゐる乙女心のきよらかに泣かされており私行は知らず

人として向へる我と商える我との乖離知らずありたり

面をつけて演ずる我が我が真なり言へる言葉も今は肯ふ

大きなる数字を見るはたのしくて小佐野の資産八兆とあり

打ちつけて風吹き来り山の峯白くけぶるは雪の降るらし

風塵のつのり来れる道となり鞄を楯にかかげて歩む

くすぶりをもたざる炎となり来り燃焼おはりに近づかんとする

おのずから将たる人のあるならん継ぎて演壇に登り来るも

糸取りをなせる幼女の像を建つ横手駅前眺めつつ行く

幾枚の残りておれる枯れし葉もゆるして置かず冬となる風

うねり伏し吹かれていたる葦原の夕べを元の姿にありぬ

壌すには費用がかかりすぎる故色塗り直すと高き煙突

この店も量販店の安きこと言はれおりつ致し方なし

剣の神武御槌を祀りおりこの山里の紅葉映ゆるを

千切れつつ雲は頭上に早いや見えてトタンを打てる雨の音あり

束の間を雲走りたる道濡れてわだちの跡の白く光れり

金お　どこも明るく点りたる夜の街過ぐる鎌売る我は

獲り入れの芥燃やせる人影煙の中より出でて来りぬ

新しき木肌明るく照らされて夜を家建つ人等の動く

お茶うけに出されし茄子の漬物の箸見えざるは指にてとりぬ

煙のみ見えておりしがあかあかと炎顕ち来る夕べとなりぬ

生き死にの意味を分たぬ我の目に黒きつばめが窓よこぎりぬ

亡き母が溜めておりたる目の涙かなしみのみがいのちつぎゆく

どの家も菊を咲かせてみちのくの刈田蕭條と秋暮れてゆく

人家見え菊の花見え蕭條と広き刈田を列車走りぬ

元気でと言ひたる人に肯きて生きゐる意味は己れに問はむ

タクシーの終点にして上りたるメータに暫しこざわりており

黒き雲何時か生れいて亦来る手に降る細き雨の冷えたり

黒き雲去りゆき再び日の光り及び来りて温さ伴ふ

二十分過ぎて来りしペンチにて同じ姿に老婆バス待つ

止みしかと見えたる雨の降りおりて背広の襟のあはひ冷えたり

刈りおえし稲田の面を渡る目のひろびろとして一年ゆきぬ

ながかりし短かかりしか一年の梢の葉群散りてゆきたり

訪ふ声の何処か消えて応えなし田舎の戸口開かれていて

オーバーを着けたる人の並べるを出張員我は服の襟立つ

蜘蛛の子の散りてゆきたる数知れず何処か修羅の生れゆくべし

おでん食ひ傾けてゆくコップ酒一人の宿を出でて来りぬ

軒先に吊るしてありし玉葱かケチャップかけて卓に盛らるる

海見ゆる席に移りて体温の残りおりたるしたしさありぬ

木の葉散り稲の刈られて晩秋の動きもたざる原はありたり

それぞれの石の形の組まるるを影あらされば一さまに見す

視野遠く果てて消えたるその後を鉄路は我のまな底に伸ぶ

叱らるる声に頭をすくめしが卓の下より猫は覗ふ

らんらんと光りゐる目を我の目と合ひしときより猫は細めぬ

ねずみ食ふその惨虐も秘めもつと猫しなやかに我の手に添ふ

ねずみとるその素早しさは出しやりし手に添ひ来るしなやかにして

小さなる生死おろそかならずとも蜘蛛の子無数に散りてゆきしは

うね直ぐく耕されいて山の中土乾かぬは人のおりたる

夕暮るる山中の道鍬担ぎ下りゆきゐる老ひし人あり

山越ゆる道つらぬきぬ人ながくねがひ来りしものの雄々しく

道すぐく山につづきぬいにしえのくねり登るをトンネルとして

発車ベル高く響きて幾人か改札より走り出で来る

駅裏の倉庫は灯り点りゐず停まる車窓の闇にしずみぬ

灯の来り後に去れる夕闇の車窓に写る我が顔も見つ

刃の欠けし鎌が机に置かれあり我が商標のラベル汚れて

夕闇の駅を幾つか過ぎ来り我の思ひのさびしさも過ぐ

蜘蛛の子の散りゐるうちの幾匹が残る無惨に生れ来りぬ

入り乱る車の音の更けて止みトタンを打てる細き雨おり

止むとなく雨の降りおりトタン打つ音の高きは木より垂りゐて

降るとなき雨にいつしか道の濡れ空をうつして白く光りぬ

天原につらなる果てより波寄せて大海原は一つたゆたふ

沫立ち岩乗り越える万の泡もぐりて湧きて盛り上りゆく

波立てる青さの底ひ限りなし割れて砕けて白く躍りつ

天地を分つ力は海波の果てなき方より寄せて轟く

ゆるゆると寄せて来れる万の波大海原は一つ動きて

寄せ来る波はかはらぬ浜の伸びこの単純のはかるべからず

ゆるゆると寄せては岩に沫立つ万波に海の水は動きぬ

鉄路またぐ陸橋成りて車行き山ふところに家並びたり

ゆるゆると寄せ来る波は海動く天地分つとうき力に

昏れて来て灯りひとしく点もるればたつき異る家々ならん

ならの幹くぬぎの幹松の幹かすかにくらく山はありたり

松の幹並びて小暗き山中に赤きうるしの一群おりぬ

楓より赤き造花の挿されおり移らぬものの単純にして

秋の造花見て来し瞳に草紅葉移れるものの翳限りなし

枯れし葉を散らせる風の雨を帯び襟を押えし人等の早し

列車待つ窓明るみて野に差せる光り此方へ及び来ており

駅前の広場に光り及び来て暫しの歩み出でてゆきたり

風止みてうねり伏せいし穂すすきの直く立てるを見まもりており

山の峯はしれる雨の屋根たたき越後平野はすでにかすみぬ
千切れつつ走る雨雲空覆ひ沫立ちたるプラットとなりぬ
行き行きて倒るるところど墓はあれ老惨とふは許されていず
購ひて来たるばかりの洋傘を忘れし列車出でてしまひぬ
刻々と雲は密度を増してゆく駅出る頃は雨かも知れぬ
プラットに車内販売の女二人語りもたざる頬つき向ふ
園児等の騒げる隅に本を読む互がもてる一つ時にて
雨止みし雲の端より一すじの白き光が地に下りぬ
プラットの階段降りつつ旅ながし軌道光りて家郷えつづく
山深き羊歯の葉蔭にかくれいて生えて来りし白き花咲く
店頭の柿栗みかん梨りんご一つを売りゐず通りすぎゆく
夕もやに山は沈みて残照の壁しろしろと街はありたり
エプロンを脱ぎて笑ひの消えし目に請求書の照合をなす
チェックをおえてしばらく請求書を見ており次の言葉を待ちぬ
エプロンを脱ぎて商ふものの目に請求書と言ひて手を出す

刈られたる田の足跡に水溜り夕べの茜輝きており
おのずから瞼は閉ぢつつ睡られぬ日々重なりて出張ながし
驚と目を合はせて歩む池堤距離遠ければ飛び立ちゆかず
笑ひたるおのれの声に首すくめ女子高生はあたり見廻す
自らのなせる重さに耐えかねて枝の裂けたる柿の木ありぬ
芥焼く野火消えおりて山の端にうすく棚引く煙のありぬ
遠野火の何時しか昏れてあかあかと顕ちたる夕べの炎はありぬ
あかあかと野火は暮れゆく夕闇に顕ちまさりゆくもののさびしさ
くすぶりておりし芥があかあかと顕ち来て夜の闇はありたり
永遠の形を誰ももたざれば積まれて無縁万霊の石
きはまりて白く咲きたるかますだれ差せる光りの一斉にして
畦の草夕べの闇に沈みゆき一人の歩み吾は持ちたり
咲きのかぎりはなびら開くかますだれ庭に光りの満ち亘りいて
文字を書く手許明るみガラス戸に干せるシーツの白輝きぬ
家の隅にうずくまりてタイル貼るかすかな音が一日ありぬ

鎖張り立ちいし犬は歩み去る我にふたたび小舎へもどりぬ
青空の限りなきものに瞳おく貫かざりしこころざしあり
無礙なりと見えゐる空に飛機通ふ路きめられてゆるさざるとど
あたたかき飯は食ひつつたたかいのはるかかすみて過ぎ去りゆけり
まだ履ける靴捨てられて戦ひを経て来し瞳は暫しとどまる
死して後石に名前を刻まるる並び立ちゐる石の冷えたり
来る者去る者すぎてかはらざる宿屋の室を出でて来りぬ
宿帳に名の記されて泊りたる跡なき宿の室を出でて来りぬ
電燈を点もし寝具を引き展べて一夜すごさむ部屋とはなりぬ
電燈の笠の安きを指さすに木製にせよと大工は言ひぬ
支払ふは此方なるにと思ひつつ工事進むを黙し見ており
スイッチを切りて更けゆく夜の底ひまなこにすめる深き闇あり
冬池となりて底ひにすむ鮒の目は泥のみをうつしておらん
冬水となりし底ひに穴を掘り鮒はさびしき灯りを点もす
夕昏るる旅館に坐りゐたりしが人の声する窓を開けたり

書凪ぎの庭に光りの澄み渡り花殻一つ落ちてゆきたり
腸壁のごとアーケード架りいて蠕動なしつつ人群つづく
葉の裏の一つ一つに闇すまひ夏となりたる木々繁り合ふ
この店も注文あらず昨年は如何なりしか手帖を繰りぬ
石材を切りたる跡の垂直の濃き影立ちて山は晴れたり
縦横に張りめぐらせる電線のこの錯綜に人は営む
降りかかる柿の落葉を手に止めぬ移れる紅の一ひらにして
海の水輝くところを通りすぎかく小暗くて山はありたり
還り来し秋に楓の色深み草のもみじは今年あらなく
建物の壁のうすさに山峡の駅前の店竝びてゐたり
川と家一つまたぎに架りゐて我が小ささに橋脚すぎぬ
時折りに魚の波紋が拡がりぬその平かに山の池あり
夕昏れて沈みゆきたる地の表かすかに落葉の鳴る音聞ゆ
街頭の其処此処に立つ三、五人この町何かありたるらしき
吾が影の夕べの道に伸びゐるしが昏れゆく地の色となりたり

たき火しておりたる人等別れゆき夕べの山の村はありたり

草道を歩める童を目に追ひて人家四、五軒山すそにあり

埋められし沼にすみゐる魚ありき一夏二冬の時すぎゆきぬ

夕闇をしつ走なせる尾燈見ゆ夜々帰るべき家を目指せり

下車駅の近きを報せポケットに残る甘栗幾つをしまふ

坐りゐし八時間半の背の痛み改札口を出でて伸ばしぬ

人等昏寝しずまりたる夜の廊下トイレの前の灯りが照らす

読みおえし新聞そのまま甘栗をむきたる皮の捨場となりぬ

次々とかかりし電話を話しおえ不景だねえと此方を向きぬ

しがみつく梢の幾葉を木枯しはえり首つかんで幾度もゆする

網もちし過去あたらしくへら鮒は背びれを立ててさかのぼりゆく

何も売れん不景気だねえの声の下請求書は机に出し置く

游神

茫々と霧覆ひ来て一本のすぐく立ちたるポプラはありぬ

晩春の陽が温むる水おもて泥鰌は草によりゐて浮ぶ

ふり上げし頃に聞ゆる槌の音川の向かうに家建ちをりぬ

畦の草刈られて青き苗代田農夫は煙草を深く吸ひたり

溝ぶしんをはりて堤の草刈られ常より遠き歩みとなりぬ

頭のみ泥にかくして蛙逃げ初夏の原道うらら陽の照る

もなかの餡空きて少なき峡の宿窓に迫りて峯昏れてゆく

商ひて熱れる足の沈々と眠れぬ夜は老いたりしかな

みつめゐる長距離トラックの運転手ひたすらなるは怒る声もつ

谷川のすきとほる底の白き石水は光をふふめる強し

一匹の鯉跳ねあがり堀中の鯉が俄かに動き初めぬ

目をこらしおくれしバスを待ちてゐる唯それのみに過ぐる時あり

幼な児は幼な児の傍に歩み寄り連れもどされてまた歩み寄る

船室の隅に一人でビール呑む隣の人と関りあらず

船室の夜更けて一人呑むビール壜とコップの触るる音する

アンテナが触手の如く立てる時夜深き宿に一人坐れり

商ひし一日の歩み暑くしてビール確に喉下りゆく

対応の言葉幾つを考へ来し営業課長はほほえみゐたり

日報を書き終へて窓の闇が見ゆ過ぎ去りし日々来らんとする日々

ためらはずはまちの頭に鉤打ちて行商の女金受取りぬ

掌に受くるものとして雪の降りをさな等居れば歓声のあり

一本のそそり立つ木は英雄にあらねど俯してわが歩みゆく

人は蟻ビルの谷間を歩みつつワイシャツの衿よごれゐるかな

蜘蛛糸に枯葉下りて吹かれゐしが夕べとなりても落ちずにありぬ

窓ガラス蒼く昏れゆき火を囲む人の次第に寡黙となりぬ

冬池にひそと立つとも白鷺の遇ひし視線は鋭く対ふ

流星の輝きて消え再びを吾が靴音の還る夜となる

ふり向かず鮒をくわえし猫の去り冬原は土の露はにありぬ

棕櫚の葉の半ばより折れ下りゐる今日は風なき冬のしづけさ

はぐくまぬ陽光となりて冬原の踏む枯草の音のみ聞ゆ

撫でやりし野良犬暫し立ちゐしが掌の下に頭持ち来ぬ

バスにして三十円程歩みたり尾花、桔梗、藷を堀る人

天に向き高く組まるる鉄塔の尖端かつて吾も希ひき

炊事場に水のもれゐる音聞ゆおのおの部屋に去りゆきし後

黒き木影黒き吾が影夕されば素直な歩みとなりてゐたりき

山の上に折るる煙は風あらん旅人吾のみ瞳の遠し

誰にしもあらざる吾と思ふ時汗疣の痕の未だに黝し

風葬を恋ふるならねどすきとほる山際青き方へ吹きゆく

点さざるテレビのガラスに庭の樹の蒼し一人の昼餉ををはる

留守居する一人の飯に蚊の羽音流れて昼のしづけさ深し

不幸とこそ言ふ事なかれなめくじの一尺ばかり這ひたりし跡

争ひし己をかばふ言葉さがす吾を曝して夜のあかりあり

とたん屋根うてる雨音のみとなる聞えゐし妻の声鳥の声

募り来し雨の降る音のみとなり鈍き瞳を犬は向けくる

夜をさめて窓より沼のかすか見ゆ水の底ひに生きる魚あり

秋茄子の幼な果の紫の映ゆる光を共に浴びゐつ

部屋内に落葉が一つ紛れゐて一つと言ふは自己に関る

不意に部屋を出でて来りぬ手形帳と売掛帳を見てゐたりしが

バス賃を払はんとして掌に耳穴掻きし釘持ちゐたり

朝飯の間に合はざりし怒りにて食堂出し時をかしく笑ふ

幼な児の両手に囲む水の中目高は黒き瞳もちたり

ひたすらに火を見つめゐる刀工のああ彼処こそ結界ならん

看板を高く掲げし裏側はさびしブリキの屋根が続けり

軽蔑せる母子ドラマを見てゐつつ涙流せる吾がありたり

人等皆帰りし後に時計ありそは単純に確かにめぐる

去年より売上げの減り支払ひの増えゐる事を妻に語らず

バインダーの鎌は要らぬのコマーシャル終り迄見ぬ鎌売り吾は

ひそひそと話しゐたるが吾が顔を見しより常の声に変はれり

鉄箸に鉄挟まれて置かれあり昼の休みの鍛冶炉の傍へ

朝未だ明けざる鍛冶場の赤き炉火鉄打つ人の顔に映れり

こび笑ひなしつつおもふ宿取りて飯食む時の寡黙なるべし

山を過ぎ川過ぎてゆく汽車の窓オレンヂジュースは喉に冷たし

エンジンの響きは漁船走りゐて大海原に動くともなし

澄みとほる越路の海にわかめ採る少女の腕は白くありけり

すみとほる越路の海の石蕗青く少女の腕はゆらめきて採る

夕陽映し海凪ぎをれば吾は思ふ網に獲られし魚あるべし

頭下げ腰曲げ雨の中走る同じきざまを吾もなしゐる

山の緑いつしか昏れし車窓にて吾の顔ありあごの短かし

洋服を着けたる時は金が要ると笑ひて鍛冶工葬式にゆく

与平鳥啼く故眠れの亡き祖母の声も削りてブルドーザ動く

目を開けて吾を見し犬はまた閉ぢぬしとしととして朝よりの雨

ゲージの中生きる限りを鶏のとさか激しく動かしくらふ

あらき呼吸のみが聞えて鶏の犇々肉屋の籠に詰めらる

バス一つ早く着くとも待つのみぞ時計を持てばひたすら歩む

鎌を金に金を鎌にと代へつぎて老いて終らん一生なるべし

雇ひゐるパートの女に休み告ぐ今年はこぞより九日早し

乱売の防止出来ぬと語りつつ亦明日の夜の集会決める

バス停に出づるに近き畑の畦草小さきは吾も踏みたり

仰向けに寝転び腕と足拡げ宿に一日の商ひをはる

袋入りのみかんは一人に多過ぎて見送り商ふ旅をつづくる

甘きみかん口に満たしつ作りたる人を想へり身近く親し

雨足の次第に視界をせばむ時吾あり汽車のひた走りゆく

黒き貨車置かるる駅の雨細く茫々旅に商ひて老ゆ

煙吐かぬ煙突並ぶ日曜の空は雀の飛びゆくはやし

地の中に埋没さるる基礎杭の太きが真夜の照明に立つ

行き交す列車に乱るる髪の毛の吾あるは常に一人なる時

かかはらぬ他の運命と思へるに救急車の警笛ながし

プラタナス大きなる葉の黒く垂る夜をたちゆく爆音のあり

赤、みどり循れる時にあな淋しどの電飾も負けてはならぬ

夜の闇深まりゆきつ電飾の競はざりせばならぬ街なり

風の無く陽の照る冬の原広し老人出で来て藁切り始む

肩寒く目覚めし真夜を梢鳴り風吹く音が貫きをりぬ

為さざりし約束もちて寝につく灯りを消してあきらかにをり

差出せし名刺読みゐる商店主の表情の動きをじつと見てをり

差出せし名刺しばらく見ゐたるがいらぬと一言云ひて返さる

返されし名刺をもちて出でてゆく吾が背を誰も見ゐるならねど

支店長尻附き中々起きられずバレーボールのけいこ始まる

はなすする音の夜更けて聞ゆるは風邪ひく吾子の学習をなす

ばりばりと骨嚙み砕く音聞ゆ犬が消えたる闇の中より

明日の事にせむと閉ざせし手形帳夕餉を終へてまた取出しぬ

夜の闇は窓のガラスに深くして明らかに写る吾の顔あり

あくびする午後のひととき蠅のとぶ音の一きは高きひととき

シャツのみとなりし軽さに春風の吹きゐる畦を歩みゆくかな

枯れ伏しし中より葦の芽は伸びて池の半ばを領じ来りぬ

谷川の瀬となり音に立つ流れひたすら鮒はさかのぼるなり

頭ふり尾を振り不乱に泳ぐともおたまじやくしはおくれて逃る

クロバーのおほひて一すぢ低き道この村人の減りゆく久し

地に目を向けたる姿勢旋回の鳶は徐に低くなり来ぬ

近々と若き女の静脈の透く時いのち限りあるかな

帰りたる女子事務員の椅子に敷く蒲団は各々違ふ色もつ

夜の壁は溜りし水の反射光ゆれゐて止むと言ふ事のなし

孵りたる幼な蚊の群血を吸はん鋭く尖る嘴をかくさず

本積みて枕に出来る吾の部屋裸になりて背中掻く部屋

蜜蜂の飛び去る音の消ゆる迄立ちをり春の昼と言ふらん

孤りとは問を持ちゐる事なりと闇の中なる明かり見てゐる

赤き頬赤き苺の新しく少女と草の道帰るかな

やすの先鋭く尖り少年は軽々岩を跳びこえゆけり

山削げて海になだるる十余キロ老婆二人が脛浸し屈む

一人ゐるバス待つひまのまだありて山の向かうの山峯淡し

髪の毛を後になびかせペタル踏む少女の脚とすれ違ふかな

車窓より植付け終りし稲田見ゆ心豊けし田舎人吾は

波動くままに揺れゐる海草の海に生きゐる必然も知る

波動くままに揺れゐる海草のゆられてゆれてあくまでしなふ

陽と影の消えて澄みたる裏庭にくまなく白きいちはつ咲けり

棚開けて取り出す鮭の切身焼猫は眼を開きてゐたり

夕焼を血潮と言ひし少年は躰撓はせ石を投げたり

明り窓にさし入る明かりは空晴れて生れし蠅の艶やかに動く

闇米をあきなひたりし男にて高級車に賭博機を積む

同じ表情（かほ）にペン動かせる銀行に待つ他はなき吾となりをり

窓の柱に首もたらせて空が見ゆ流るる雲も茫漠の裡

土深くショベル差し込む若者の汗より夏の陽差し走れり

つるはしを上げて筋肉もり上る若者強き言葉を持てり

はつなつ　五首

洋品店売場あかるく照らされてすがしき夏をえらびゆくかな

シャツ売場明るくともりはつなつのさはやけき老いを買ひ来るなり

理髪店出でし吾が為はつなつの風さはやかに吹き来るなり

若葉翻(かえ)す風が運びてまみ涼し青年の季は遠くを見たり

たんぽぽら絮の離るる二つ三つはつなつの風は地平に至る

くれなゐの一夜増したる苺畑ジュース豊かに口に満せり

くれなゐの苺を手に戴せしづかなりこの紅の何処より来る

花茎の長く伸び来て葉の細く畦に春草まばらとなりぬ

ひねもすをほそほそ降りゐる雨の中あぢさゐの花は垂れて来りぬ

吾が靴もとぐと思へば石だたみなめらかとなりし歳月のあり

洋服の襟の紫ややに濃く濡れ来て親しき春の雨なり

鍛冶工の歌　五首

鍛冶の技習ふものなき仕事場は老いたる一人うづくまりゐる

火に赤く照りたる顔は口固く閉ざして灼けし鉄を見つむる

鎚だこはひび切れ易し赤き肉中に見えゐて炭粉つもる

機械より垂るる油に炭の粉の堆しハンマー打つ時震ふ

裏納屋を改造したる仕事場は昼も電燈点けて刃を研ぐ

灯をしたひガラス戸に寄る白き蛾のひたすら明かり映す目を持つ

電燈を狂ひめぐりし白き蛾の斯く小さくて朝死にゐる

雨止みて光り差したる夏の庭早し虻飛ぶ翅の音する

ガラス戸の明るきに寄る蠅の音越え得ぬものに翅は激しき

声立てて泣き伏すテレビ見をはりて淡々し常の人の振舞ひ

次々と殺虫剤を撒きゐつつ殺意何より易しからずや

たわむるる蝶々が二匹とび来り庭は無碍なる象をなしぬ

よれし服着たる男が粧ひし女を待ちて夜更け帰りぬ

憐れみて昆布買へるに干鱈をもさげて来りぬ甘つたれるな

断りし干鱈をいまださげてゐるこの図太さも商へば知る

手形帳閉ざし来し目が根づきたる胡瓜の確かな青葉見てゐる

野苺は一人に赤しバスの来る時刻に未だ少し間のあり

荷物計れる後に乗りたければ計量器生きゐる如く針揺れ止まず

薹の立ち引き捨てし菜の実をつけて枯れつつ其処のみ青さを保つ

おにやんまの足がときどき乱す故かなしき迄に水平らなり

秋の逝く春のゆく時真紅なる花を庭辺に母は咲かしむ

樫の木の厚き葉蔭に這ふ虫の縞あきらかに夏は澄みたり

味噌汁を吸ふたと言ひて怒る声憎しみは常の日より蓄ふ

同じ事件書かれて見出し反対の記事の新聞が配られありぬ

ガラス戸に降れる雨滴の幾つかが合ひて大きくなりて流るる

記事書ける人のえらべる文字のまま読まねばならぬ新聞と思ふ

干物を取りに立ちたる妻の声此所に聞えて雨降り初むる

蜜々と朝より雲の垂れ込めて常より太き電線見ゆる

西山に雨足下りると見たりしが頬を打ち来る二三滴あり

惨　五首

不意に震ひ動かずなりし蛙ゐて目の向く方に蛇の目のあり

蛇の目の前に動かぬ蛙ゐて何も見てゐぬものの目を持つ

動き得ぬ蛙となりし蛇の前見ざる眼は底なく暗し

口開き蛇が寄るとも動き得ぬ蛙は暗き目を持ちしまま

呑まれゐる蛙がかすか鳴きたるは声か肺気の絞り出さるか

舟木ダム行

道もせに白き花房散り敷きてこの山朝より踏む人のなし

しろしろと道に散り敷く花房をわだちにぢれる通り過ぎたり

舟木湖の堤の草の泡もつは螢かへるか水に灯さむ

平かに広き水面は還るべき心かかそけき吾が呼吸きこゆ

もののいのちきはまるところは炎なす山の緑と出あひ来しなり

吾よりも深く知りゐる事柄を説明なしてゐるに気付きぬ

さかしげに言ひゐる吾と途中より思ひぬ止める訳にはゆかぬ

菜園に通ひて踏む草やや冷ゆる土親しくて老い来るなり

急速に夕映え来り白壁の下の鴨居に鳩止まりゐき

目を閉ぢて風吹くままなる野の中の吾あり五尺それのみにして

かすかなる風が吹きゐて大きなる八つ手の葉末がもつとも揺らぐ

木と土と一つに昏るる夕闇に老いてはしづかな目となりてゐぬ

朝々を目守る山茶花の耀若葉十日思へば緑深みぬ

同じ事なせるかたちは似てゐんか人と犬とが浜辺にあさる

遊学の子が帰り来て灯ともれる部屋の増したる吾家となりぬ

雨の日の一にち暮れて何か足らず思へば人と会はず過ぎたり

拒み来しもの一つづつうしなひて世間のゆるす者となるらし

ふり向かずカルタ占ひなす女一人と言ふを吾は見ており

ブラタナス葉を垂れてゐる昼下り額を持てば額の汗拭く

抱きつきて躰斜めに見上げゐる幼よ母は勤めより帰る

細き雨すぐく降りゐる裏庭のつつじの花は雫に震ふ

捨てられし固き菜の葉が降る雨にいきいき緑保ちてをりぬ

白バラは散りゐて白し夕暮るる前の一とき裏庭明る

川魚の焼きしを食ひをり山峡の家々の明かり早く消されて

さりげなく陳列の前を通りつつ柄木新しきは鎌売れてゐる

錆のごと葉の枯れゆきて公園の冬は止まる人影を見ず

みづからの声に驚き見廻せる少女等直に高く笑へり

トンネルに入りて車窓に顔映りほつれたる毛を女上げたり

石つぶて白く曝れたる冬川のほそほそとして曇天うつす

髪の匂かすかに放つはつなつの少女がうなじ白くありけり

昨日は秋田今日は湯沢に宿りたり同じく窓を満たしゐる闇

お晩です初めて宿りしみちのくの峡に出逢ひし人は言ひけり

小鳥鳴く声も売られて別荘のポスター駅の壁に貼られる

魚の目に縄通されしが干されゐて浜辺へ低き家並みの下る

死するべき吾にあれども百円を高く買ひたる事にこだはる

平らなる沼のおもてと思へるに蛙が蛙唧へておよぐ

医者に行く金なくて絶えし家の跡グラジオラスは赤く咲きたり

唐突に老いは来るかな原の道歩みつ溝を跳びたる時に

煙吐かずなりて久しき煙突は少し煉瓦の色もどりたり

一人故もぎし松葉は匂もつ冬の山路は草まばらにて

人の群離れ来りて人の居る恋しも己が靴音かへる

手のたこに炭粉しみゐる職工に金待ちくれと言はねばならぬ

不意に立ち走り出でたる妻ありてかすかに雨の降る音聞ゆ

督戦のかたちに机並べられ女事務員笑顔絶やさず

土くれの動くと見しは土蛙此方を向けば黒き目を持つ

耕耘機に夫婦並びて乗りゐるは相手にも苦痛を負はさんが為

実の爆ぜて直ぐなる冬の原の草さらさらとして歩みに分る

降りそめし一時のさわぎ収まりてまたそれぞれの部屋にこもりぬ

大きな鞄かたへに置きてプラットの椅子に目を閉づ君もセールス

磨擦故光れる軌条光りゐる吾の部分にきしる音あり

吾を呼ぶ声の無ければ裏山と夕べの闇に沈みゆくかな

犬と犬出会ひたりせば吠え会へり吾の瞳の地平見る迄

どぶ川の泥に生きゐる赤き虫夜半目覚めたる時に思へり

学童の一群入り来て声満つる山峡の冬の駅とはなりぬ

ポケットの財布に手を当て確むるながく乗り来し駅を出できて

その友の乗り来て斯くも表情の動き豊かな少女にありき

同じ程雨に濡れたる人もゐてその傍の席に腰掛く

背負籠置く老婆と二人のバスとなり迫れる山にそひて道消ゆ

一隅にはふり込まれし石佛埃積みたり罰あてざれば

集群　五首

何時しかにとびゐる虫の群れ初め群れに寄り来る虫とはなりぬ

群れ初めて虫はとび交ひゐたりしが次第に動き激しくなりぬ

ゆるやかにとびゐたる虫が群に入り狂ひて舞へる一つとなりぬ

群となり狂ひ舞ひゐる野の虫のすでに一つの意志はうしなふ

菊と葱培かふ畑の多くなり車掌は街の近きを報ず

夕闇のせまる山過ぎ塔先の未だ明るき街に出でたり

船室の隅に席とる安けさも暫しにして切に知る人のなし

鬼の面つけたる幼は挙あげ吾を打たむと構へて迫る

さし交す枝蔭の下の風冷えて音なきものに思ひはとほし

忘られしサルビアの種子が時期すぎて棚より出でぬ憐れまるるな

河馬に似しおのれの顔を語りたる万才聞きし後を笑はず

虫のむくろ残されてゐて蟻のゐず夕べの庭は土より昏るる

灰色の雲たれこめて暮るる窓蜘蛛はおのれを揺さぶりゐたり

夕映えは庭に伸び来てたはむるる犬がくはへし赤き紙あり

無果花を両手に持てる幼女にて友ゐる処を走り過ぎたり

かげろふは数日をのみ生くるとぞ殺虫剤撒ける中に死にをり

これから

長谷川　利　春

人は或る年令層に達すると、その職業による型と言うものが出来るようである。教員、銀行員、農業、土工等何となく其の陰翳が身について来るように思う。リンカーンは四七才と言った。其の頃になると其の人の生きた姿勢が明らかに其の人を刻み上げているのが判るように思う。其の人の型は其の人の生きてきた跡であり、生活のあり方の証左であると思う。

それなれば其の型を決定したものは何であろうか。私はそれは実に退屈きわまりない日々の繰返しにあると思う。私はセールスをする商人であるが、同じ挨拶をして入り、同じ商品を出して、同じような説明をして、注文をもらい金をもらって次の店に入る。一日同じ事を繰返し、亦翌日も繰返し、月々歳々を繰返して来た。そして亦来るベキ日々、歳々を当然の如く繰り返すべきであると思っている。附近の農家の人々を見ても、実に単調な労働の年々の繰返しのようである。

人は多く親子、夫婦、男女、友人の愛、生誕の喜び、死別、生別の悲しみを歌に作る。亦他郷に旅行して、異なる風景、人情、史蹟を歌に作る。勿論、其処に湧き出ずる情感があるであろう。新たな驚きが触発され、嘆声自ら出で来るであろう。其処に心情は増幅され、感覚はより多彩となるであろう。而し表現が真の自己の把握であり、真の生命の顕現であるべきならば、かの日々の繰返しこそ、我々が深く目を向けるべき世界でなければならないと思う。主体的、客体的としての生命は、対象を変革する事によって自己を改革するのである。日に新たなる生とは、瞬々内外相転換する生でなければならない。それは物を作る事によって作られる世界である。真の世界とは対象と吾とが其処から見出されるのでなければならない。旅行や冠婚葬祭は斯かる日常の上に浮游するのである。否日常の一断片である。変哲もない日常こそ真の生命の秘鑰を有すると言わなければならない。

そうは思ってもいざ実作となると茫然とするばかりである。手形を切

っている今、金を払っている今、鎌の目釘を打っている今、毎日行っている故に、如何なる自己が現前しているのか、感覚が鈍麻してしまっているのである。真の表現とは恐らく作日と同じ行為を現象に於て異った切り取り方が出来なければならないのであろう。自己の異なる心情の位置に於て、対象の陰翳の相違を把握しなければならないのであろう。而してそれが単なる自己把握の興味におち入ってはならない筈である。すでに誰かが把握した方法であってはならない筈である。この歌集を墓標として過去と手を切りたいと思う。

髪の毛を摑み読みたる若き日か汚点（しみ）となりゐて雲脂（ふけ）の跡つく
露をおく葡萄の玉の朝の冷え甘きジュースはのみどをくだる
青空の雫となりてしたたるを我は露草踏みて歩みぬ
卓上に黒き葡萄の房置かる一夏はげしき照りの死として
見上げたる瞳をかえしやや伏して歩みはじめぬべったりと雲
一葉のなりたる秋のくれなひの手に取りゐつつ思ひとどかぬ

忠魂碑

終戦もとうき日となり苔さびし忠霊塔に草蔭ふかし
忠魂碑に草生ひ茂り戦ひを知らぬ若き等爆音競ふ
戦ひは罪となり来て忠魂碑めぐり生えゐる草影濃ゆし
兵送る歓呼の声を耳朶深く潜ます者等なべて老ひたり
否まるる戦なりしか鮮血を流せし友の彷彿として
そそぎたる野の鮮血は何なりし忠霊塔は草深き中
めぐりゐる歴史の駒の一つとも流せし血潮忘らるるよし

奈央　三首

保育箱の中の小さく赤き顔つらつら眺む亦も返して
足首に名札かけられ足裏に姓を書かれておりて小さし
我が家の姓しみじみ親しくて書かれて小さき足裏のあり

鋏より剪られて落つる髪の毛の伸びたるのみに過ぎし月日か

けだものの如く眠ると思ほへば床にしずかな呼吸をなしぬ

あはあはとガラス戸越しに差せる日に過ぎし時あり昨日亦今日

すぎこしの悔しき事も肯ひて古稀近き手のたるみの著(しる)し

びっしゃりと音立て障子閉されぬ沈黙は亦抵抗にして

ゆるゆると首伸ばしゐし白鷺の一瞬動きて魚くはえぬ

萩の花半ば散りゐて色褪せぬせわしきのみにながく過ぎたり

秋草は青く小さき花多し犬飼ふ故に歩みて知りぬ

胸を張り髭蓄へしこっけいを我はなさじと行き交したり

足なくて動くと思へばなめくじに塩をかくるを暫し待ちやる

花季過ぎし菖蒲刈られて萬条と裏庭の堀秋を迎へぬ

一つ身の致し方なし碁を止めて法事に行かん黒き服着る

棲みつきし野良猫ありて開け放つ慣ひもちたる吾と知りおり

閉したる障子に光り寂(しず)かにて距てし蟬の声のこもらふ

五尺のわらじ傍にさがり仁王立つ願ひ掛けたる人のさびしさ

牙をもち眉逆立てし像のあり作りし人のおののき見えて

この夏に使ひし噴霧殺虫液缶の幾つが棚に並びぬ

殺意かく常となりゐて農薬の空となりしを集め束ねる

夜の風に落ちて散ばる葉のいくつおだしき朝の光りが照らす
燕雀の心なるとも落穂など拾ひ足りゐるいちすがしき
死も淡く生も淡くてこやりゐる天井板の節を数ふる
細くながく夜を鳴く犬の声ありて黙してゐたる母のさびしさ
一冬を何も映さぬ目のありと泥に穴堀り魚のひそまる
何方かが負けねばならぬと思ほふに地に伏し男涙流せり
入選にもれたる位と思ほへど女語れる口調せわしき
風邪に伏し水もしたたるよき男などと言ひつつ鼻を拭ひぬ
白魚の指もて酒を注ぎくれしバーに隣りしそのひと知らず
裡ふかく狂気は育ちつつあらん今日いちにちも何事のなし
鋭き目を我に向けたる野良猫は何見定めしゆるゆると去る
年々に宿根太くなしゆける秋海棠はうすべにの花
夕闇の覆ひ来る中水白し帰りて己れを問はんと欲す
一燈の明りをとりでとなして坐すひしひし窓にせめぎゐる闇
水涸れる小川となりて合流の相うつ音を夕べにもたず
あやまちといえども事実因と果のくびき背負ひて歩み来りぬ
宿命とは何にありしか一度のあやまちながく背負ひ来りぬ
一枚の蒲団といえども来所問え体あたため冬の夜を寝る

中華そば流して売れる笛の音の買ふには細く離りゆきおり
寒き夜を吹きて食ひゐる流しそば点したる灯が顔のみ照らす

青森　ねぶた祭

柔かく甘きほたての貝柱つがれし酒は一息に飲む
びっしりと道沿ひ埋むる人の群拝み分けつつ横切りてゆく
警官の阻止せんとする手の動き無視して道を駆けつつ渡る
書かれある大阪観光団の席恐れ入りつつ腰を下しぬ
跳ね上る踊りはげしき人の群悪鬼ほろぼす山車の引かれて
ねぶた皆道一杯の大きに灯り輝き練りつつ来る
片腕を摑み立てるは渡辺の綱かまなじり朱に裂けつつ
すさのおのたたかふ大蛇火を吹くを頭が一つと指にさしつつ
跳ねとべる踊りに鈴の落ち来り拾はん子等の制止を聞かず
鬼同丸は大江山にはあらじかと故郷近きは瞳凝らしつ
信玄の武者行列も加はりてねぶた祭のいよいよしげし
終りかと見えて輝く山車来りねぶた祭の果てるともなし

十和田湖

傘松の緑の梢色浅く吹き来る風に全山ゆるる
簡潔なる白とし幹の直ぐく伸び交す葉群の作す蔭ふかし

白き苔青き苔さび追入瀬の流れを覆ふ木群古りたり
差し交す葉群の下の明るくて見ゆる限りをみどりさゆらぐ
葉を濡らす降るともあらぬ細き雨傘をささざる歩みなるべし
突き出ずる岬は雨にかすかにて茫たり湖の波の消えゆく
緑濃く交し覆へる道の冷えほてりもちゐる顔とおぼえつ
降る雨に杉の葉群の緑濃く登る秀並のいただき煙る
岩を縫ひ流るる水を賞でる声我は古木の肌に触(さわ)りぬ
びっしりと並ぶ車の屋根光りこの山奥も人の溢るる
しろしろと水に光りの残りゐて見えゐし山も闇に沈みぬ
ひたひたと岸打つ波の音聞え歩みておりし人等帰りぬ
牛テキの文字は見えつつ貝焼のいろいろ合せと書くを頼みぬ
飲む酒の量の少なくなりたるもおのずからにて素直にあらん
朝早き湖の畔の遊歩道そぞろ歩める一人現はる
屋根を垂る雨滴のありて平らなる芝生の草のみどり明るし
窓に見る芝生の中の白き花インバチェンスの文字は凝して
そそり立つ山が囲みてみずうみの水平かに年の経りたり
葦なぞの生えゐぬ岸の水澄みて波は岩より岩へと濡らす
ひたひたと寄せて渚を打てる波湖畔は未だ人声もたず

いずこより現れおりし鳶のあり人見ぬ湖を低く飛びゆく

この辺に棲めるせきれい二羽なるか人無き朝を自在に歩む

屋根を垂る滴もいつしか見ずなりぬ朝の湖畔に出でてゆくべし

動きゐる雲の次第に白くなり時に陽光の湖面に射しぬ

墓を作る

亡き母の面影まぶたに新しくああ竟に死は解けるなき問ひ

死者生者分てる時の短かくて吹き来る風に木の葉散りおり

ちちははになしてやりたる事のなし最も堅き石彫り刻む

顔知らぬ先祖の名前連ね書くかれ等の汗によりて我あり

先祖の名並べ刻みてゆくりなし磨きし石に光り降りくる

古と未来は石に一つにて祖先刻みし前に立ちおり

刻まれし黒く艶もつ戒名の墓誌の余白は我等に残す

死者と吾つなぎゐる墓誌刻まれし名前の後に余白を残す

数え得ぬ時を墓石の表はすと刻みし名前はくり返し読む

この石に名を刻まるる時思ふすぎこしの日々淡かりしかな

つつしみて花を供えて香を焚く僧の誦経の亘りゐる中

ひしめきて小さく並ぶ村の屋根あはれ争ふ人等の多し

干されゐる手拭流れ庭の木のそよぎて風の吹き来る中

流るるは水にあるかな幾起伏見つめて我は腕くみしまま
胎内の暗さに闇の覆ひ来ぬ新たな明日の生れ出ずべく
突然に静けさ破り鳴り出でて電話の音は脅迫のごと
食べてゐる茶碗を置きて鳴り出でし電話に走る奴れいの如く
一日をのびたる髭にそり当てて出でゆく今日の顔のととのふ
てっせんのつぼみの一つが綻びぬ先まだ固くあまた見えいて
裏庭に秋海棠の花咲きぬひと月程は花のなかりし
見なれたる山が見え初め帰り来ぬ見なれしもののしんしんとして
止まりて眺めし蛙は逃げてゆく敵にてあれば殺されいるぞ
コンピューター覚えたりとど停年に残る年月いくばくも無く
コンピューター覚えざりせは勤め得ぬと白髪すでに半ばを領す
広告の裏に書かんでもといふ裏の白きを撰りて揃える
葉は知命夕風地を冷し来て渡る木末のさやかにゆるる
年々を植え代えおりし母の亡密に過ぎゐて水仙咲きぬ

美　好　三首

わが為に鮎煮一匹残せしと三日行かざる美好のママは
残しくれし鮎煮の姿正しくて先ずは冷えたるビールを満たす
好めると言ひしずいきが煮てありぬこの店通ひ来る事ながし

我故に変転はげしき母なりき塚の被ぎし落葉を除く
木にあれば天をしのぎてそびえいん老斑浮きて乾くをもつ
秋茄子はつややかにして古稀となる手に味噌汁を作るだけ持つ
かかはりのあらぬといふも亦寄りて近所の噂を妻は告げくる
熟したる実のおのずから落ちゐるを尚も見るべく歩み止めぬ
野を焼ける二月の炎新たなる芽吹きを持たん先ぶれとして
トタン屋根打ちたる雨の過ぎ去りて吾あり室の静謐に坐す
木蓮の花が今年も咲き盛る母が托せしこの世の花は
着く頃と思ひおりたる封信が本の下より出でて来りぬ

今　昔　四首

自動扉に慣れて暫く立止まり今昔の戸は手をもて開く
障子越す淡き光りに静かなる呼吸となりて抹茶を受くる
雪隠の由来問ひつつうすみどり泡こまやかな抹茶はすする
入り来る靴音聞え新聞を拡ぐる我は男女を知らず
昨日会ひ蛇にあらずや偏平にタイヤーの巾につぶれ死におり
明日は亦今日を嘆かひ生きゆかん累々として過ぎし歳月
職人を病気にさせて送品のおくれをなじる電話を切りぬ
はれて来し午後の光りに水玉の青き模様の服が干しあり

霊迎ふ仏間に菓子など供えおり生きゐる時はなしやらざりし
ふくらみし服の危く頬未だ幼なき少女胸張り歩む
顔上げて夜のガラスに闇が見ゆ視野沈めたるものの深さに
庭の木々沈む深さに夜の闇ありて一人の吾の坐しおり
おのずから行方定まり流るるを我はガラス戸距てていたり
円型を描きつつ思う近しきは或は最も離れてあらん
一つづつビニールの泡を潰しおり横になりたる留守居の部屋に
一葉のなせる葉脈精しくて晩夏の庭に蝕まれあり
晩夏光部屋に伸び来て風のなし今年は蟬の声を聞かざり
生れ来し性に生きたる我ありや自在に原を吹く風の中
はがしたる粘着テープを使ふ事なきかと暫し考へて捨つ
亡ぶべき栄華の日々よ色漁る源氏の情こまやかにして
降り止みし庭に溜まりし水ありて天の光りを返してゐたり
掌紋は如何なる明日を示しゐん幼き孫の手を開き寄る
空深く飛び去りゆける鳥の声一つその声雲間に残る
ひれ立てて鮒さかのぼり幼な日の追ひし瞳はみずみずありし
兇悪犯手配表にまじりゐて心弱きが故の罪あり
拭きおへし鎌の鋼に顔写り我が家が継ぎて消えたるいのち

御こころのままにあらむと唱えたる聖の言葉にとうく今日あり

誰よりも弱き心に生れしかとクレームありし得意へ歩む

目が覚めて松のみどりが窓に見ゆこの不可思議にいち日のあり

目が覚めて障子に射せる日の光り腕すこやかに伸ばしゆきたり

目が覚めて時計が指せる六時半足上げ弾みをつけて起き出ず

蛇口より水迸り夜の眠り眼の断たん冷えをもちたり

さはやかに口に残れる歯磨のかほりのありて水を吐出す

顔洗ひ目のやに洗ひやや白く一夜の脂水にありたり

洗面の濡れを拭ひて今日一日生きてゆくべき姿勢に歩む

洗面の水に洗ひて新たなる瞳に庭のみどりありたり

法師蟬今年は十日おくれしと残暑は媼にしわを刻みて

夕庭に風しづまりて一隅の秋海棠の紅ぞ今日なる

ゆれてゐる木末の先に青空のありて窓より風入り来る

圃場整備区画なりつつ休耕の回覧板を農家は回す

散り落る椿の花に見上げては繁き葉群の経りし時あり

葉の散りて未だ芽ぐまぬ楢欅つばきは赤き花をつけたり

走り来て嗤はれるのは私といふ頭に櫛を入るべく戻る

わかっとる外しとるんやと言ひ捨てゝ外に出てからボタンかける

閉めたかと小野に来てから考へぬ昨日は猫が卓を荒せり
花が咲きて此処にこぶしのありたりき散りたる後は忘れておらん
薬店にポスターいくつ貼られいて何れも老ひし我にかかはる
まあまあと酒をつがれて五千円戎の吉兆の代を払ひぬ
冬池の草なく広き水おもて波紋起さん石を投げたり
くれなひを保ちしままに山茶花の花散り敷きて我の老あり
空際はうすく緑をふふむ青新たな文字の吾に生るべく
夏送る雷鳴三夜のひびき過ぎ朝顔ゆるる風の冷えたり
地平より携えきたる鳥のあり空際澄める秋となりぬと
祖達の神に出逢ひて病みたりと伝ふる山も削られており
丸き石積まれて鳥の飛び立ちぬ秋葉の神は山を出でしや
夏来れば夏に生ふべき草のありいまだみどりのやはらかにして
のぞき込みし財布の底よりつまみ出し硬貨幾枚老婆差出す

うすべにの花　大賀蓮　八首

二千年うつつにつなぐうすべにの蓮はいささか花の小さし
うすべにに大賀蓮咲きぬ二千年前の乙女は男呼びしや
うすべにの色を保ちし二千年種子の不思議はひたすらに見る

水神は乙女にありとあえかなるうすべにの花光りを返す
二千年前のうつつは目にありてうすべにの花じしに陽を受く
あえかなるうすべにの花二千年前の乙女の声もすまはす
友を呼ぶ乙女の声も伝えいて縄文の蓮花を開きぬ
縄文の鬼道に伏する人の目に蓮は如何なる神にてありし

青玉神社　三首

鉄を鋳る一つ目の神青玉と名付けられたる所以は知らず
結界を作りて此処に鉄を吹く炎見つむる一つまなこは
鋳る鉄の需要満せば炉をこわし目一つ神は流離せしとど
饒舌の老婆ゐるさしと思ひしが一人となりしあはれのありぬ
新聞の理解に買ひし株なりき株価見る為新聞を読む
鯨骨の此処に出ずると標さるる信濃の山の重なるところ
幾曲り木蔭覆ひて昼暗し流離の神の歩みしところ
いにしえのままに降りゐる陽光か大賀の蓮はうすべにの花
石垣を築きて平らな土地拓き段を重ねて山を耕す
幾重にも階をなしゐるこの棚田耕し生くべく生れし人あり
売らるべく女生れしいにしえの棚田幾重に山を登りぬ
二町歩の屋敷構ふる家ありてあたりは遊女多く出たりと

口開けて眠れる吾の顔などを鏡の中につくり見ており
風渡る穂波の間草を刈る帽移りゐて汝も点景
夏山の緑に飽きて目を閉じぬ唯ゆれてゐる列車の親し
木の下の風に歩みをゆるめては商ふ夏の旅をつづくる
ひしひしと組まれておりし鉄構は白亜輝く駅として立つ
さまざまの服があるかな若き等の高原近き駅に満ちたり
高原に吹きゐる風は夏冷えて若き等連なり木蔭に消ゆる
商用に乗りゐる者は吾のみか連なり降りてはなだれ乗り来る
高低の激しき地形となり来り此処より水は泡に岩噛む
炎熱を歩む出張五日経ぬほてり残りし朝々を経つ
ほてりたる身は寝返りをくり返し夜の明方を暫しまどろむ
伸びるだけ窓より首をのばし見て大型バスは峡路をかわる
ほてりたる脚に寝返る夜々すぎて帰らん列車時刻表開く
太ももを出せる女を羨しみつ汗垂る胸のボタンを外す
土の鈴此処に出ずるといにしえの音は吹き来る風に渡りつ
古代より此処に風吹き土の鈴振れる思ひを送りゆきしと
土の鈴出でたるところに葬りたる乙女は年を飾りいたりや
昏れてゆく蒼き山腹一つ亦一つと灯りともりゆきおり

請求書差し出す手の爪のびたるを疎みつ昨夜も剪るを忘れぬ

タクシーと書きしボックスに人の居ず呼べば木蔭に応ふ声する

たんぽぽの絮の遊化僧訪ふはなるを得ざりし若き日の夢

青年のシャツに汗染み満山の葉群は地に濃き影落とす

岩の間を流るる水に泡の立ち古びし木々を縫ひて響(な)り来る

首いたく見上ぐる山の険しくて秀先鋭く杉並び立つ

流れゐる水激らせてどの石も垢のつかざる白さに映えぬ

夕蜘蛛は魔朝蜘蛛は福おおははの言葉ひきつつ灯りを下がる

開け放つ窓に光りの入り来り朝は流るる水音たかし

夕もやに一すじ青くありし峯木群迫りて峡の明けたり

我の亡き後もそびゆる山の峯秋葉の社赤く塗らるる

我の雲藤村の雲小諸なる空の青きをかがやきわたる

養鶏の倒産報ず新聞に鶏卵激安の折込みありぬ

来る年に同じ葉群の繁れると宿根草は枯れて伏したり

我の花季すでに過ぎぬとてのひらの葉型なすを開き見ていつ

青深く夏の日差しに育まれ繁れる草も競ひ合ひおり

一息に缶のジュースを呑み干してしたたる汗をタオルに拭ふ

水栓をひねれば温き水噴きて飲まんとせしが含嗽にとどむ

用おへて来りし駅は無人にて待たむ二時間何処も暑し

網抱え腰を曲げゐるしのび足水に銀鱗ときに光りつ

ボックスの前に立ちゐる我を見ず少女は電話領じたるまま

赤電話領じて少女の長ばなし含み笑ひも時に混ふる

十分も待ちゐるものを財布より亦十円を出していやがる

畦高き峡の農家は鎌の売れバスの回数減らされおりぬ

薬草のフライを我は食べておりガラス距てて道は炎熱

ひさし深く帽を被りて外に出ず目のあはざるをやすらぎとして

草生ふる所を撰りて犬歩む炎暑に鋪道灼けてゐるらし

山と山寄せる間より夕炊ぐ煙昇りて棚引きており

ハネムーン送る拍手の手を休め涙拭ふは母親ならん

黄のダンプ未だ動かぬ朝の明け流るる水の音なりゐたり

山の亦向ふに重なる山ありて夕べ炊くか煙のぼりぬ

洪水に土流さると語りゐて稔らぬ稲が冬の田に枯る

人群るる故に一人の歩みにて大安売りのスピーカに追はる

爆音のかすかとなりて消えてゆき夜深き室に一人坐しおり

万両は赤き実五つ着けゐたりしずかに地の雪被ぎゆく

うす氷張りゐる下に水流れ目高は早き動きもちたり

差し交す森の葉群の蔭深く歩める人の消えてゆきたり

いなづまが束の間展きて梢あり形あるもの常にさびしく

脚ふるはせ餌を見つむる犬の目を我も持ちたることのあらじや

貫きて生きゆく難さ星一つ流れて今日の挫折のきたる

てのひらに月光暫し溢れさすしずかな眠り吾のもつべく

ねじを捲きし時計を置きて明日のあり痛みなくして人は生き得ぬ

寝室の窓に射し入る星のあり我の眠りの守まれあらん

コップ酒も田舎の酒屋はひさぎゐて灼けてしわもつ人が向合ふ

荷を負える人に吹きゐる冬の風家見ぬ道は山に消えゆく

朝餉

味噌汁の香り厨を流れ出で妻は朝餉の出来しを告ぐる

味噌汁の香りのしたし吾が生るる前の幾世ゆ伝へて来る

生豆を味噌になしたるいにしえの経りたる時は尋ね得なくて

旱魃に命救ふと書かれたる甘藷は卓に置かれたるまま

腹に満ち食ぶるは近くの事にして米の伝ふる歴史はかなし

いにしえに東南アジヤゆ伝はると飯食ひゐつつロマンは知らず

経りながきときに並べる卓上の食物なべておろそかならず

一夜経て青濃き胡瓜の浅漬は茶を飲む口にはりはりとなる

灯の流れ暫く止みて鋪道には月が照せる鉄鋲白し

「ざあまんす」と語り合ひゐし女にてやがて口開け眠り初たり

海の果て見てゐし男大股に舟の傍へに歩み寄りたり

蛇口より迸り出る水ありて明日の金借る思ひ定まる

あらあらと風が分けたる尾花にて病みたる蝶かひっそり止まる

一日を雲こめいしが宵となり八つ手の葉より雨降りそめぬ

激ちつつ水のひたすら流るるを男行かんは振り返らざれ

ピストルを突きつけている画面ありこの平安の好みて見ると

歌集

父と子

晴天の予報に孫は手を拍ちて明日の旅行の夢をひろぐる
おいちゃんの室を片付けてあげるから勿々に手を引き外に連出す
わが腰を抱きかくれてゐし孫は去りゆく犬に声の大なり
かすかなる青き炎にすきとほり石油ストーブはひたすらに燃ゆ
凝固なす光りの白く川原の石に秋透く月の差したり
頬赤く寒風突きて登校の次代担はん人群つづく
ましぐらにペタルを踏みて走りゆく明日を托さん登校の脚
朝の日に霜とけてゆき地の中に数限りなき命の棲まふ
むしられし羽毛の堤に散ばりて鳰の泳がぬ池たひらなり
背を屈む人等をここにあらしめて山の畑は石塊多し
ひたすらに燃えて炎の昇りをりひたすらなるはすきとほりつつ
ストーブの炎にかざす手先より働く力の満ちて来りぬ
夕映の去りたる原に地表より取残されて我の立ちをり
飛翔するとび見てゐしが障子閉め読むべく本の前に坐りぬ
残生に思ひ至れば元日の新たな空気吸ふべく立ちぬ

残りたるもの捨てかねて食べたれば正月の胃をもて余しをり
犬小屋に近き小溝を越えしより犬は歯をむき吠え立て来る
さやかなる水の記憶を喉のもつ小川はあぶく浮きて流るる
映りゐる影を乱さず白鳥は水の面を移りゆきをり
相撲があれば相撲のニュースに目をやりて唯それ程に過ぎてゆきたり
霜被く草は地肌に張りつきて艶の失せつつ緑を保つ
寝る床に身を投げ入れて眼閉ずひと日過ぎたる肉体として
いくつかの答の言葉用意して鳴れる電話に近寄りゆきぬ
哀悼の燈灯点もり動きゐる人等を他者と通りすぎたり
枯れ伏してがらんどうとなれる野の広きにしばし立ちてをりたり
取り出せしもの大方入れ直し老いし二人の食事終りぬ
朝二つ昼は三っつの白梅の花がわが家の庭に咲きたり
遠くより名を呼びかくる高き声孤独に生きる声にてあらん
オウム教語れる声もおだやかになりて年経し裁判報ず
過去の影ひきずり逃げて廻りゐし日本赤軍捕はれたりと

幻想に生きるより他なくなりし日本赤軍老いて載りたり
幻想が生みし狂気に罪重ね日本赤軍潜りをりたり
燃え尽す一代なりしか赤軍の岡本公三少し呆けると
安保など闘争語る人のなし階級とふは何にありしか
過ぎ去れば露の乾くに似てあらん安保闘争日本赤軍
死にゆきし友に言ひたるわが言葉返りてながき沈黙のあり
坐りゐる目を釘付けて見とれお手犬は小さきパンを食ひたり
とりどりの服に釣人立つ故に冬の草原枯れゐて広し
仲間より離れて一羽泳ぎゐし白鳥がむくろとなりて漂ふ
ふくらめるつぼみに待ちし白梅の朝の光りを受けて咲きたり
後二十日すれば寒さも終るかと三月に入る暦をめくる
群がりて鳩の啄み転作の豆を植えしは取り入れなさず

湖内さん逝く　七首

君ありとおもへば道の近かりきペダルを踏みて訪れたりき
刷毛握る手の指太く淀みなき動きに糊を塗られ給ひし
夜更け迄飲みては論を交したり譲り合はざる事のたのしく
ふきのとう特に好みて居られしを今宵の酒に浮びくるかな
湖内さん西中はんにすみれさん歌を語りて更けゆきたりき
困らしてやろうと路傍の草を指し問へば答へに淀みなかりき
出来ましたと言ひて掛軸拡げらる確信持てる手付にありき
ストーブの熱に歪みしままにしてチョコレートは固まりをりぬ
木蓮の今年も霜に花傷む生きし証しと母の植えたり
幸うすき母が植えたる木蓮の霜に枯れたる花は見上ぐる
放たれん思ひは犬の目を研ぎ歩み寄りゆく我を見てをり
踏む道に生えしクロバー茎太く短かくなりておのれはぐくむ
暮れてゆく空を眺めてをりたりき己が言葉の生まれ初めきて
照り返しをりたる水も唯白く夕べの池は暮れてゆきたり
出で来しは光りを指してアスパラのきみどりの茎ひたすら直し
冬の野に放ちたる火は風を捲き焼きて尽さん炎を上ぐる
溝ぶしんなさんと草の刈られをり白きすみれは種子落せしや

伏見城　歴史を知る会の旅行　八首

英雄の眼にしばしなりてをり天主閣上山野を眺む
天主より眺むる山野霞めるを英雄の胸に何はしりしや
遊楽を絵に遺したる大閣のわが世を得たる思ひも掲ぐ
金色に光る茶釜の飾らるを成り上りたる心さびしむ
金箔に作りし茶室秀吉の他者を構はぬ心に触るる
思ふままに生きし秀吉桃山の文化はここに生れ来りし
時を経て狂ひあらざる手桶など職人の心も並べてありぬ
たたなはる山を遥かに超ゆる目に朝鮮遠征思ひたりしや

ひるがへり往きては帰り大洋を飛ばんつばめは羽根を養ふ
口々に歌の出来ざる苦しみを言へば笑へる声となりきぬ
岩山の松芽吹きをり如何程に伸びゆき水に届きゐる根か
きらめきて風の吹きゐる野に向ひ孫はわが手を離し走りぬ
仰向きてベンチに掛けをり大空は少年の日の呼ぶ声をもつ
胚白く切られし種子に現はれて伝はり伝ふ形を保つ
コーヒーを飲みて歩める目の冴えに青葉の青く並木吹かるる
地の中に未だ蛙の眠りもち温き日差しは地表を渡る
去年はもうストーブをしまひをりゐしと灯油を入れに缶下げて出づ
三三五池の堤に人の立ち日の温とさに釣糸垂るる
飛び立ちし鳥が残せる水紋も消えて平らに山を映しぬ
吹く風に鯉の幟の泳ぎそめ孕みて波打ち躍りゆきたり
草枯らす薬撒かれし一所歌を作ると歩み止めたり
幸やんが寝て虱を散したる堂もこわされ倉庫が建ちぬ
雨脚を下せる雲と見てゐしが音立て舗道の飛沫はじめぬ
尾の分れ鋭く長くつばくらは海越え飛ばん羽根休ませる
つまずきて止まる力失せたりと皮擦りむきしてのひら払ふ
曇りゐて影なき電柱立ちてゐる野のしずけさを歩みゐるかな
何事かありて灯りの点もる道関りあらぬ歩みを運ぶ
幼な日は角力取りしよれんげ草繁りて花の盛り上りたり
葉の揺れの止みて我あり何処より来り何処へ去りゆきし風

さみどりに今年の若葉きざせるを齢重ねるのみの目に見る

不機嫌にあららぐ声を汝に向け明日よりながき悔をもつべし

合槌を打ちしばかりにながながと語る老婆に肯きてをり

黄の光り運びて蝶の飛び来りベンチの一人にしばらく舞ひぬ

若葉透くさみどりシャツを染め来り春の山路を歩みゆくかな

達者にて出会ひしことを言ひ交し足弱まるを互に笑ふ

そんなこと知らんで生きてゆけるとふ読ゐる本を尋ねし人は

傷つきて逃げたる鳥も眠りしか森は夕べの闇に沈みぬ

月明の空へ昇れる亡母の声曽て指しし路として

純白にしべを包みし木蓮のこぞる莟の開き初めたり

咲く花の必ず散る日のあることを思う瞳は土を見てをり

年を経て大きく枝葉拡げるをしばたける目に我は見てをり

このところ堀ありたりき鰻等も埋立てられて人の歩みぬ

枯れて来て尚しがみつく花殻の無残を我のもつこと勿れ

犬は飲み我は眺むる渚にて歩み来りしいのちを頒つ

人の声去りてゆきたる公園の散る葉の土に触るる音する

畦草に粗き影立ち背後よりヘッドライトの迫りて来る

住みつきて野良猫のありゆったりと己が領ずる所を歩む

遁れ来て瞳しずまる純白の花咲く下に腰を下ろしぬ

地の中に蓄めゆく力アスパラは太さ増したる芽を出しつぎぬ

庭前に今日より蟻の這ひ廻り土の底にも温み及びし

小さなる緑に道を跳び交ひて雨蛙多く生れたるらし

大方は間引かるるべく菜の生えて新たなる葉を出しつぎてをり

幾世代人を葬りし土の黙小暗き木木に囲まれありぬ

尖るあご研ぐ目をもてる男来て我は新聞拡げゆきたり

翻へりひるがへりるしが吹く風にむしられ青葉飛び去りゆきぬ

立つ木など全て唸れる音立てて大きな空を風の走りぬ

走りたる車のひびき青空に吸はれて山の道のありたり

平家の落人　五首

山深く交はり断ちて千年を守る習慣に営み来りし

風音も恐れて生きる敗残のいのちは山の深きに潜む

耕せる所耕し生きて来ぬ家が漸く建て得る峡に

習慣(ならはし)の化石と聞ける営みにこの山峡に生き継ぎ来る

迫り合ふ山の間に生き継きし哀歓などに思ひ及ぼす

山高き上に立ちたる塔先の輝き朝は明けて来りぬ

新しき土肌見えてショベル機の爪喰ひ込むは人が操る

農薬に累(かさ)なるむくろいのちもつものが負ひゐる運命(さだめ)は見つつ

毒薬を作らん草を聞きゐつつ浮び来れるいくつ顔あり

つながれし鎖引っ張り肢(あし)を上げ泳がせ犬は我を迎へる

夢を見る瞳にマネキン作られて服の売場に担がれ来たる

マネキンに着せたる服を距りて眺めてゐしが襟を直しぬ

起伏失せし今日の心や乳房白きマネキン人形置かれゆきたり

駆足に来りし少女そのままに駅の階段登りゆきたり

ひかがみの伸びる歩みのさはやかに若きら階段登りゆきをり

映りゐし水の面の影砕きほうりし石は沈みゆきたり

コインなどで紙の表をこすれとど隠さる文字は露はにしたし

服のすそ登りて来たる蟻などの旺んに夏の公園ありぬ

一枚のガラス距てて外は道人はけはしき顔に歩めり

照りつける日差に落苗さしてをり五合程の米を獲るため

屈みては落苗さしてゐるが見ゆ親より伝ふならはしとして

採算のとれぬ落苗さしをればならはしとふを我は恐れぬ

新しき坂作られぬ時ながく人苦しみて歩みたる後

去年(こぞ)と同じ赤に咲きたるコスモスの伝へ伝へしいのちなりけり

捨てられて泥にまみれし人形の人面なるはふりかへり見る

群がりて花に飛びゐし蜂の去り日差しは斜となりて来りぬ

稀にしか蛙飛ばざる畦なるを散歩の犬が咥へて殺す

知らぬ名を言はれし電話に疑ひの思いはしれるさびしさにをり

ていねいに自己紹介をなしてゐる電話を切らん呼吸をはかる

他人の金出させん口調のなめらかに受話器の中を流れて来たる

移る世に離れゐるとも交し出す脚すこやかにバス停に行く

植えられし稲の確かな青き伸びバス停迄を頒ちて歩む
たんぽぽの絮の離れて空およぎ泳ぐ心に歩みを運ぶ
乗せくる誰か来ぬかと思ひゐるさもしきものを目よ現すな
足に踏む大きな土の確かさにバス停迄を歩みゆくかな
ひたすらに散歩待ちゐる犬の目のあれば小降りに靴を出したり
待たれゐる心が負へる重さなど散歩を乞へる犬に思ひつ
ひたすらに這ひゐる蟻を眺めをりひたすらなるは常にすがしく
血を持てるものを慕ひて寄る虫かふた度み度払ひ除けたり
跳び退きし我と思うに雨蛙はきゐる下駄に踏み潰したり
拡げたる砂漠の写真は一色に果てる所に夕日落ちをり
我は読む千年前の物語文字に涙を絞られながら
男は血女は涙を流すべくありとしおもふ史書を読みつつ
一枝を剪りて挿されし草花の瞳及ばぬものに立ちをり
植えおへし稲を神とし眺めたるいにしえ人に帰りゆくべし
早苗饗（さのぼり）の忘れられゐて神と米つなぎし昔を知る人のなし

田植歌唄ひて神の御手に生くる心に早苗挿してゆきたり
時ながく成りたる大き木の蔭に祠を建ててのひら合す

コミセン研修旅行　十六首

山と山迫る一つに穭建ち城山二Kと標識の指す
山陰を此処に扼する地にあらん谷狭まりし峯に城立つ
ドイツ人の気質育てし森見むと期する心にバスを降りゆく
封建のドイツをなせし森とふを体感せんとたかぶりてをり
掲げたるドイツの森の文字見えて欧風の屋根が木の間を綴る
何の館も販売店の設けられ連なる人に従ひ廻る
この森の施設の維持をなしゆくと思へばワイン三杯を飲む
歩み寄る人に飼馬の寄り来り囲まれ生くるはさびしくあるか
何処より楽を奏する音流れ岐るる道は木の間に消ゆる
ゆきゆきて森とふものの見当らず間を置きて木の植えられてをり
元禄に建ちし講堂床に敷く板寸分の狂ひも持たず
四百年狂ひもたざる張る板の拭き磨かれて今を光れり

ひずみなき張る床板の光りゐて建てし匠の心に至る
垣肩を磨きて丸く作りたる石の肌(はだえ)に手を触れゆきぬ
積む石の肩なだらかに作られし垣にひとみの安らぎてゆく
語りゐるひまに融けゐるアイスクリーム女は唇寄せてゆきたり

千木　四首

尖りたる木を組み屋根を構え葺き昔の人は天を怖れぬ
空に棲む魔ものを刺さん木の尖り屋根に構えて家を建てたり
繞り棲むものは大方悪魔にて尖りたる木を屋根に構えぬ
魔を払ふ千木は構へし威をもちて眺むる人も圧しゆきたり

颱風のニューステレビの映し来て妻は菜を切る手を休めたり
直撃をするかも知れぬ颱風のニュースは飛沫く波を映しぬ
颱風の三つの進路が映されて一番左はわが町過ぐる
通過する三十分前となりたるに変らぬ風の強さに移る

いしぶみの崩れて線の残る彫読み難なるは瞳を凝らす
如何ならんいにしえ秘むる碑(いしぶみ)の崩れし彫をなぞりゆきをり
菖蒲湯は菖蒲の結へてありしなど五月の五日老の出合ひて
早苗田は根付きしものの青さ増しはぐくむ光り遍く渡る

土を見ぬ迄に稲葉の繁りきて炎暑の照りにまさやけく立つ
文字あるは読み解くことを求めゐて山にいしぶみ立ちてをりたり
八十に近しと思へ幼なより見なれし畦もあらため歩む
下水より臭ひたちくる夏となり額の汗を拭きつつ歩む

浮く露にあぢさゐの花盛り上り雨の止みたる園にひしめく
置く露にあぢさゐの色まさりきてひしめき園に雨上りたり
大きなる花まり露に光りゐるあぢさゐ園の豊かさに倦む
驚きし見た時の花も目に押れてあぢさゐ園を出でて来りぬ

言ひ過ぎし言葉を抱き別れたる後を一人の道歩みをり
ガラス戸をひびかせ車の走り過ぎ重量失せし我として坐す
引張りし鎖に抗ひ雄犬ははるかな犬に瞳を凝らす
桜葉にたかる毛虫の糸を引き下り来れる夏となりたり

二本の手ポケットに入れて千本の手を持つ観音眺めて居りぬ

重なれる葉が落しゐる深き蔭残るいのちは此処にて問はん

科受くることを知りつつ大きなる動きひたすら書きてゆきたり

災ひが主君に及ぶと知りしとき死ぬる覚悟のしずかなりけり

不忠不孝渡辺昇と落款に入れて己れを苛みゆきし

川と川合へる流れに祈りたる粟島祭も草にほろびぬ

いつもいつも野球の話をする女一つに生きる笑ひ声もつ

朝の露宿せる稲は伸びゆかん葉先尖りて空を指したり

吹かれゐる落葉幾片寄りくるを思ひ親しき齢に眺む

吹かれ来し落葉は亦も走りゆき木蔭に消えぬ其の後知らず

憂ひもつ血潮めぐりて緊る顔君は黒衣に過ぎてゆきたり

次々と降りて来りし雀等の一羽が飛びて一斉に去る

髪白き老人来り山桃を食べゐる横に並びけるかも

飛び移り雀の騒ぐ樹となりて山桃の実は熟れにけるかも

くちばしに赤黒き実を咥えゐて降りし雀よ我も食べをり

山桃はわずかに甘くすゆくして雀と分ち食べてゐるかも

撓めたる大きな揺れに驚きて逃げし雀よごめんごめん

行く雲と泰山木の花の白分ち難にて花の光れり

時永き太さに老いし木のありて人のおろがむ注連をめぐらす

均らされて平らとなりし屋敷跡埃にそむけし幾日の後

蝶々は日を受けひらひら飛びゆけり数減りゆくを知る目界に

父と子　四首

子は医学われは哲学の出で来たる言葉は会ひし五つ六つにて

父と子の時の乖離の言葉なく夕べコップにビールを分つ

分ち飲むビールにつなぐ父と子の寝ようかの言葉に腰を上げたり

ひたすらに己が世界を求めゐる吾子よと思ひ立ち上りたり

子を抱く女の後に買物の袋を下げて男が歩む

トマトなど透きて見えゐる袋下げ夕べの露路に女消えたり

舗道より煽り昇れる風ほてり抜き去る事の顔をさぐりぬ

追ひ越せる車は知りし人ならず灼ける舗道を再び歩む

襲ひ来る暑さにしばし道眺めバスを降りたる歩みを運ぶ

保育園に集ひてテント張りてをり如何なる歓声生れんとして

板垣の下方わずかに透かされて白き腿もつ脚が過ぎゆく

白き帽子白きズボンの陽を反し老人直ぐき歩みもちたり

ひたすらに生き来りしと思へるに過去を大方罪としてもつ

照り出でて花の模様の浮き来り白きカーテン窓に下りぬ

トラックを降りたる男汗拭ふタオルを腰より引張り取りぬ

犬にやりし餌を食べゐる雀あり不埒な奴と追払ひたり

充ちてくるものの艶もち南瓜の幼なこの実は光り浴びをり

囲まるる山を見ること多き目に街の雑踏分けてゆくかな

太りゆく瓜の艶もつ皮の照り見飽かぬものに通り過ぎたり

種子蒔きし女は上に土かぶせいのち育くむ闇を作りぬ

返しては寄せて来れる海の波一つの大きなたゆたいとして

葬ひの終りて葬儀社的確に指示する声に幕をはがしぬ

飛び移りとびうつりては花こぼす雀の故にたのしく眺む

花白く天に向ひて咲けるとき街の雑踏過ぎて来しなり

土を割る茎に出で来し曼珠沙華緋に照る花を連ね咲かしぬ

地の中にしまはれをりし緋の色にあらぬか連ね曼珠沙華咲く

緋の色に連ね咲きたる曼珠沙華出で来し土に思ひの至る

飛沫立て荒波岩を噛みゐるを昨日と同じ水と思はむ

すきとほる水に遊べる小魚の甲ふ鱗をもてるさびしさ

流れくる水に魚は甲ひゐる鱗光らせ翻りたり

風止みて揉み合ひをりし枝と枝皮むけたるが照りに曝れたり

風止みて皮むけたるが並ぶ枝近くにありしが故のさびしく

無償なる家事労働と言ひゐるを哀歓去りし言葉と聞きぬ

美しき女が後にゐることもコーヒー飲む背の伸びゐる一つ

すきとほるグラスを犯しコーヒーの許さぬ黒き色満ち来たる

注がるる黒きコーヒー満ち来りグラスは猛き変貌をなす

一人ゐるときに目の行く地平ありひたすらなりし若き日をもつ

澄みとほる水は変らぬ岸を打ち昔踏みたる道歩みゆく

咲きおへて花はしきりにしべ落しいのちを生まん光り渡りぬ

銃を持ち山河駆けしと女連れ歩むに距て若者過ぎぬ

傲岸に生きる女を憎しみて弱き女をさげすみ語る

信号の変りしことを告げてくる後の車の警笛高し

仰向ける喉に並びてジュース飲む若き二人に幸せのあれ

反らしゆく喉笛尖り一息に男ジュースを飲み干しゆけり

われよりもながくこの世にある故に石に刻まることを欲しぬ

地の上の富の半ばを断りてキリストパンを分けて食べたり

笑ひ声消えゐてながき渋滞の尾燈は祭の如く連なる

夜の駅下りたる人等浮く首となりて坂道下りゆきたり

のっそり犬は小舎出で我を見ぬ散歩の時間をしとしとと雨

薬剤に死したる虫は累りぬ生れし運命（さだめ）の一の姿に

電光の如く打ちしと思へるに蠅は隣の障子に移りて止まる

ちらと見し瞳戻して表情の動きもたぬを他者と思ひぬ

撒かれたる薬剤漂ふ空間に住みゐる虫は生を拒めり

伸びきりし草の倒れて若き芽の露はに風の吹き過ぎゆきぬ

生と死の分つところに飛ぶ蝶と花に潜りてゆけるを見つつ

青き葉のつぎつぎゆれて風吹けば運ばれゆける我の目のあり

塔先は昼の真澄に白く立ち届かぬものを指して輝く

空く腹に来たりひたすら啄みて去りゆく雀の親しさにをり

何の人も信号見る目に立止まり己れ守らん命もちたり

居酒屋　五首

空く席に当然の如坐り込み酒誂ふを定連といふ

宵となれば集ひ来りて大方は似たる話に居酒屋のあり

今日ありし葬式などを言ひゐしが女のことに話を移す

廻りくる酒にてらてら顔光り言葉取り合ひ笑ひ声挙ぐ

亦明日と言ひて出でゆく人の背を笑ひ止めずに見送りてをり

幾匹の蟻這ひ初めぬ眠より覚めて餌得る偵察ならん

噂など語りし男帰りゆき一人となりし原に出でたり

白き花親しみ眺めし泰山木の残るつぼみは五つと数ふ

三度程昇りし気温に奪はれし思考となりてペンを置きたり

赤き花咲かせん草の赤き茎いのちひたすらなるに立ちたり
はける息吸ひゆく息のかそけけさに外の世界とつながりてをり
はける息吸ひゆく息につぐ命内と外とを何処に分つ
熱く降る日差しと伸びる稲の葉の交す言葉を我は聞きをり
株を張り長く伸びたる稲の葉の緑の開きし窓に迫りぬ
同じ花見つけしことの安らぎに山家の前を通りすぎたり
赤き旗出すときに直ぐく背を伸ばしガードマンは日に焼けてをり
一しきり鳴きゐる犬の声の止み闇は厚さを増して来たりぬ
老斑の増えて来れる手を出して還ること無き肉体をもつ
花を挿し眺めてゐしが瓶の色合はぬと妻は立ち上りたり
裏窓を開けて見えゐる背の山の生れし時よりわが目養ふ
時永く我の瞳に住む山と裏窓開く近頃にして
万緑の山に紛れず松喰に枯れたる松は枝の崩れぬ
蹙作る筋肉伸びて夏の日を男の脚は走りゆきたり
稲の葉はこぞりて天を指して伸び緑を生まん日の照りつける
蟻寄せるせんべい置けり薬剤を撒きて殺さん計略として
せんべいを置きたる度に集ひ来る蟻のあはれに薬剤を撒く
傘を差す人の見えゐて柿若葉濡れて明るき畑のつづけり
朝顔の莟ふくらみゆけるとき明日は開かん花に住みたり
犬連れて散歩をさせんと買ふシューズ老いては軽く安きを撰ぶ

宮当番　夏祭六首

神前に幡を立てをり時永きしきたり伝ふ村人として
行事表に記すが故に夕べ来てろうそくの火を点もして祀る
米に生き米に死にたるいにしえの人等集ひて此処に祈りき
賑ひし祭にありき宮当番灯りの尽くるを待ちてたたずむ
集ひ来る人等目当の露店など語り草にて灯り見てをり
尽きて来し灯り吹き消し勿勿に帰途につきたる宮居荒れたり
今年も亦夏を飛び交ふ虫見えていのち継ぎ来し翅を光らす
しあわせと思うことがしあわせである痛ましき言葉を我は聞をり
新しき言葉を我に生まんため草は鋭く尖りきざしぬ

べったりと雲の覆ひて降り初め読むべき本を棚に撰びぬ
毀されし跡の平らに日の差してここに栄えし邸宅ありき

商店街　三首

つぎつぎと商店街の店閉ざし駐車場となりて空きたり
老いて来し夫婦が守る店多く商店街の往来(ゆきき)少なし
郊外に大型店の作られて商店街は囲まれゆきぬ

朝顔の蔓より緑の葉の生れ老女は如雨露の水光らせる
蜘蛛の巣にとんぼの翅と目玉とがかかりて吹ける風にゆれをり
冬田堀る鍬に蛙の出で来り跳ばん形の後肢伸ばす

翅と目が残りゐる巣に潜みゐて蜘蛛は燐光放つ目をもつ
山彦は声を返して来りけりはるかに青く峯のつらなる
跳ねる鮒摑み走りし幼な日のてのひらありて野の径歩む

炎熱は狂を潜めて草蔭に無数の舞はん虫を抱きぬ
草蔭に生れくる虫の無尽数舞ひて狂はん夏は来りぬ
盛んなる緑がつくる深き蔭夏山茂りて入るを拒めり

飛び来しは声を聞きたる蟬ならんはるかな森とつなぐ命に
取られては亦生え来るアスパラの尽きざるものを我は食べ居り
鉢の木に声をかくして女二人ながくコーヒー飲みてゐるかな

耕して得るもの少なくなり来たり段々畠は草に狭まる
紫のゴム手袋が水底にゆれてしきりに摑まんとする
急速に昏む気配に窓開けて雨をもつらし雲重なりぬ

溝ぶしん終りて畦にざり蟹の生き来し赤き甲羅散ばる
羽搏きを止めたる鳶は拡げたる翼のままに山を越えゆく
刺す蚊などさもあらばあれ夏の日の生める命にわれを養ふ

忘れたきことも無くなり年老いて飲みたる酒の酔ひくるはやし
夕闇を区切りて黒く一本の大きなる木は昏れてゆきたり
流れくる水に尾を振りひたすらにおたまじゃくしは遡りゆく

行く先は何かは知らね流れくる水にひたすら鮒のぼりゆく
行きつきて石塊(いしくれ)のみとわが知ればひたすら登る魚を見ており
潜みゐる雌を呼びゐる蟬の声谷を遥かに渡りてひびく

ガラス戸に蟬のはげしく突き当りかこちてばかり居れざる夏ぞ
青草を分けて吹きゐる風が見えしばし歩まん扉を開く
盛りなる姿に終るしあはせに真紅のバラは剪られゆきたり
止む風となりて稲葉の立ち揃ひ直ぐき緑に光りを透かす
競ひ合ふ草と草との間(ひま)の闇生れて夏を茂りゆきおり
ガラス戸に映れるわれのありしより背すじ伸せる歩みもちたり
展くるは大きなる谷瞠きて我は峠の上に立ちたり

犬　五首

雌犬の通れる度に声を挙げつながるままに今年も過ぎぬ
むき出しに牙を見せつつ立ちてゐるこの大繋がれ闘はざりき
鎖離れ走りゆきしが餌もらふ繋がる所へ戻り来りぬ
戻り来て飯食ふ犬は首の輪に鎖つなぐを見るともなさず
前肢を強く突張りあくびする犬よ引かれて歩む日日にて
大きなる木蔭のむこうに道見えて白く引きたる側線が照る
雨の降る道に人形落ちてゐて笑へる顔を保つさびしさ
新聞を拡げて互に距て合ひ汽車出発の時間を待ちぬ
大きなるビルに融資と掲げあり貧しき人の墓碑銘として
木の呼吸われの呼吸に公園のベンチにながく掛けてゐるかな
むき合はぬもの安らかに公園のベンチにながくかけてゐるかな
熟れて来し瓜のかほりの漂ひて山の畑の人影見えず
散歩より帰りし埃払ひをり動くは常に汚れともなふ
喋りゐる人の傍へに本を読み本に一人となりてゆきおり
新聞を拡げ読みゐて一人なり喫茶店にてコーヒー飲みつつ
しなりもつ庭の木となり空覆ふ雨もつ雲は巻きてはしりぬ
夕闇に沈みゆきたる地表より取残されて我の立ちをり

歌集

天の力

幼子は摑んで離さずかたはらに僕のものだと言ふ声するを

老木の下に祀らる祠あり故を知らざるおそれを伝ふ

炎なす天が投げくる日の光りしっかと受けて稲の青かり

炎なす天の力を受け止めて人に手渡す稲とおもひぬ

稲の田を登れる山にある墓の埋むる汗の量こそ思へ

夕闇に草木の影の沈みゆき灯れる家に帰らんとする

昏れてゆく夕べの室に一人居て灯り点さぬ時を過しつ

夕闇にものの象の消えてゆき緊る瞳に一人坐しをり

ふと出でし言葉の育ちゆくなれば癌の如きももちて生きゆく

黄の柑子輝く光りを運び来し鳥あり空へ帰りゆきたり

輝ける柑子に緑の葉のふかし人見ぬ丘に光りわたりぬ

青野原平らな丘に色移る朝な夕なよ瞳経りゆく

炎なす日差しを青く蓄めてゐる草木よ風なき昼のしずけさ

エジプトの女描かる大き目の強き光りに生きてゐたりし

描かるるエジプト女の横顔の大きなる目に会はぬしあはせ

傾ける日差し茜を帯び来り今日いちにちのおだやかなりき

直ぐく立つ稲の葉先の遍ねきに及ぶ光りの茜を帯びぬ

ガラス戸を距てて見ゆるスピードを上げて群れ行く他者なる人ら

咲く花は葉を押し分けて開きたりあえかに赤くうすきはなびら

頬を張りふくらましゆく風船の出口閉すは竟に撥けぬ

美しき月を配して死ぬ画面脚色したる人ありたりき

退屈を露はに返事する我のくせ変らぬを嘆くともなし

婉々と語りゐるかな一つこと次第に細をうがち来りて

冷房に汗収まれば喫茶店出でてゆくべき帽をとりたり

たんぽぽの絮繋ぎ合ふ円型も分れて飛ばん数日のひま

傘と傘傾け合ひて行き交し汝と我の犯すべからず

ゆるゆるとトラックの台の上りゐしが轟く音に砂利を落しぬ

山裾より死者に供へし碗の出ず忘れられゐて人の踏みたり

爆撃にこの世の潰れ消えゆくを読む人多き本と書かれぬ

閉じゐつつ眠の中に入り得ざる夜が続きて今宵も暑し

コーヒーに落せるミルク浮き来り開くは花を原型とする
濁流の溢れし高さに泥乾き水色すこし戻りて流る
つばめらの姿ひそめる炎昼に行かねばならぬ我の歩めり
溝の水に臭ひの立ちて如何ならんいのち腐れてゆきゐる夏ぞ
職工の靴が運べる油など工場の前の道の照りたり
草を食む牛の瞳の襲ふなき澄みたるものを向けて来りぬ
葬られ土に埋もるかなしみの量（かさ）にはげしき夏の日の照る
網をもつ童の来たりおのづから蟬採る幹に瞳移しぬ
蟬の居ぬ幹と仰ぐに動きたる一つが見えて幾匹見えぬ
公園の泰山木の葉のみどり艶やかなるに囲まれてをりぬ
みづからの思ひ通りにならざればすまぬ鋭き声の聞ゆる
われも亦夢の如しと言はざればならぬか過ぎし日日の並べり
刻みたるしわの深さよ語りゐるときに全ては笑みとなりゐつ
谷底に白く見えゐる二つ三つ継ぎ来てここに掲ぐる花か
内暗きわれの躯と冷ゆる石繋ぎて先祖代代の霊
千年を草木生えつぐ裏山に墓ありわれの祖霊を鎮む
木の実採りけもの屠りてこのわれにいのちを繋ぎし祖先思ほゆ
この山野走り抜けたる強き脚もちてゐたりし祖先とおもふ
生れ継ぎ葬りつぎたるこの山野同化作用を草木いとなむ
咲く花を携へ死者を訪れぬいのちを継ぎて来りしてのひら
屠りたる凱歌がわれの耳に生る千年の底に響きゐる声
木器石器したたる汗に見はるかす荒野を美田に変へたるならん
われも亦やがて並ばん石の碑に花と線香を供えまひらす
雲白く空に輝き見はるかす瞳は果なきものを恋ひたり
幾たびも背を突き新たな笑ひもつ幼き者を羨しみてをり
背を濡らす汗に稗ひく人去りて稲葉は青し夏の日に燃ゆ
夏暑き道路工事に旗を振る乙女が居りて口に紅塗る
万緑に瞳遊ばす豊かさに別れし後を歩みゐるかな
炎昼を歩み来りし声かすれ一杯の水を先づは乞ひたり
炎熱の汗の収まるたのしさに風来る空に瞳向けたり

夏の日の強き光りよ花園に赤き青きの花開きたり
炎熱の道にみみずの乾きをり渡らんとして力つきしか
鍬握る指は日差しに焼けてをり土とたたかふ厚きその皮
つばめらは影をひそめぬ稗をひく男汗振りほうり上げたり
フィルムのネガを見てゐる医師の前吾を知らざる吾として待つ
ごみ捨と犬の散歩を事として残る時間は文字に関る

生命讃歌　五首

食ふ米のわれとなりゆく食ふ瓜の我となりゆく生きてしあらん
天地（あめつち）のはぐくむものぞわれと成る成りたる我は天地にして
天地の成りたるわれの眼なればはるかな星の光りに至る
汝が言葉われとなりくる我が言葉なれとなりゆけ出づる言葉は
いつよりの交す言葉ぞ天地のはじまるときに帰りゆけるは
飛び止まぬつばめを見れば大洋を越すべく生れし体小さし
杉山の冷えたる蔭の澄みとほり蝶はひそかに羽をたたみぬ
ねだりたる金魚をすくふ紙の網破れて素直に幼帰りぬ
傷痕のややに光りて艶の失せわれを守れる皮膚のありたり
酒壜に酒を残して帰りたり何時より弱くなりたるわれ等か
緞帳の幕上りゆく明るさに艶もつ若き脚並びたり
緞帳は明るき舞台開きゆき艶然として女立ちたり
木の影の窓に伸び来て風の冷え潜みしつばめの飛び交ひはじむ
石を蹴ることも思はぬ靴先となりしとおもふ歩みゆきつつ
暑き日の一日過ぎて夜の卓にくれなひ成せるトマト盛られぬ
山上の塔に光りの残りゐて統べゐるものの凛として立つ
餌を獲らぬもの悠々と水槽の中の魚は群なし泳ぐ
夜の露降り来る空に差し伸べて草は朝の葉先揃へり
脂採りし鋸の跡の凹みたる歪みままに松太りをり
今日は今日の日の差し昇り朝顔の枯れかけたるが花を開きぬ
夕闇は冷えをともなひ潜みゐし無数の蛙土に飛びたり
炎熱の収まる空に飛び交しつばめは海越ゆ羽を養ふ
来る年をつなぎて種を落したる草さはやかに靴に分れぬ

炎昼の空を白鷺飛びゆけり抽きて羽搏くものは眺むる
累々と店に西瓜の並びゐてとうし銃持つ口渇きたる
こぶし握る男わなきゐたりしが肩を落して去りてゆきたり
思ひ出のくやしきものに触れたれば坐る独りの声に出でたり
夜の床に横たはりゆく肉ゆるび炎熱の日日ながく続きぬ
われは我に生くると思へど語るなきひと日の心に出でて来りぬ
太陽の熱と水とにつくりたるいのちぞ庭に苔の青みぬ
焼入るる瞳するどく赤みくる鋼の色をはかりゆきをり
音を立て炎立ちたる油より焼入れられたる鎌とり出さる
大きなる群となるれば分るるらし幼なき鷺の畦に並びぬ
たはやすく沁み入る汗を拭ひをり眼の力衰へたるぞ
暗き戸を出で来し人等咲く花の一つ一つに声挙げめぐる
照りつける光りが生まん毒蛇のはげしき毒に思ひ及びつ
炎熱の道歩み来て声かけぬ息の詰りて余裕なき声
日に向きてもたぐることなきさびしさに種を落せし草の枯れたり

二度三度犬は前肢伸ばせしが届き得ざるはもう振り向かず
白き雲いくつ遊びて空のあり飛びたる鳶か瞳を誘ふ
汗の垂るシャツとなりたる男にてつるはし軽々下げて歩めり
背の痛くわれは掛けをり夏の葉の一途の青に至らんとする
青き葉の照りゐて熱き光り差す蟬よ一期の鳴く声挙げよ
白き手の現はれめぐりの戸を閉し公会堂に葬儀おはりぬ
青草もにちにちに見て目を魅けるものなき夏の道照り込みぬ
わが頭おほひてつくる帽の蔭何れの恵ぞ歩みゆきつつ
わが義歯に嚙む外はなき焼肉の固きが卓の上に並びぬ
いくらかは脂も出んと太りたる腹を流るる汗を拭へり
下駄いたくすり減りたるを言ふ妻と足の馴染を言ひゐる我と
吹く風の吹きくるままになびきをり種子を落して枯れたる草は
暗みきて閉せる厚き雲となり言葉をしばし人より奪ふ
一時間大安売を致します女の本性あばかん声は
薬店の効能書を読みゐつつ潜む病の多き体か

連日の照りに萎えたるあはれさも刈られて盆の公園すがし
木の蔭に帽子を脱ぎて風触やり頭は頭のよろこびをもつ
体温の通へる程に近く坐し言葉のなきを他人と言ひけり
年年を木蔭に読める公園の今年は這へる蟻の少なし
またたける星に夕の風渡り宇宙の中なる息を吸ひたり
予想されし言葉をつづる祝辞にて亦も一人が壇を登りぬ
最高の言葉を述べる幾人に盛大なる会始まらんとする
壁に向き塗りてをりたる人見えず工場は白く夕日に建ちぬ
怒号する人の前にて失へる言葉に立てる幾人か見ゆ
新たなる堤に見知らぬ花咲きぬ何処より運びし土にてあらん
丈近き草を刈りをり暑を防ぐ帽子ときをり傾き移る
帽子脱ぎて汗入れてをり稲の田の水を渡りし風の冷えたり
木の先に止まりし鷺は見渡さん頭を高く上げて保ちぬ
誰も皆もたんひと日の竟の顔枕の上にくちびるゆるむ
帽がもつ庇の巾に守られて炎暑の道を歩みゆくかな

影粗き稲葉となりて緑濃く闇おもむろに土よりのぼる
ガラス一つ距ててあれは艶をもつ女のししむら豊かなるかも
さっそうと行交ふ中によろよろと歩みて我に似たる白髪
しなやかに歩み来りて翻りファッションモデルは見られんが為
わがことを我より多く人の知り噂の中に囲まるらしき
美しき光り展きし花火消え深める闇に瞳のながし
掛けて待つ男に荷物渡したる女は尚も買ふべく返す
階段の下にて我は待ちてをり脚すこやかに下るは見つつ
長く待つわれに時々目を向けて警備の腕章つける人立つ
待ちゐると腰をおろせし幼きは直ちに後を追ひかけゆきぬ
下の句の出来ぬ短歌は綿棒をとり出ししばし耳をほじくる
警笛のひびき細まり消えゆきて密々囲む闇となりたり
砕けたるガラスの破片に人来り鋭く尖るあやふきを掃く
雨ながく降りたる後を照りつづき大きのこの現れにけり
目に沁みる汗を拭ひて見ゆる視野おお炎熱に万緑育つ

卵より孵りて産まん卵など思ひつ焼きし卵を食ぶる

百の服一つ一つを見終へたる女再び手を触れゆきぬ

大きな家建てて死ぬるは勿体なしと家と死ぬとは関りあらぬ

生れたる波紋つぎつぎ輪を生みて岸辺の草をひたひたと打つ

見はるかす山につづける青き田を畦に分ちて人等営む

他者と我分ちて稲田の畦のあり隣れる者は憎しみをもつ

稲の葉の鋭く尖り炎なす夏の日差しを呼び求めたり

尾が消えて足生えてくる驚きを持ちしことなく蛙跳びをり

昼の駅出でて来たりて炎なす夏の日差しはしばらく眺む

翔け昇る思ひのために雲一つなき大空となりて来りぬ

汗収む風吹き来たり公園のベンチの上にあぐらかきたり

たたかれし肩に驚きふり向きて孫にてありき「なんだお前か」

勝ちしチームは声挙げひしひし抱き合へり自ずからなる命一つに

雑草と共にひかれしアスパラを幾度も見たる後に諦む

いただきし朝顔の種子を手に載せぬ潜むる万の青き世代は

舗装路の乳剤溶けて光りおり暑熱に狂気生れんとしつつ

自分のことのみを語りて帰りゆき過ぎたる時の空しさに立つ

とろとろと登るトラックの後につく男のときに窓ゆ首出す

応援の声の次第に高くなり号砲鳴りて立上りたり

紅に熟るるトマトが言に化す詩の訪れの忽然として

鳥の糞白く大きが落ちてゐて何も居らぬと知りつつ仰ぐ

隣りたる溝にすまふといふのみに亀の姿を見たるやすらぎ

掃溜をわずかな距離に去りて飛び鴉は眼をわれに向けたり

赤き花すでにあらなくほほけたる穂のみが風にゆられてゐたり

むき出しの牙に蛇など襲ひゆき犬は眼を夏の陽に研ぐ

実の熟れを運びて夏の降る光りトマトの朱のつぶらかにして

首ほそき先に尖れるくちばしをつけし白鷺水に立ちをり

火の色にカンナの花の開きゐて昼の光りに直ぐく立ちたり

西瓜の玉藁に隠して畑あり人の生きるはさびしきものぞ

空高く飛ぶ鳥見れば大地踏む二本の脚をわれのもちたり

こめおりし霧がガラスにかたまりて一つになりし流れもちたり
一つなる流れ分れし水分れのせせらぐ音は耳を傾く
今少し惜しむ命ぞ飛ぶ鳥のはるかな峯を越えてゆきたり
沫立ち岩に砕くる海波は沈みて泡湧き水に消えゆく
一ところ点り輝きゐる故の闇の深さに人等動きぬ
岩肌に生えたる松はこまき葉に育つ姿を整へてゆく
満ちわたる茜の光り夕陽は終らん力ふりしぼるかな
彼方より風来るかなと目を上げて峯と分てる空すきとほる
本を閉ぢ残るコーヒー飲みおへてしばしとおもふ瞼閉じたり
玻璃越しの人の往き来の明らかに見えて一人の問ひの起りぬ
昼食にわれを呼ぶ声作りかけの歌は異なる形に生れん
美しと思ふ心がそらしたる目より女はすでに離れぬ
はんらんの泥の乾ける堤見え歪みて草は立ち上りをり
密々と水草生えて水見へず炎暑の光り草より反る
食べ足りしただむき白く少女等は炎夏の道に笑ひを散らす

茫とゐるときを求めて坐りしが電話の鳴れる音のひびきぬ
暑き日は暑しと言ひて過ごすべし田に立つ人と手を挙げ交はす
天に向き伸びたる茎に次次とトマトは種子もつ実を結びゆく
炎熱に竹群茂り毒蛇の縞明らかにここに育ちぬ
参加することに意義あると思へども逃せしメダルを亦も言い出ず
のがしたる五輪のメダル口惜しく日本人よりつひに抜け得ぬ
首低く伸ばしゆきゐる白鷺の眼に映る魚のあるべし
動きしと思ひて見たる白鷺の嘴に銀鱗光りてくねる
捕へたる魚を首振り呑込みし白鷺動かぬさまに立ちたり
祠立つ故に切らざる木木老いて木蔭の歩みしずかなるかな
幾重にも梢重なる蔭冷へて深める夏の歩みを運ぶ
田を覆ひ稲の育ちぬ年々の限りなき青今年(こんねん)の青

王塚　八首

いにしえに権力ありき大きなる土盛り上げて塚を作りぬ
加古川の平一段(たひらきだ)高くなるところに王の塚作られぬ

一望を己がものとし眺めたる王者はここに霊を鎮めき
みやびなる歩みと汗垂る働きに分ちて人等ここに生きたり
耕して食へざるもの叱咤して日夜のうたげなしゐたりしか
力あるものの勲を力なきもの等集ひてあらはしゆきし
鴻毛より軽き命と泰山より重き言葉に分ちてゆきし
仰ぎたる頭の低く垂れ来たり罪輝きて世の中ありぬ
赤き殻道に散ばりざり蟹の生きて居りたるはさみ尖れり
美しく咲かせられては切られゆく花園とふを出でて来りぬ
商品となさんが故に美しく咲かせられたる花園なりき
金色に阿弥陀三尊輝けり人悲しめる底ひのすがた
甘き果漿瓜に蓄めゆく陽光のはげしきものを浴びてゐるかな
はきだめに鴉騒げり食ふものを多(さは)に得たりしおのずからにて
目の集ふ重さに乳房もつ女布に吊り上げ歩み来たりぬ
拭はれてすきとほりたる窓ガラス明らかなるを瞳愛せり
池埋め魚を埋めて成る道のわが靴音のひびきゆくかな

看板の店は倒産なしてをり赤あざやかに光りを反す
夕風にゆれてをりたる庭の木は眼窩の闇に沈みゆきたり
散歩する道に作れる歌二つよき方の歌を忘れてしまひぬ
白すみれ紅く昇れるねぢり花犬と歩めるをりをりにして
憎しみは激しきいのちに生るなれば毒もつ蜂の夏を飛びたり
照り出でて光り交せる楠の下葉の陰の深くなり来ぬ
蛇を見たる犬は歯に裂き殺したりいのち常なる営みとして
鎌に刈る老夫の傍に寄りゆきぬ鎌をひさぎて生き来しわれは
黒き服に葬りの歩みつづけるを歌を作らん目にて眺むる
光りつつうねりて溝の水流る野の血液の淙淙として
夜を勤む男は暑き日の差せる稲田に立ちて肥を振りをり
丈高く茂りてゐしは吹く風に倒れて細き茎をさらしぬ
疎まるることを語れる女童の目の燐光の如きを宿す
一歩宛耐へゐるべしと炎天下バス停迄を歩みゆくかな
炎天に稗をひきゐし老人は笑へる声を出して答へぬ

あぢさゐの花移りをりよろこびの形新たに抱く人のため
おらび合ふ声に走れる童等の過ぎて炎熱の道のつづけり
見はるかす草野の中の点として草刈る男少しにじれり
遠く見る瞳となりし少年は迫れる闇にながく立ちたり
釣られては水に返さるうろくずの棲む釣堀も昏れてゆきたり
希望より不安となりて未来ありいつより移る記憶のあらず
波立てるおたまじゃくしの拡がりもわれの歩みと関り親し
いちじくの熟れしを蜂に食べられぬ食(しょく)に関る蜂殺すべし
鮒の棲む溝となり来て遡る水脈の立ちたる水となりたり
しょうじょうと天を指しゐる夕凪の稲の葉先よ我も仰げり
三ケ月は蒼き光りを研ぎてをり我の一生(よ)の修羅に生くべく
かすかなる明りを燠は放ちをりしんしんとして世界は夜
大きなる犬歯を出して犬歩む闘ひ求むる先とがりたり
こだはりを捨てんと思ふこだはりに水の畔に出でて来りぬ
曲りたる道に車の傾きてドアの確かな鋼板に触る

思ひ出の鮮かなるは食ふことと殴られたるに戦時のありぬ
服にかくすししむらの欲宴席の椅子に背すじを伸ばしゆきつつ
いにしえゆ男の子の瞳かなしめし乙女のうなじわれもかなしむ
自転車を畦に止めたる老二人手に円なども示して語る
渋紙が目をもつ如き顔上げて雨の降らざる畑を語る
曲線を刻める石が石垣に混りて如何なる遍歴をもつ
絶ゆるなく香の煙を立たしむる敦盛の首細かりしとど
八王子の神の殿居の跡もなく稲すくすくと伸びてゆきをり
乾く土に細く立ちたる茎に咲く一つの花は泣かまほしけれ
自動車の起せる風に舞ひ上り路上の紙はさすらひてゆく
瞳のみ動かし入りゆくわれを見て待合室の沈黙ふかし
表情を変へざるままに坐りゐる人等それぞれ病を抱く
表情の動かぬままに人並びナース凛たる声に名を呼ぶ
自動車のライトひらめき夜の壁に眼光れる蜘蛛の居りたり
白鷺は輝く雲に溶解の成りしがしばしに抜けて飛びたり

流れゐし公園の水止められて廃業したる店舗の多し
手袋が淀みの底に沈みをりはめゐたる手は何処にありや
語りては声挙げ高く笑ひゐる男の言葉の貧しきも知る
それぞれが綴りてゆける声を挙げ七月七日星を仰ぎぬ
光りつつ緑の葉波渡りゆき稲株今日の分けつをなす
歌のことを歌になしたり泥すくひ食べたる如くはかなかりけり
座右の品となりし孫の手風冷えて汗疣の退ける迄のものにて
死を思ふ心桜に至りたり永く古人が伝へたるもの
夕映へが渡りて茜に染むる中われあり常にはあらぬ思ひに
透明の水こまやかに樹を映し思惟の未熟をあばきてゐたり
他者の目のために撰べるシャツの柄女幾度も取りては戻す
屈辱を記憶は多く保ちゐて時に悲鳴の如き声出ず
スポーツ店に靴撰びをり底に踏む峯は雲抜きそびえ立ちたり
一斉に草のなびけり一斉になびくは戦の惨につながる
抗ひて生れる力の存在感雀ももつや羽の乱れつ
毛の抜けて吹出ものもつ野良犬が死ねざる眼向けて来りぬ
大空を二た分けにする鳥の声力満ちたる声わたりゆく
一匹の蛙の屍の浮ぶ故夏の真昼の堀しずかなり
厚き雲出でて来りて青空はせばまりゆきつつ青ふかまりぬ
色あさき紅紫の豆の花炎暑に疲れし瞳に点もす
一せいに灯にふり向ける盆踊女等白粉ぬりてをりたり
月映す秋の小川に目を洗へ水清かりしときに伝へり
飛び立ちて亦降り来たり雀等も余剰の時をもちてゐるらし
大空に雲ゆるゆると流れをりせまき露より出でて来りぬ
はるかな社殿の中のくらくして白明らかにぬさの垂れをり
居酒屋の饒舌に背を向けて掛け腹にひろがる燗酒を飲む
罪として生れ来りし人あらん内出血の痣を見守る
にやにやと思ひ出笑ひなしゐるを見られてゐるに気付きぬ
断崖に飛びて遊べる鳥の群羽なきわれは怖れに眺む
田を分ける集ひに人等つめかけて争ふ肩のさまに坐りぬ

飛翔する羽持たざれば限りなき星の光りに瞳の至る

われも言はむことを言ひたる閣僚の謝る言葉が翌朝に載る

われを見し田鮒にあらんましぐらに草の蔭へとかくれゆきたり

かくれたる田鮒は草より尾の出でてゆるゆる水を動かしてをり

日本の秀歌さもあればあれ身に近き人の心の在処ど読まむ

吐く息は白く凍りて消えゆけり稀薄となりて空に澄みたり

これの世の責を逃れて過し来ぬ湧きくる言葉にひたすらにして

宵となれば盃に酒を満たしゆく唯これほどを期して待ちをり

かすかなるいびきを立て寝たるらし誰も犯さぬ聖域ならん

朝の日の透かし来れるよろこびに若葉は競ひ空に展きぬ

越ゆるべき峯と眺めし若き日よいたく視力の衰へきたる

ふるさとを遥かな果にもてる目か澄む空際を恋ひゆき止まず

並びゐし人が帰りて冷コーのコップ林立のかがやき交す

馬の背に翼を生やし空を飛ぶ絵のあり駆くるは言葉にあらん

木を伐らん斧が納屋隅に置かれあり忘れられたる錆を吐きつつ

長生きをせよと言はれて定まりし運命などに思ひの及ぶ

毒をもち生れ来りし蛇などを一人の室に思ひてゐたり

つひの我があらむところは何処とどもの皆沈む夜の道ゆく

入道雲動かぬ夏の日の照りて吹きゐし風のはたと止みたり

浴槽に溢れるゆあみ井に汲みてばけつに運びし記憶を生かす

柿の葉を食べつくしたるいら虫の落ちて乾くが土に累なる

見はるかす山につづける稲の田を畦に区切れる人のさびしさ

日曜は若者多し白き腿半ば出したる少女の群も

輝ける脚の白き恍惚女等は夏の日差しに歩み出でたり

高き支柱登りゆきたる朝顔の高きが故に萎えの目に立つ

ゆるゆると満ちて流るる長江の狂瀾生まぬ水の量みゆ

挟みもつこんにゃく卓にぬめり落ち力失せたり年々にして

工事場に旗振る男の服濡るるわれに倍せる汗の量見ゆ

今日ありしことの全てを喋り終へ男居酒屋を出でてゆきたり

今日ありしことを語れる酔どれは横向く男に相槌求む

新しき道作られて白く照るガードレールの山坂となる
寝返りて顔にのせたる幼な脚肉やはらかく抱へて移す
ほうり込みしシャツはたちまち白濁の洗濯液の中にうねりぬ
金色に雲のりんかく現はれて曇れる空は夕映えとなる
抜き捨てしカンナの草の年を経ておのれ生きゐる領域をもつ
一輪の咲くたんぽぽに見廻してあまた整ふつぼみのありぬ
教室に集ひし心おのづから出されし歌をひたと見てをり
会終はり足らぬ思ひは室を出てひさしの蔭に言葉を交す
草づたふ水落つ音のかすかにて足おのづから向ひてゐたり
ざり蟹は何処に行きしや照りつづき草の根が抱く泥も乾けり
歩みゐるわれに寄りくるとんぼあり秋の野道に並びゆきたり
急速に夕映え来りはしりたる鳰は茜の波を散らしぬ
いのち終る前のひと時実の充ちて稲穂は深く垂れて来たりぬ
飛びおりしとんぼ幾匹歩みゐるわれの傍へに寄りて来たりぬ
かげりきて映れる木木の蒼さ増し山に囲まる池しずまりぬ
みどり透く果肉に皮のむかれゐて皿にまくわの盛り上げられぬ
言はざりし言葉つぎつぎ言葉生み別れし後を歩みゐるかな
一年の木の営みがもちてゐる花の開くは十日程にて
コーヒーを置くとわずかに俯するとき少女の胸のひふの透たり
窓の葉に日の差し来り新しくあらん朝の眼を洗ふ
夕光に稲葉の鋭くとがるとき米にひそまる歴史のくらし
碗の飯残せる犬はつながれて野に生きざりし尾を振りてをり
おくれたるバスに時計を眺めをり詮なきことを人はするかな
曼珠沙華一むら咲きてくれなひの花に澄みたる秋の野のあり
残りたる命いくばくと思ふときひと日充ちゆく稲の穂のあり
はるかなる星の光りの点れると木蓮白く夜を覚めたり
その肉に甘き果漿を満せるといちじくの実は艶もちきたる

重成出陣　五首

夢の世に生れ来りて残らんは名のみぞ今日は死ぬる戦ひ
香木の煙を兜にこもらしむ首実験の敵ににほへよ

検べたる大身の槍に異状なし血に染めこの世の命終らん
庭を吹く風すみとほりさむらひの家に生れたる眼過ぎゆく
共に今日死なん命ぞ怯むなく馬よ白刃の中に駆け入れ

冬眠　七首

冬ながき眠りに入らん蛇にして鱗光らせ日を浴びてをり
井の中に泳ぎてをりし蛙等も冬の眠にはいりたるらし
大きなる地に還りし万の種子冬の面は草の枯れたり
霜を置く枯原広く大きなる地は冬越す命を抱く
冬ながき寒さを越さん種子や虫抱きて大き地しずもりぬ
凍てつける下に眠れる万の虫大きな地に日差しわたりぬ
土底に眠れる虫をおもほへばわれらは人に生れ来りぬ

凧上げ　五首

凧の糸握りて走る少年は亦もふり向き凧に目をやる
昇りゆく凧が開ける空のあり少年果なきものを追ひたり
昇りゆく凧の領じる大空に生れくる明日を少年抱く
憧れて果なき空のあるべしと少年凧の糸ひき止まず
飛ぶ鳥に大空見たるいにしえの心よ今も凧を上げたり
急速に渡り来れる夕映えを老いし血潮につなぎて立てり
年ながく看とりし夫をおくりおへ疲れし足の萎へて来ると
赤かりし故に褪せたる曼珠沙華どうしょうもなし命ふりゆく
頭上げ尾を上げ犬の歩みくる満ちくるもののおのづからにて
朝霧に閉じこめられたるお日様が光り失せたる顔を覗かす
ペンと紙ある恩恵のしみじみと山中に歌一首出たり
おのづから人踏む草の径となり釣竿をもつ人等の通ふ
まろびゐる紙を咥へて振りゐしが犬はたかぶりの鎮みたるらし
手鏡に写して眉を引きてをり犯すべからず厳しその顔
からからと高く笑へる青年の動ける喉は我より消えぬ
白き帆の風を孕みて走りをり男の心乗せたるひたに
言ひたるは忘れたるらし傷痕のひきつる言葉抱きて坐る
鳴き交し枝より枝へ飛び移り雀は朝の光りを迎ふ

落したる種子の上より土被せその混沌に思ひを致す
朝顔の双葉兆しぬくれなひのまだ見ぬ花の信じられゐつ
蝶々と毛虫の神経のつながりを思ひて畦を行き過ぎにけり
おとがひの我の齢にゆるむ肉やや垂れたるが写されてをり
大きなる地(つち)に帰りし万の種子冬の表の平かにして
昏れてゆく涙となりて水たまりしろしろとして光りを抱く

闘鶏　七首

爛々と光れる眼に檻の中動きて鶏は闘ふを知る
逆立てる毛となる頭やや低く二匹の鶏は対ひ合ひたり
躍り上る爪に蹴り合ひくちばしに肉をちぎらん嚙み合ひ続く
勝ちたるは頭を上げて歩きゆき負けしは羽を収めてすくむ
勝敗の終りて勝ちしを賞むる声我は負けたる鶏に目をやる
生き死にを賭けし争ひ止まざるが生れ来りし命なるべし
すくみゐる負けたる鶏を眺めつつすき焼にして飲まむと語る
防除の布令出でし稲田に虫の跳び知らざるところに死は図らるる

大和の古道　七首

浄瑠璃寺近道と書く木標の岩の露はに下るを指しぬ
山あひの岩の露はに草なきは道にて急なる下りを見する
雨水の流れしままに岩の出で曲りし道は谷へと下る
手を挙げて平衡とりつつ坂下る岩の露はに曲れる道は
木の枝を摑みて下る岩の坂谷に祀らる石仏多し
並び建つ石の仏はこの道を行きて死にたる人を祀れる
浅き洞なしゐる岩に刻まれて三体仏は難路を守る
刈られたる稲田となりて原の澄み瞳はじかに山に至りぬ
つややをもつ少女の指と吊皮に並びて乾ける皮膚となりたり
代掻きの終りし宵のしずかにて蛙は年々絶へてゆくらし
どの株も直ぐく上向く葉となりて早苗は既に根付きたるらし
水げんかありたることもはるかにてダムより来る水は音立つ
くちばしの黄なる白鷺田の畦に並びて命去年と異る
炎熱の光りを鱗に反したる蛇ゆるゆると草むらに入る

鴉一羽谷を渡ると見てゐるに追へる一羽が現れきたる

波頭砕けて白き冬の風渚は人の歩むを拒む

波の音のみが轟く冬磯の漁る人の影あらしめず

吹く風を鋭く鳴らしことごとく葉を落したる梢しなひぬ

純白のひろげしちり紙にかしこみのかすかにありて口許拭ふ

ながき日を短歌作りて来しからに死を最終の創作とせん

わがおもう死を演出する力いまはの際に残りておれよ

おん寵といふものあらば与へらる死こそ最も大ひなるなれ

赤青の鱗ひらめく熱帯魚なじまぬものと離れゆきたり

釣りをりし人等も糸巻き籠持ちぬ我も帰りて飯を食ふべし

歌集

犬と

今年の夏は暑かった。八月に入ってからは本を読む気がしなくなった。それで短歌を作った。短歌は一首一首が完結するので労が軽い。算えて見たら六百首程あったのでこれだけを撰って印刷することにした。

コーヒー店と犬と　とは以前の作である。

平成二年九月

亡き母　八首

言はざりし泣かざりし母今にして我に寄せたる思ひの深し
ひとの苦をわが苦となせし母の影野の血を溝は循せゆけり
さつきつつじ木蓮の木を母植えし死したる後を花の咲きつぐ
花の咲く木を植えたりき生きの日の愛しき眼を母の托しぬ
古き羽織じんべに直し母の着ぬ黙して欲すことのなかりき
心とは他者を己れとすることと母を憶べば哲学生るる
香煙のゆるく昇れる母の塚汝が植えし木の花今咲かず
母の塚置く石さびぬ暫し待て汝が逝きし歳に我も近かり

盆　七首

山川は言葉をもてばちちははの生れて我の継ぎて来れり
この土ゆ成りし西瓜を切り分つ亡き母を今日は思ひ出す日ぞ
仏壇に刻み込まれし累代の顔を知らねば名の有難さ
骨埋む墓所あることの安らかに祖先の御霊迎へまつりぬ
悔しみて母思ひ出す目に花咲けり母は祖霊に手向けていたり
木蓮は母の植えたり重なりて花輝けば母の輝く
死と生の測りがてにて母距つうつつより顔輝きながら

コーヒー店　九首

おしぼりに拭ひてゆける兎匂あり椅子にふかぶか腰を掛けいる
コーヒーを運ばるひまの茫とゐて外は行き交ふ人々の肩
コーヒーの立てゐる香りそれのみに暫く時をふりしめていつ
コーヒーを一口呑みて目を閉ぢぬ人に押されて駅を出で来し
コーヒーのかすかな苦みを舌にのせ離れてゆける日常のあり
コーヒーを置きて新聞手にとりぬ世界に関る我となるため
移りゆく世界も我の外にして新聞置きて伝票摑む
しばらくを己に還る時過し確となりし歩みに出ずる
ドア押して外は行き交ふ人の群売らねばならぬ我となりゆく

犬　六首

上履がなくなり靴の片方がなくなり仔犬育ち来りぬ
犬よその我を待ちゐるし跳躍に夕つ茜の光り動けり

わが家の範囲を犬も領域となすらし吠ゆるを境に止める
おとがひに帽子のひもを結びおり犬と出でゆく天涯の青
麻シャツと肌の間を風走り早苗は伸びゆく一せいの青
草の波打ちゐる堤吹き過ぎる風と走れる犬を呼びたり

慈雨　八首

亀裂入る土に沫を立たしめて雨は葉を縒る草にそそげり
亀裂入る庭に流るる雨降りて青新しき万年青となりぬ
葉を垂れしブーゲンビリヤに降れる雨あえかなる紅未だ出でいず
雨の露葉末に結び畦の草久方ぶりに緑の繁し
しばらくは虫の来らぬ雨の後洗はれて青き万年青しずもる
捨てられし鉢の草にも雨降りぬ枯るる日延びたることの哀れに
灌水の用なき今日と訪ね来てたばこをながく吸ひて語りぬ
雨が降りて炎熱収めし後に見ゆ草のそよぎに歩み出でたり
土乾く光りの激し鶏頭はひたくれなひの花を掲げぬ
新しき橋の手前で中止せるバイパス此処より車混み合ふ
頑なに売らざる一人バイパスは此処より曲る道に続けり
赤旗を掲げて歩むメーデーの後の方の人等唄はず
すかんぽを食べたる山の木々茂りわが生れたる天地しずもる
照りつける夏の真昼の風凪ぎて照葉は刃金の光り返せり
黒き雲次第に厚く庭の木々ゆるがし風の吹きて来りぬ
蜘蛛と蜂一つになりて地を移る足動けるが捕えたるらし
旱天の月余に及び葛の蔓茎の露はに葉を散り落す
新盆に集へるもの等老ひしるく葬りの順を笑ひつつ言ふ
泡生れ消えゆく水の落つる下石いくつかが磨かれ並ぶ
水落つる音の顕ち来る夕まぐれ死をもつ人のいちにち過ぎぬ
旱天に縒り合せゐし草の葉の降りくる雨に開きゆきたり
石のおもて濡れてゆけるは雨降りぬ一人留守居の顔を上げたり
私には感じることが出来ぬと言ふみみずに空の青が解るか
炎熱の日々が続きて杉の秀のかすかな揺れに敏き目となる
木蓮の白く咲けるは母植えぬ悔しき我の思ひも開きて

死も近く見るれば常の日のごとし葬りに夏の汗を拭ひつ
流るる汗拭へるのみに炎熱のこのひと時の過ぎてゆくかな
流るる汗拭ふのみなるひとときの過ぎゆくものに冷ゆる目となる
星の光り集めて水の白く顕つ夜をみひらくもののさびしさ
ダイヤガラス距ててシーツに風の吹くその明暗に暫し関はる
新聞の配られ朝を起き出でつ昨日の記事の記憶をもたぬ
和紙を貼る杉柄の団扇にみすずかる風生れしむる憩なりけり
おのが手に煽ぐ団扇のなつかしく暫し遅速をくり返したり
盆三日の休みが過ぎて朝まだき草刈る音が響き来りぬ
水深く湛へて湖は神の秘ぞ底干上りて石の見へおり
何故に泣きてゐるかを忘れたる幼は菓子に走りよりたり
ひとの言葉肯き易き妻と居て諍ひは多くそこより来たる
己が目で見て言ふ我は他者(ひと)の言葉肯き易き妻と諍ふ
夕闇の迫り来りて風冷えぬ山際一すじ茜透きたり
五年目の記録の暑さひたすらに耐へおり老ひし脚と知る迄
いちじくの皮に群がる蟻となる昼寝を了へて歩み出でしに
霊送る燭が照せる草の葉の下を流るる水の音する
いつ迄も医者に尋ねている老婆思案が作る病みもあるらし
馬鹿話などもち出して帰るとふ君を止めぬ夜の留守居に
話題つきて黙しの重き暫くや互に惜しむ別れもちたり
過去りし悔しき日々を亦思ふ躍る血潮に生きて来りし
今日を亦悔しく返す日のあらんいのち如何なる今かを知らず
土に伏し草引く老女に言問ひて咲きゐる菊は祖霊に供ふ
夏晩き夕への光りの澄みとうり女は供ふる菊を切りたり
炎熱にまむしの多く出る話夜道の縄を避けて通りぬ
炎熱を嘆けるのみに過ぎたりと落暉は赤く我に対きたり
ながくながく父母と暮して来し故に父母を疎みぬ死別なしたり
泥鰌とりしたなぞこ今に血の熱くこの溝ゆきて魚影を見ず
暑き日々続く心臓の弱まりにむくみし脚を指で押しおり
講演に来りし先生が言ひたりと押しつけ語る聞くにあらぬを

殺虫剤かけたる後に石を這ふ蟻なきことも夏のさびしさ

水のある所の草の丈高く土乾けるは葉を縒り合はす

旱天に大方葉の枯る南瓜の蔓先つやもつ実を結びおり

押入れに麦藁帽子をさがしおり炎熱いく日耐へいたりしが

盆すぎて朝やや冷えぬ本に積む虫のむくろはながく読まざり

祖霊住む盆十五日こもりゐて芝田すみれの是空読み了ゆ

軒に置く石の濡れくる二、三滴見上げて空に雲の走れり

去年の蔓今年の蔓のからまりの露はに葛葉旱りに枯れる

ガラス戸に映る己に犬の吠え去らざる影にながく対ひぬ

一人飯を食いつつ　八首

雲南ゆ来りし米のときながく一人留守居の碗によそひぬ

温き飯食ふこともはるかなる時を経て来し留守をなしつつ

米のもつ歴史はおよそ作りたる者等奪はれ食ふを得ざりき

粉米食べ上米売りし祖先等の昔のありて碗に飯注ぐ

奪ひ合ふ水に血潮を流しつつ獲りたる米は年貢にありき

皮膚の上に血管くねれる痩せし腕車力を引きて年貢運びき

年貢の納めどきとう言葉伝へ百姓ありき水呑と言ふ

年貢米納めし帰りに焼酎を煽れる喉の骨顕ちゐたり

半分を持ち来し幼はしばし見て亦半分に分ちてくれぬ

忘れしと思へり交通事故かとも思へり三時過ぎても来らぬ

一つ倒れ二つ倒れて皆倒れ吹きゐる風は強さ増しゆく

八方に揉みしだかるる葉の見えて吹きゐる風はそこに巻くらし

ガラス戸を流るる雨に歪みたる人現はれて去りゆき消ゆる

思ひ切り手足拡げて寝転びぬ我が家のたたみに帰り来りし

目を閉ずれ落ちゆく如き疲れあり鈍くかすかな快楽伴ふ

翅透きし蟬が地に落ち動かざり透きたる翅のあたりしずかに

わが心ここに封じてあることの不思議に切手直ぐく貼りたり

幾人の手を経て届くハガキならんポストに落ちし音のかすかに

わが後を常につき来るこの犬のかわゆし疎しは時のおりおり

打ち続く炎暑に弱りし目の痛く白き光りを地の返せり

泡をもつビニールの泡を一つづつ潰しておりぬ一人の留守居

一夜経て本に積みたる虫の死の斯る過剰に夏のありたり

受講日はいつかと開き今日なりきはるかに先と思ひおりしに

照りつけて白き光りに陽の射ぬ乾きたる土灼けたる舗道

彼岸　六首

集りて墓石のあり苔むすを花盛り上げて香煙くゆる

手を合はせ香華供へて墓石はとうき祖先の声をもちたり

集まりて墓あることの親しさよ必ず我に来る死のあり

何の墓も花を供へし彼岸会の我もここにて祀らる一人

魂は如何に食すらん好みたる酒を墓石の前に供ふる

好みたるものを供ふる親しさに塚あり清く草の抜かれて

照りかげり激しきひと日杉の秀の今明らかに影を落せり

尿する沫に寄り来る土蛙土に紛るる黒き瞳は

伸び直ぐく青き竹群通ひ来し風は額の汗を収めぬ

かろがろと風が運びて蟬の死の腐臭放たぬむくろありたり

わが力斯く残りゐて傍の男振り向くくしゃみをなしぬ

白雲は王者の歩みゆるゆると見ゆる限りの空に遊びぬ

柿の葉を食ひつくしたるいら虫は黒きむくろになべて落ちたり

コンクリートのはざまにながし明日こそは花を開かん蕾ふくらむ

行き交ひに挨拶なせる人のあり過ぎて先日言葉交しぬ

歌一首出来て食後に寝ねいたる炎暑の昼を立上りたり

放たれし蟬は虚空に飛びゆけり虚空の深さ瞳の知らず

額の汗拭ひつつ仰ぐ峯の上入道雲は動くともせず

鳥飛びて虚空の深さありたりき歩める道に瞳返しぬ

しろがねの露を満せる草の畦いまさら今朝の風の涼しき

針目よりトイレペーパー切りとりて我は掟に従ひやすし

曼珠沙華は毒もちゐると寄らざりき兇しき紅の色にてありき

壁と壁そそり立つ間に空見えて鳥飛びゆけり小さくなりつつ

葬りに集ひし人等お迎への順を語りて多く老ひたり

運び来し砂に一本茎のみの直ぐき草生ふ此処等に知らず

キュイーの支柱越えたる蔓の先越えたるものの揺れいて止まず

五旬経る炎暑に耐えて新聞の天気予報を先ずはひろげる

七彩の光り走らせ捨てられしからすき貝の内部ありたり

蟻寄せる砂糖を置きて殺虫剤入りゐる缶の重さはかりぬ

耳そば立て犬の吠えたり風の中何処か犬の鳴く声のある

深刻な顔が写真に写りおりその顔一人の時にのみせよ

紙きれが屋根越えたるを見届けて颱風情報聞きに立ちたり

湯を出でて吹ける風ありほてりたる体冷やすは明日を生くべく

くちびるの稍ひきしまり殺虫剤かけたる蟻の死ぬ様を追ふ

殺虫剤かけたる蟻の曲りては伸びくり返し死にてゆきたり

生の意味問ふ声聞ゆ殺虫剤かけたる蟻の骸の積むに

傘傾け降り来る方に身をかくす我も同じきさまに歩めり

つながれし鎖の犬は音絶へし夜の深さに声あげており

泡をもつビニールの泡を潰しおり残すことなき思ひ兆しつ

大空の青きは光りの翳沈む行かざらめやも深き底ひに

突き抜けて飛びゆく裡の鳥のあり瞳届かぬ空の深きを

台風の過ぎたる後の空の青朝あたらしき光りに歩む

いちじくの皮落ちゐるに歩み止め群る蟻のいとなみありき

声が生む声のたかぶり卓囲み二人の男むかひ合ひおり

囲碁　六首

口惜しくはあらぬとおもふ負けし碁の続きて負くる三度（みたび）、五度（いつたび）

碁を打てば口争ひとなる二人会ひて直に打ちはじめたり

硬直をなして来りし負けし顔互にて前は我がなしたり

注ぎゐる相手の視線追ひゆきて負け筋見ゆる打つ間のながし

目で追へるしちょうの行方読み切りて発止と石を打ち下したり

気付かざる相手の石の死がありて勝たしかむる目算をなす

一匹の蟻が放りてゐたりしが二匹となりて動かしおりぬ

石に古る武者の雄叫び城跡の垣のみ昔のままに残りぬ

石垣を登らんまなじり決したる武者の血潮を我に循らす

朝々を変らぬ高さに仰ぎ見る杉の秀十年伸びたりしかな

大企業が注目せぬ故かつかつに今日を生きるとびん髪白し

吹く風ははるかに音を伝へゆく戦に焼けし石垣の上

夕闇の地より我を囲(めぐ)り来て姿消ゆるは内に凭らしむ

夏の朝の未だ冷えもつ石の上梢ゆれいる影の澄みたり

夜の冷え保てる石に木影揺れ登り来りし腰をかけたり

照りつける夏の真昼を山茶花の照葉は激しく光りを返す

黄に咲は爪切草の花にして裏庭に生えし所以を知らず

裏庭に切られし石の置かれいて切口黒く雨に濡れゆく

剪り込みし山茶花の枝の間より遠き山見え風通ひくる

窓前の杉を映せる我のあり曇りて今朝の葉群しずもる

乾きゆく壁が亀裂をもつことも一人坐しゐる室の前にて

打ち合は大工と左官の声聞えやがて釘打つ音のひびきぬ

馬穴提げ登りし男屋根に置く板を平地の如く歩みぬ

銅板の赤き光りがひらめきて自在に切らる窓に添ふべく

銅板の赤きひらめき時折に室をよぎりて樋かけられぬ

掲げるを見ていしものを銅板に飾りし廂妻の言ひ来る

日付けして歌を作れば室に居る時間の多く歌に関る

好めると言へば賜ひしいちじくの甘きを暫し口に保ちぬ

潰すことの快感なども泡をもビニールの泡を潰しおりつつ

弱きものに痛み押しつけてゆく論理我ももちたり母を憶へば

少年の瞳かへりて来れると山際の空すみとうりたり

散策を何処に行くかと尋ねられ唯歩めるも他者に関る

ほてりもつ鋪道の風が山蔭に入りて額の汗を冷やせり

岩陰の暗きに萌す草ありてわが目しばしばそこに向ひぬ

握りたる砂を放るは幼な児の肉育つらし返して止めず

蹲り種子伏せており土と人の関りながき畑のしずけさ

かすかなるものを目の問ひ岩の蔭萌しそめたる青き草あり

湧く水に砂動けるを見るたるは此処にて山の削られており

散りたるは忘れられいて花鉢の白く乾ける土に並べり

打ち終へし腰板離れて見ておりし大工は確な歩みに去りぬ

庭の草引きゐる妻を書斉より見ており座椅子に背を凭らせて
休けいの三人おれば三人の笑ひ声する二人よりたのし
おおむねをかくすと思ひゐたりしがすき間許さぬ紙貼りとなる
手にとりし葉脈精し葉脈の精しくなれる歳月知らず
収穫すみし園に梯子の忘られ人の居らぬは天に掛かれり

鎌工場　六首

名を呼べば暗き隅より応ふ声焼入れおへし泥落しおり
砥に当てて刃金の光り生れ来る鎌工場の暗き一隅
水かけて研ぎの鋭さすかし見る砥の粉の白く乾ける顔に
手の応ふ砥に当てる角度定まりて刃付ひとしく鎌の並べり
扇風器一つが風を送りおり炉火に顔照る夏の工場に
子等は皆服着て朝を出でゆけり鉄打つ炉火に肉の映えつつ
炎熱の日々も五旬に狎れ来り一さじ多く飯をよそひぬ
狎れ来しと弱り増しぬの分ちたる言葉に炎暑を語りておりぬ
壁を塗る人はひたすら塗りており生きいる問ひの何事かある
行き交はす人等を知らずひとも知らず互に出せる足のみがある
炎熱の続くこの頃飯うまし親より賜びしこのししむらの
黙山の気峰読み来ぬ炎熱と思へることも迷ひなるべし
炎熱の五旬続きて今朝冷ゆる五体しみじみ庭に立ちたり
自動車の同乗頼み後は後今日日曜の晴れ渡りたり
今朝の風冷えて吹けるに炎熱のほてり残れる背すじ伸ばしぬ
今朝の風に赤き梯子も冷えいむか炎昼を大工等登りていたり
草の影長く曳けるを踏む朝老ひては道のしずけさのあり
小さなる舟に漕ぎ出る遣唐使隅に難避くにえびとを積む
風の吹くままに動ける白雲を否みて見しは若き日なりき
ゆるゆると風吹くままに空を行く白き雲ありおのずからなる
年を経て新たになりゆく思ひ出の母はよく反る指もちゐたり
あらあらと雨の打たる砂痕に青さ増したる草の伸びたり
妻の寝て大工休みししずけさに庭に這ひゐる蟻を殺しぬ
一人居て或は起る兇事（まがごと）の思ひに騒立つ胸となりゐぬ

起き上り犬はとんぼを追ひゆきぬ動くもの見ぬ庭に寝ねいし

地に落ちしとんぼ拾えば足動くそのかなしさを見つめていたり

空よりの呼ぶ声あらむ蔓の秀の支柱越えしが風に揺れたり

ゆるゆると降りし白鷺野に生きるものの眼を我に向けたり

降り立ちし白鷺眼を我に向け敵に非ざる向きを変へたり

見はるかす村はげんげの花満つを寸争ひて地(つち)を区切れり

雨沫立ちたる泥の戸に乾き老ひし二人のひっそりと住む

明らか断らざりを悔しみつとりし電話にいささか怯ゆ

否という言葉疎みて延ばせしが明日は愈々会はねばならぬ

死ぬ怖れと無残の生きを比べつつ生きゐる方が少しまさるか

手を引かるる養老院を写しおり後十五年程の齢の

ふみしめて一輪車を押しており小石などにて時によろめく

稀にしか見ざる暦のなくなりし事に関り妻にも尋ぬ

見廻して何れの窓も閉しあり一枚の葉が廊に落ちゐる

言葉多く清潔ずきの妻の為め廊の一つ落葉拾ひぬ

くろぐろと闇に沈みてゆく屋根の下なる臥床に寝むと入りぬ

悲しみのあらざる我とひとの言ふ悲しみはものを知るより来る

ひと日居ぬひまにはられし腰板の黒き我家に帰り来りぬ

鳥等皆眠りに去りて闇覆ふ古人はこのとき鬼を呼びたり

一つの窓は一つの家族住ひゐるアパートの夜の灯り並べり

ひとりひとり異なる嘆きもちゐると夕餉を照す一つ灯りは

仮借なく捨て得ることをプロとして魚屋は骨を桶に放りぬ

返り花我に咲く花本の塵吹きて机に坐り直しぬ

生れ来る前を思へば闇深し死したる後の闇深きかな

生前の闇死後の闇なるはざかひの今日の光りの原に満ちたり

ペンの先ノートに向けしままにして言葉出でざる沈黙におり

転びたる女に刀振上げし画面は明日の続映報ず

葉脈の精しきものを手にとりて思ひ追ひゆく神に至らな

庭前に植えし杉の木日々に見て明暗おのずと心写せり

占　い　　四首

提灯に運命鑑定の文字を書き男立ちおり街角暗く
悪しき方へ悪しき方へと人思ひ占ふ男夜を灯せり
ト占と灯せし夜の街角に兇しき思ひ湧きて過ぎたり
定まれる命か知れぬ我はわが定むるものを求めて生きる

人のみがもちゐるながき手の指のおのずからにて指のとげ抜く
いつつの指長く伸びたる自在にて食事の碗と箸をとりたり
ものの音うけとる耳のおのずから螺旋の肉の内部に通ふ
我が避け汝が避ける交りの幾人あるも人生にして

マネキンに帽子着せたる案山子など今朝の田に見え稔り初めたり
靴脱石昨日据えられ少しづつ整ひゆくを妻の亦見る
唯水を欲りて死せしと億万の富積上げて執念かりけり
釣上げて躍る魚を見んと立ち待ちゐるバスは過ぎてしまひぬ

庭前に植えたる若き杉の木の隈なき緑に光り差し来ぬ
大工等の笑へる声に距離を置く書斉に頭低く垂れおり
飽きたるはうまくあらずと言ひゐつつ夕宴合はす習性のごと
木を削る音いつ迄も絶へざるを本に塵ある警めとする

読まざりし本の並べる書斉にて人の槌打つ音ひびき来る
測量に来たる若き等門前の道に数字を書きて帰りぬ
先立ちて犬走りゆき戻り来る歩み出でたる原の晴れたり
論争を離れて柱に凭りゆきぬ我は己を唯問はむのみ

我をつつみ夜の雨あり耳澄みて初め知らざる音を聞きおり
如何になすと思ひし荷物も積み込みぬ車にながく働く人等
憎まれて入道雲あり涸れし田に水入ると人の寄り来て
キズリバテープ額に貼りぬ俯きて歩めるくせの嬌らざりせば

額を二度打ちて足場に置く板を見定めくぐり抜くべくなりぬ
暑き陽差し昨日に過ぎてみすずかる風に見上ぐる空の高しも
横たはる背の安らぎのうらうらと春陽差しおり昼飯の後
通り来し草荒る原は輝ける緑満ちたり振り向き見れば

知りゐるは我の従妹のことなりきそれより言葉紡ぎ合ひたり

ホースの先絞りて水の飛びゐるをとどく限りの水とならしむ
遠く飛ぶホースの水の散乱光幼寄り来て借せと言ひたり
拡がりて遠くへ飛べる撒水の夕べの光りを集めていたり
灌水に濡れもてゆく葉の陽を返し緑新たな園となりたり
ホースより飛びたる水は陽を映し朝の庭に降りこぼしおり
撒く水を空に向けおり七彩に分つ光のときおりありて
レントゲンに写れる白きところ差しここの変化を暫く見ると
我が意見言うてはならぬ今ここで言へば役目を押しつけられる
並びたる足動かぬは死にており足故むかではあはれの深し
窓枠の区切る空間首出でて何処に行くかと我に問ひたり
月光に落せる影の言葉あれ今日は汝を引摺り歩む
一椀の酒に充たさるこころともあはれあはれは寝具を被ぐ
秀の尖る杉の木並び神渡る粛々として鉾を立てたり
雨の水溜りて朝を澄みており映れる空に白雲通ふ
雲が出て影見ぬ庭となりて来ぬ分てるなきは安らかにして

川原の石の丸きを踏みて行く角磨りへりしながき時あり
史に見る明治の庶民は暗かりき死して声なき墓並び立つ
林幸雄人好かりしとあほがつき長谷川利春お人好しとど
何処かへ妻出でゆきて裏庭に降りたる鳥の声の聞こゆる
歩巾もて測りておりし二、三人顔見合せて頷き合ひぬ
照り来る光りに鳥の明らかに見えて鳴く声空を渡りぬ
青空の瞳とどかぬ方を恋ふかしこいのちの太初（はじめ）ありたり
退屈にあればしばらく顔を見て時間潰すか県知事来る
照り及ぶ光りに岩の蔭明るみ青き蛙のひそみていたり
昼食を了へし大工等それぞれに蔭を撰びて寝転びゆけり
笑ひ声聞えておりし大工等の昼食了へて蔭に寝たらし
怒りゐる声が怒りを生み来る最早おのれの何うにもならぬ
万両は青き実を着け夏時雨過ぎたる後に雫垂らせり
円かに万両結ぶ裏庭の円かなるはこれのみにして
裏山に赤き木ありきあかえばしと母等の言ひき箸としたりき

蜘蛛糸の細きを渡る光りあり吹きゐる風に七彩移る
夏未だ過ぎざる並木紅き葉のいくつ見えいて雨の少なし
扇風器かけて吹き来る風のあり歩み帰りし汗を拭ひぬ

小豆島行　十首

果しなく拡がる海に目のあそび山里深く我の住みおり
晴れ渡る海の展げる濃藍を眺めて飽きず山人我は
大きなる海は一つのたゆたひに岸壁打てる波の返せり
唄ひゐる車掌につづく一斉の合唱となりてバス走りゆく
幾重にもガードレールの見えかくれバスは左右に傾き登る
目は止めてうるしの紅にふり返り晴し山路をバス登りゆく
石垣を築きてなすびなど植ふるこの島ながく人の営む
巡礼の白衣に歩む人なども追ひ越しバスは坂道登る
しばらくの休憩ありて降りかかる桜紅葉に歩みあそばす
羊腸の道下りつつゆくりなし家見え来り海の展くる
枝多く剪られし柳は拳骨を上げし怒の様に並べり
刈株の影あらあらし壁白く建ちしマンションの左右につづく
とりどりの色に咲けるは菊らしき畑は道より階つき下る
行き詰る作歌は茂吉に還るべし頭抱へていのち追ひ詰む
谷渡り衰へゆける雷鳴に寺のいらかのしずもりのあり
灯を慕ふ虫を狙ひし雨蛙昼はガラスの隅に動かず
のっそりと蛙動けり灯を慕ふ虫のガラスに集ひ初めて
支柱もち同じ象に並木立つ俯き歩む人もゐる道
残りたる尿にズボンを濡らすこと時折あるも衰ふ肉ぞ
故知らず出来るほろせも炎熱の日々に弱りし体ならずや
諍ひは我もまじりて言ひゐたり尿に立ちて離れて聞きぬ
言葉が生む怒りにせきこむ声聞ゆ我もまじりておりし人等の
つまずきし所に亦もつまずきて昏れゆく庭に我が老ひふかし

噂

しばらくを顔見ぬ男死にたりと一人が言ひて噂おはりぬ
死にたりと一人が言ひて噂おはる唯それ程のいち人の生

簡単に忘らる生を人はもつ死にし噂を語る噂の

たはやすく人は忘れて生きてゆく死にし一人の男のことも

我が死してひとは幾日の言葉もつ死にし噂を離れて聞きつ

汝が文字汝が心の封筒の中なる紙を鋏に開く

幾世代ここに鉄打ち鼻黒き炭塵なども思ひ浮べつ

行きすぎるガラスの中にズボンずり腹太りたる我の歩めり

半分を残せし牛乳卓に置く量減りたるは数年のこと

忘らるることを怖れて口悪き汝にありき悼むものなし

見舞など必ず行くも口悪き君がもちゐし反面にして

吹き荒れし昨日の風に道清く木の葉は石の蔭にたまれり

咬み合ひて吠えゐる声を聞きゐしが交尾期の雄の犬戻りおり

殺虫剤なければ唯に見るのみを飴に重なり蟻の群がる

庭前に植えたる若き杉の秀の吹き来るに自在に撓ふ

重なれる屋根の間に足見えて左官は上体もぐり塗るらし

全山の霧らふ如くに花粉降り杉の秀天を凌ぎて並ぶ

わが影の不意に分れて後より追ひ越す車のライトありたり

わが影のいくつ分れて消えて出で車走れる夜の道渡る

中元と書かれし箱が置かれいて内見えざるは開きゆきたし

ひそひそと語れる声の病みあつく瞼閉して順を待ちおり

土渉りひまなく嘴を動かせる鳥は飛翔の血潮やしなふ

茂りぬ杉草刈られ季(とき)すぎし新芽のほそく萌し来りぬ

夕茜しりぞく所に甍見ゆ甍は黒くおごそかにして

キューイの実いくつか結ぶと思ひしに太り来りて犇きており

指赤くたちまち染めし寒の水大根の泥おとされゆきぬ

炎熱に疲れたるかな山の木々緑深まる営みもてば

八月の営み木々の終へるらし濃きみどりのやや黝みぬ

同化作用終えたる葉群肉厚く寄りてゆきたる蔭のしずけさ

庭の葉の動けるところ風通ふ障子一枚開きてありぬ

一匹が離れて蟻の這ひゐるは獲物さがすか範囲の広し

耄禄して死ぬを思へば今死なん今死にゆくは少し惜しきか

戸を出でて他者に対へる歩みもつ首すじ直ぐく保ちゆきたり
定まりし便に通へり宿便の嘆き聞きたる後の思ひに
窓に射す光りに朝の明けゆきていのち呼び合ふ雀鳴きおり
炎暑にてたゆき体は朝覚めて瞼閉せしままのしばらく

夕涼み　六首

夕闇が運びてほてりを冷す風牀机を出して腰を下ろせり
仰向けに夜の牀机に寝転びてひと日終りし腕を伸ばしぬ
仰向けに牀机に寝て星見ゆる星座覚へし若き日のあり
頬を吹く風に夕べの冷えのあり牀机に一人の瞼閉しぬ
寝転びて腕の屈伸なす三度腕の自在の力感ありて
一人ゐる自在のこころ暫しにて灯る部屋へと立ち上りたり
苔さびし墓石に来り言問ひぬ耐え生きるとは如何なることぞ
遠く来てバスを待ちおり共に待つ人を知らねば草の具さに
炎昼の屋根より降りて来し男頭に水を先ずぶっかけぬ
下駄の音鳴らして鋪装の坂登る夏暑ければ昼暑ければ
交す枝すくなき下に人踏める石磨かれて峯に向へり
半数は負ける做ひの組合せ表掲げられいて球児等見上ぐ
歓声と悲鳴を分つテレビ切り心弱りし吾に向へり
敗れたる球児の群の引上ぐる剃際清き少年の首
一口にコップの水を飲み干して屋根葺く男登りゆきたり
星のなき空眺めつつひとつらの唯茫々としたるを愛す
昼凪の騒ぎ止めたる庭の木々動かぬもののはるかなるかな
蜘蛛はその八つの足にて這ひ来る即ち本で打ち殺したり
炎昼の屋根に瓦を割れる音人いとなむは耳底ふかし
炎昼を柱の上に呼び合ひて工事なしおり働ける声
炎昼に葉を縒り合はせいし草は夜露受くべく開き初めたり
正確に機械の動く炎昼に弱き一人となりておりたり
にじみ出る汗拭き本を読みゐしが風吹く庭に歩み出でたり
風通ふ木蔭に敏く犬の寝て鋪道は昼の白く照りたり
道路より吹き来る風のほてりもち庭の木蔭に歩み出でたり

おおばこの下葉萎え枯れ芯葉のみわずかに青く日照りの続く

訪れしセールスマンは鞄置き汗拭き了へて名刺出したり

イラク・クエート制圧

砂を巻き戦車走れり出撃を命令したる一人の意志

武力にて制圧したるその後に理由作らる歴史の常に

戦勝にイラク国民は湧きゐると争ひは常に理非を超えたり

国益は正義を超ゆという論理イラクは傀儡政権作る

蹂らるる事実の前に湾岸の国は正義の言葉を殺す

アメリカの国民怒り日本の人等対岸の火事と眺むる

日本の石油事情は安泰と怒る声より大きく報ず

このところ水落ちどんこを取りたりきパイプ貫き水の走れり

幼年の魚取りの思ひ出　三首

深き泥めくれば鼻に付きたりき泥鰌を摑むてのひら熱く

水落つる音に早める足なりき網をかくして近寄りたりき

日射病憂ふる祖母の声離れ一途に目指す溝に歩みき

水の流れ追究したるC型溝魚見ぬ淀まぬ水を疎みつ

鋸に木を切る大工の軌るなき音が書斉伝へ及びぬ

いく度を熱き眼にふり仰ぎ越へねばならぬ山のありたり

昼を射す光りの白く地を灼き電線に止まる雀の見えず

肩車されたる我はこの鴨居に頭下げたりき壊されてゆく

室外に冷房の熱を放散しかくて我等の談笑のあり

歩みいる音に蛙の飛び出しぬ土に擬ひて土に生きたり

片づける本の間より肩たたき出で来て我の少し凝りおり

交尾期を繋がる犬は鳴きておりおのずからなる出でてくる声

すずめ蜂は山にひた飛ぶ炎昼の光り返して輝きながら

宇　宙（コスモス）　四首

長き廊下見てゐし孫は走りゆき走り戻りて笑顔向けたり

いく度も廊下を走り戻り来て幼の足は飽きるを知らず

走りゆき戻り来れば幼児の足が拓けるコスモスならん

幼児は駆けて戻りて笑ひたり廊下に拓くコスモスありて

亡き母が植えし木蓮かなしみも白きはなびら光るに見上ぐ
悔しむも生きる力ぞ夕闇の迫れる室に一人坐りて
熱帯夜いくにち続き読まざりし本に置く虫のむくろ払ひぬ
翅のみが動きてゐるに立止まり引きゆく小さき蟻のありたり
胃腑よりの返品ありしと笑ひつつ告げて昨夜の惨を語りぬ
風通ふ蔭に犬入り灼くる道歩み来りし喘ぎをもちぬ
古き板の潜めるものよ削られて艶もつ肌の現はれ来る
削られて内にひそみし新たなる艶もつ木肌の柱となりぬ
研がれたる鉋が削る木の肌の艶こまかきを我は見ており
和鋏がはこの底より錆びて出ず錆びの深さに亡き母ありて
悔しさも淡くなり来て過ぎし日々心しずけき肯ひをもつ
猛暑にて衰ふ老ひし目をもてば土の亀裂の闇深きかな
蹲るさまに瓦を並べゆく炎昼の光り白く射す屋根
大茶瓶三回替ふる冷水器屋根の瓦を六人にふく
二、三年見ざる蚤のとび来りむかし乍らの青くとぼしぬ
いく度も蚤と言ひし幼孫の目覚めを待たず籠に死におり
開け放ち人に見らるる寝姿もこの炎昼のお互にして

戦争回顧　八首

死するべき祖国もちたる青春の沸つ血潮に出でてゆきたり
食ふ着るの煩ひなくて兵の日々死を距てたる笑ひ明るく
戦は勝たねばならぬならはしの生きゐる日々を不思議となしぬ
死ぬことを当然とするにちにちの西田幾多郎読みつぎたりき
空腹の日々重なりて稀々のぜんざい椀の底迄なめたり
血に染みし戦友焼くも狎れ来ては立てる歩哨の半ば眠りつ
足を唯前に出すことのみ思ひ夏山越えて戦ひたりき
足むくみ歩む行軍旬日に友は手りう弾爆でらし死にき
ほてる夜の眠られざれば歌作る時間暫く与へられゐき
貸すという傘断りて細く降る五月の雨を頬にあそばす
茎ほそく花の大きな一鉢のありて作らるものの淋しさ
店頭に秋の果物並べ了へ店主八月の汗を拭へり

差上げてやりし幼は手を出しぬ六たび七度わが疲るるとも
上れとふ声と縁側開けられて机の前にどかかと坐る
赤き花紫の花朝顔の代え得ぬものの凛と咲きたり

本棚　六首

本箱に並べる背文字この内の読み了へたるはいくばくなりや
沸つ血に何れの本も買ひたりき読まざるものの大方にして
裡に虹輝き掲げし少年期背金の本を買ひて来りぬ
並びたる本を見渡し目を閉ぬ読むには最早歳月足らぬ
幾冊か本を取り出ししまひつつ七十過ぎるは衰へており
昨日読みしところを最早忘るるを駑馬に鞭打ち読みつぎゆかな

青春回顧　八首

枕元に新靴置ける夜の明けて青年団に入団なしき
十燭光点せる宮の庭に置く石差上げて夜を遊びぬ
自転車に四時間走り封切りの映画見了へてうどんを食べし
西田とふ文字にも心おののきて哲学を生きの証と誓ひき
京都にて西田幾多郎一目見て帰りにパンクの自転車押しぬ
家業棄て僧堂に入る参禅に何も得ざりきもどかしかりき
日の落ちて迫れる闇にいつ迄も立ちていたりき動き得ざりき
天涯の遠くへ瞳移しゆき澄みたるものを恋ひてゐたりき
薪せぬ山となりたる幾年か歩む小径の草木に絶へぬ
若き日の記憶辿りて行く山路下蔭暗く草木茂りぬ
道しるべ崩れて苔の生えゐるを読み難なるは瞳凝らしぬ
小さなる目刺の欲しも酒を呑む舌の記憶の老ひにあたらし
飲む酒のこの頃減りしと居酒屋の疾くより我が知りていしこと
読む度に数の違へる南瓜の今日は右より廻る順にて
読み了へし本を閉して目を閉じぬ我との乖離匡し見るべく
三時間かかりてもろこを煮詰めしと今宵飲む酒一杯多し
蛇、兎太らしめゆく夏山の葉群はふかき蔭をもちたり
この山路こく葉担ひて降りたりきあの石この石草にかくれぬ
舞ひおりし鳶の影見ず暮れてゆく夕べの山は蒼く重なる

葉を縒りて針の如くに草の立ち靴底伝ふ道の灼けたり

打ち合へる鞭なす梢山風は唸りをあげて谷駆け下る

歌集

一人の室

はしがき

昨年「犬と」を出してから当分歌を作らないつもりであった。みかしほ旅行の翌日、半日かかって八十首を作り、みかしほ出詠の在庫を積んで暫く休んだ。時折りバス停なんかで作ることがあったが、月に十首か二十首であり、言えば零に近かった。ところが七月中旬以降の暑さに亦も思考渋滞が起きた。遅々として進まない文章に今度は文章の方を休むことにした。すると勢い短歌の方に向わざるを得ない。

盆休みに算えてみると六百首足らずがあった。内、歌の体裁だけ整ったのを四百数十首創造社さんのお世話になることにした。印刷屋さんに頼むとすると何百冊か作らなければならない。御笑覧賜らば幸甚である。

平成三年残暑のころ

長谷川　利　春

明るみし室に目を上げ窓に干す白きシーツに陽の照り及ぶ
瓶の花しずかに立つはガラス戸の向ふの草木揉まれゐる故
育ちゆく実の重たさに柿の木の枝は撓みの増して来りぬ
二人居て釘打つ大工時折りに槌の合ひたる音の聞ゆる
皮たるむ手にさげもちて明日生きむ納豆買ひて帰りゐるかな
孵るべきいのちひそませし鶏卵の沸てる水の中にて動く
夏の葉のなす蔭ふかきガラス戸に眼のにごり映してゐたり
孫の目をかくし外してばあと言ひ一人の部屋に戻り来りぬ
握られて体温通ひしてのひらの肯かされし思ひに別る
いつ死ぬもよしと言ひつつこの言葉口に出でたる淋しさにおり
野を吹けるさやなる風に拭はむと一人の室を出でて来りぬ
地を灼く日射しを這ひて白きもの担げる蟻の列をなしたり
炎熱の立ち昇りくる道の上担げる蟻の行き交しおり
昼すぎし庭に蝶々の止まりゐて黄に澄みとふる空気しずもる
大きなる蝶々が時に舞ひ下りて深き葉蔭を老樹のつくる
拡げたる老樹の葉蔭に風生れ背を凭らせてベンチに掛けぬ
ちっち蟬木立の中に鳴き競ひ幼なに還る瞳上げたり
吹く風は瞳のほてり拭ひゆきつゆけき青に朝顔咲きぬ
朝顔の青が生みゐる風のあり我の一日のはじまりとして
雨止みしくぼみに水の溜りゐて下りくる青き空のありたり
憂ひ合ひ語りおりしも共にもつ病に笑ひの混り来りぬ
語りゐし人の受診に立ち去りて壁に頭を凭らせゆきぬ
音の立つ炭酸せんべい噛みくだく本を閉せし一人の室に
街の中歩み来りし埃などハンカチ黄色く染まりて拭ふ
雨宿りなしたる高きくすのきの荒き雫を落しはじめぬ
降る雨に障子閉せり時として音の変れば開けて眺めつ
トルソーは太刀とり闘ふ厚さにてガラスの中に閉されており
束の間に花火は開き消えゆきぬはるかな山の上に見えたり
尊大に時に卑小となる我が人と別れし時にありたり
雨音に囲まる室に我のあり限りもあらず小さくなりて

会ひたきといふにあらねど半日をこもりし室を出でてゆきたり

このところまが玉出でしと伝へ来てとふく滅びし女美し

洋服を当てて鏡に写し見るよろこびを言ふ俺はごめんだ

欲望と卑む勿れ洋品店めぐる女の瞳かがやく

欲望のあふるる女と思へども溢るる欲故女美し

降り初めし夕べの鋪道はしろしろと残る光をあつめて濡るる

屋根に落つる雨降る音を聞きゐしがあたりを囲む音となり来ぬ

ここ迄は読むと決めしを読みおへて夜の底ひに立ち上りたり

蛇の背に夏の陽光りたじろがぬもののゆるゆる草径渡る

夏の陽を返して蜂の背の光り一すじ直ぐく山に飛びたり

飛び立ちし蜂の背中の金と黒夏の日差しは輝きて照る

べったりと背にはりつける汗のシャツ残生短し書かねばならぬ

入道雲山際に据り夏陽照る飛びゐし雀も見えずなりたり

夜更しバーに車の来て止まりライターの火に髪を光らす

夕闇の中帰り来てわが室にもの明らかな灯りをともす

刀身はガラスの中に光りおり腰に帯びたる人等死にたり

いずこより来るむくみかくぼませし肉は灯りの蔭を宿しぬ

棚参りなしくるる僧の上り処に蟻おりたれば薬剤撒きぬ

殺虫剤撒き了へ戻り来し室にいのちかなしむ歌作りゆく

墓参　六首

生きの日の哀歓なべて一行の戒名となりて墓誌に並べり

墓の石洗ひておれば憶ひ出の死にたる人の眼のくらし

生れたる時より死への旅の我墓石にたっぷり水をそそぎぬ

五代の名並べる墓誌に水そそぐ濡れて濃くなる石は見さけつ

老ひ来ては墓石の体温おぼゆ迄ちかしき祖先となりて来りぬ

墓石にひそまる祖先の血と汗とされど刺されし蚊のあと痒し

夕川は涙の如く光りおりきはまるものに行くと歩みぬ

山上に白く塗りたる鉄塔の立ちゐてはるかなものは輝く

台風の報じられ来て三日経ぬ情報とふに思ひ疲れぬ

閉せるにカーテン大きく揺れており台風上陸をテレビの報ず

守りゐる一つのいのちと思ほへど止まりたる蚊はすなはち殺す
郵便受開く心の騒ぎもつ失望なさん程にはあらず

神呪寺歌会　　七首

石階の左右に茂る幹太き楠ありて寺のしずけし
空覆ふ葉群の落とす影ふかく通へる風はそこより冷ゆる
石段を登りて高き門のあり蔭に腰掛く床机を置きぬ
見はるかす青田ゆ来る風ありて床机に掛けし額を冷やす
腰掛けてゐる間に来る三、五人既に笑まひを含む顔もつ
手を挙げて歌友に床机の席を空け通へる風のすゞしさ分つ
ハンカチに汗をおさへて腰下す女等直に歌を語りぬ
ぽりぽりと炭酸せんべい音立ちて昨日作りし歌も忘れぬ
喋りすぎし後の重さに口塞ぐ饅頭一つとりにけるかも
目に追ひしとんぼの去りて宙に置く瞳のままに立ちておりたり
干物を入れる声止み雨の降る一つの音となりにけるかも
瀬に立つる音継ぎゐるつつかへらざる水の流れに頭垂れたり
孫の後追ひかけゆきて立止まりふり返りたる笑顔に出合ふ
しずかなる呼吸を夜の底にもつ呼吸がもてる夜の底ひは
煤の染む大きな梁のどうと落ち五代住ひし家こはしゆく
白鷺は細く真白く立ちゐたり天女はえまひこぼしていたり
寝て後涙を流す女いて朝をさやけき顔に戻すと
家の者を円く集はせ手花火は笑へる顔をしばし展きぬ
手花火がしばし展ける闇の中少女は直ぐく伸びし脚もつ
小さなる溝を境に村距て農に生くるは水に生きにし
覆ひ来る夕闇の中葬らる一日の無為に立ちておりたり
松喰に枯れたる松の間より若松生えて枯れずに育つ
幼な顔目もとに残り子を抱く確かな歩みに寄りて来りぬ
十年と残るいのちを定めいて五冊の著書を我はもつべし
葉の蔭に充ちゆく柿の青き実のひそかなものにかさねてゆきぬ
玉葱を購ひ来れと妻の言ふ青空見るべく下駄を履きたり
ごみ捨てる日の早来り足裏の下駄の応への確に歩む

算盤の珠を置きゐるまなざしの離れぬものを我は見てゐつ

ごきぶりがたゝき潰され死にており嫌はるるべく生れて来しは

軽々に口に出でたる約束の破れぬものに黙しゆきたり

ごきぶりかとひとみ定めて幻覚なりき日半ごきぶり退治をなしぬ

黒き服着けたる時に吠ゆる犬如何なる記憶もちたりしかな

何ごとに吠えゐる犬を聞きゐるしがやがて音なき夜の闇となる

知る人の同じ病をもちおりて憂へる故の笑ひ出でたり

夕闇は一つ一つを消し来り追ひつめられて我の立ちたり

鯉の子は鯉に大方食はれしと池の底ひの藻草しずもる

動きゐるし畑の人影既になく夏の陽差に土白く照る

放ちたる犬ましぐらに走りゆき泥をまとひて帰り来りぬ

まとまらぬ思考をもてばすきとふる水の流れに歩み止めたり

空洞となりて立ちゐる老ひし木の生きてゆくべき葉を繁らせる

もの書かん残るいのちと商ひを止めてゆ早も二年経ちぬ

卓上に挿されし赤き花一つ夜の灯りに凛と立ちたり

憎みたる泡立草も年を経て花つけぬものあれば止まりぬ

腐れたる底ひの泥のおのずから街裏の水あぶく吐きおり

予定せし人の揃ひて乗り来る人の揃ふは心豊かに

黒き雲動くは風と雨はらみ庭の葉いくつ散りはじめたり

合板の断面見えて縦と横違ふ木目を重ねてありぬ

時おきて庭の葉群を揉みしだき近づく台風テレビの報ず

横になれば体の安しともすれば寝んとはする体を叱る

家じゅうで蠅一匹を追ひ廻ししみじみ平和な世の中となる

あほ向けに寝ねたる犬は地に擦りて背中を掻かむ転びはじめぬ

時計のバンド一つゆるめて昨日よりむくみし体を書斉に運ぶ

背の汗疣痒くて思考断たれたり柱の角に寄りて擦りぬ

ひと足を確につけて雨蛙垂直のガラス登りゆきおり

兵粮のつきれば敗ると解りしをねずみ迄食ひ腹切り降る

主義よその純なるものを求むれば内ゲバに死すと亦報じたり

二匹ゐる鳶は互の旋回の輪を少しずつちぢめて舞ひぬ

水蓮の花咲き出ずるやさしさに水とふものを我は見ており
たゆたへる水にゆらめき水蓮の置きゐる露の光りの紅し
美しく死ぬが課題のにちにちのかすむ眼をとうくに置きぬ
花園の花一せいに立上り夕べの茜渡りけるかも
義捐にとハンカチ売りに来し少女その執拗の背後を憎む
炎熱の従軍行をもつ我ともたざる吾子の冷房分つ
更けてゆく夜の灯りの明らかに照して頭すぐく立てたり
潰したる毛虫の青き体液がつく下駄裏に歩みゐるかな
拡げたる羽根のままにて飛ぶ鳶の獲物を狙ふ目をもつさびしさ
手を挙げて我に向きゐる少女ゐてさやけき老ひの歩みもつかな
雷鳴の止みし気配に窓開けて雲のあはひの真澄のふかし
不犯なりしくやしさなども仏僧の墓並びゐる中を通りつ
木の蔭に足投げ犬の眠りおり眠れるものは時のあらなく
遠雷の電光ひらめき夜の木々束の間象をもちて消えゆく
扉の錠を落して風呂に入るとふふくらむ少女の肉(しし)やこころや
紙のはなつ臭ひなるかと障子開け暑気のこもる書斉に入りぬ
夜の灯に照され一人坐りおり書を開く手に老斑うきて
犬吠ゆる声にガラスの闇を見ぬ夜の底ひはひたすらくらし

胃カメラ　七首

ますい薬含みし暫し異質なる触りの鈍き舌となり来ぬ
覚悟せしえずきなれども二度三度胃腑せり上る抵抗つづく
つねにつねに思ひは悪しき方に向き胃カメラ胃腑の中に動けり
胃カメラは何を写しているならん知らざる己が内の暗きは
幾度も胃腑の内部をめぐらさるカメラ見つむる技師のきびしく
胃カメラの写せる内部荒れいると今宵酒呑み明日は休まん
しばらくは酒を断たんと思ひしが長く生きてもと思ひなほしぬ
いくつかのいのち地上ゆ消えゆくと採りゐし種子を塵と燃しつ
白き腿つやをふふみて少女等は夏の鋪道に靴音鳴らす
至り得ぬ空を頭上にもちたれば人生きてゆくかなしみふかし
浴槽に肩迄沈めて目を閉ぢぬ葉ずれの音を運ぶ風あり

細き雨降りかかり来る頬の冷え己れ確むるしずけさに立つ
寄す波は立ちて砕けて沫きゆきいずこか一人の戦士死にたり
ひたすらに寄せて砕けて立つ沫わが失ひしものを見ており
ガラス戸を距ててゆるる木のありて距てし故のしずけさにおり
夕闇に山消えゆきて星出づる大きな動きに立ちておりたり
炎熱に人の影なき昼下りくれなひ放ち水蓮咲きぬ
とりどりの日傘と服に女行き菖蒲は花の色を競へり
人の無きところ安しと思ひしが木蔭を出でて街に向ひぬ
ふきの皮むきてかほりを放つときたらちねの母は死してあらざり
ガラス戸に映りて病みゐる人の見え病みゐる人は力をもたず
残れるは持ちて帰れと包めるを食ふだけ食ひと言ひて出で来ぬ
雲抜きて見ゆるは高し播磨富士ふかき緑にあらはれきたる
ガラス戸を打ちて明りを慕ふ蠅ひたすらなるを我は見てゐつ
病院の待合室に少女読む本の題名しきりに見たし
腿白く歩める少女今日多く今年の暑き陽差しはじまる
人波に揉まるる我の小ささよこもりを倦みて出でて来りぬ
上衣つけネクタイ締めて汗を拭く夏の哀れを紳士といへり
あほ向けにベンチの上に寝転びて今更青く広き空なり
冷房の室に務むる悩みなど語りて女文明に生く
書凪の野辺の光りのすみとうり立つ白鷺はすらりと細し
明けてゆく朝を雀の鳴ける声飛びて交せる声の聞ゆる
検査故何も食へざる朝にして卓に家族とふ他者並びおり
憂悶を運べる声にあらざるか鳴れる電話に歩み寄りつゝ
意識して小さき溝をまたげたりしみじみとして力衰ふ
四肢伸ばし寝ねいる犬を羨めばわが着るシャツの汗に濡れたり
空を飛ぶ人間衛星に屈まりて帰るを得ざる思ひもあらむ
崩れたる塀の日差しに灼けゐるを老ひしひたひの汗拭き過ぐる
湯上りの汗を拭ひて一日のほてる体を床に投げ込む
いら虫は葉を食ひつくし地に落ちて全て死がいとなりて散ばる
構想のならぬおもひはペン置きて傍のせんべい一つとりたり

呼び交す声は建物組まれゆくきびきびとして渡るその声

腸を病み腹鳴りており生きの身の証しは吾に痛みと来る

風切れば少年の日の還りくる自転車に坂を下りゆきつつ

排泄と食ふのみの人を見舞ひおり血潮は同じく廻りゐるとど

みずうみに如何なるいのち生れけん月より雫落ちて止まざる

山深く囲まる池の水にして月と光りを交すを見たり

われはわわれが見えざるかなや歩みゆく下駄に置たる足の裏をも

おのずから沈みゆく日と葉を合せねむはやさしき闇の思惟生む

おつる日に葉を合せゆくねむの木の合せるものに心寄りたり

ねむの葉に夕闇やさし眠り得ぬ眼をもちて立ちていたれば

葉を合すねむと眠れぬ目に立てる我とを闇は覆ひ了へたり

蝶となる身を羨めば飜転の自在の風の過ぎてゆきたり

朝開き夕べしぼみし朝顔のつゆけき青を寝ておもへり

一日を咲きたるのみの朝顔のふかく露けき青にてありき

物干竿流して売れる声の去り再び風鈴鳴る庭となる

夜の目の如くに水の光りおり即ちわれの立ち止まりたり

のたうつは何にありしか殺虫剤かけたる蜂の死にゆきしのち

肥りしに非ずむくみの進むなり風呂を上りて体重はかる

動く鮎を歯にかみいつつ美味なりと給ひし人に言はねばならぬ

一匹は無理に食べたる生鮎の口に動きし惨を尚もつ

物干竿売りゐる声が聞えくる間のびし声が青田わたりて

すりむきて滲める血潮かく赤きものを廻らす体を畏る

紅く塗る唇開く口腔の闇ありおちて行かん暗さに

一週間つづきて降りし雨なりきつゆけきクロバーしだきて歩む

街角を曲りて新たな視界あり期待は多く裏切られいつ

竹喬が画布に求めし木のみどり掲げてしずかな呼吸をなしぬ

賞められて喜ぶ女の声聞ゆ神の言葉の唯あるべきぞ

草原に池の表の光り満ちくるべく我は歩み来りぬ

朝々を歩める地の親しさに畦あり今朝はすみれ咲きゐる

ガラス戸にぶつかる蠅の立つ音が唯一生きてゐる音にして

生きている限りを太る老木の空に今年の葉群を拡ぐ
婦人服見ているしばし我も亦女の眼に移りゆくらし
居眠りし男よだれを垂らし初むしばらくゆるびし肉のままあれ
欲望は斯くきらめきて店頭にマネキン人形装はれており
装ほはれ飾らるるべくマネキンの裸の人形担がれゆけり
店頭に品物溢れ欲望を呼ばむ明るき電灯とぼす
頭上げ背すじ伸ばして街の道せめての歩み我はもちおり
休けいとなりし土工は平らなる所をえらび寝転びゆけり
花が咲きて出でくる記憶れんげ田に相撲を取りて追ひかけられき
種子蒔きし土の平らに角力取り灸据えられし跡を背にもつ
磁石に寄る鉄さながらに我は行く枝差し交す森のふかきに
雲しのぎそびえたる樹よ残りたるいのち少なきひとみに見上ぐ

コップ酒の立飲み　八首

店頭に自転車いくつ置かれいて仕事帰りを酒屋に寄りぬ
空コップ持ちたる人の犇めきつ注がるる順を黙し待ちおり
店内のせまきに腕のふれ合ひつ入り来る人に場所を空けおり
あほむきてコップの酒を一息に呑みおりひと日の仕事に渇く
ひと息に酒を飲みゐる幾人を夕べの酒屋の灯りが照らす
コップ酒あふりて赤くなりし顔酔ひが呼び笑ふ声あり
一杯を飲みて笑ひのおのずからざわめく店の内となりゆく
コップ酒飲みゐる中に手を上ぐる一人がありて応ふ手を上ぐ

六地蔵　四首

石を刻み六地蔵として祀りたり拝まむものを欲し来たれば
花に菓子堆く飾られ盆来る死なねばならぬ人の願ひは
死後のくらしありとなしたる古のうつし世余りにくらかりしかな
極楽を願ふならねど花と菓子供へて香をくゆらし置きぬ
墓を出て霊さまよふといにしえの人等言ひたり言へば見えたり
皮はがれ崩れて朽ちて木の倒る斯る死に態我にはあらぬ
空際に瞳を置けば溶解のなりし我が死のすきとふりたり
一椀の飯に足りゐるこの頃や呼吸しずかなときを愛せり

病院の床を拭へる女等のかくて過ぎゆく一生なるべし
床を拭き得るなにがしの金に買ふ哀歓あらむ老ひし女の
ワイシャツがはみ出てゐると告げくるる即ちズボンの中に押込む

祖母ありし頃　七首

夕さればよへいもどってねんころせと鳴く鳥おりき祖母ありし頃
古米(こう)は炊きたる量の多き故価の高く売買されぬ
古米を貸して新米返さる損を語りて貧しく生きき
山彦は重なる山の奥にゐて人を捕ふと応へを返す
坊(ぼん)来いと奥山の池の霊は呼ぶ蒼く底見ぬ水の底より
月の夜を胸迄池に浸りゐて助け呼びより狐ゐる野に
山の神に出合ひて帰り高熱に呻され寝ておりしが死にぬ
レールに耳つけ来るを聞きたりき取り除かれて草の茂れる
泥の中に泥鰌摑みし掌の記憶も埋めショベル唸りぬ
くちばしに飯をつけたる大鴉塵捨つ我にわずかに飛びぬ
大鴉飛びたる後にビニール袋破れて食物乱れ散りおり
わが力に断ち得ぬテープ小鳥等は啄みもちて次々と去る
山あひの畦は田よりも大きくて人等ひもじく生きてきたりぬ
風脈のそこに通ふか風鈴の音鳴り出でて木々の動かず
ハンカチに拭へるもありしゅくしゅくと目の前過ぐる他者の葬列
外燈の下過ぎし故前よりも暗くなりたる道を行くかな
見立てなどパジャマのことを賞めくるる子のお下りの言葉を抑ふ
ほくろもつ竹籠売りが今年も来ぬ自転車いたく古くなりたり
ほくろある顔のしたしく竹籠売り声衰へず今年も来たる
灯を映す眼きらめきガラス戸に寄り来し虫のひしとすがれり
読みさしの本幾冊を開きたるままに置きたる室にもどりぬ
我のことを我より多く人知れり知るに任せて山青きかな
雨に濡るる杉の秀先の浅みどり見なれし杉故今朝のあたらし
病院の壁に臓腑図かけられて我が心臓はかしこがむくむ
道しるべ野中に立ちて草茂るここにひびきし人の声はも
垂直に伸び来る夏の陽の腕を摑み返して野の道行かな

こころざし述ぶる詩なりと女女しかる言葉に遊ぶ我の歌はも

詩は志なり歌は嘆きの異なりを女々しき我の歌におもひつ

水と水打ち合ふところ沫立ち虹美しく生れておりぬ

空高く手を差上げぬ老斑のうきて少なき残る年月

風鈴の鳴りたる音に障子開け動く空気を胸に満しぬ

ひと雫亦一しずく地深く通ひて苔より落つる水あり

外国に行かざりしことも淡々し我が口中の飴甘きかな

我の顔見て潜りたる鳰やがて浮き出て近くにおよぎ来りぬ

かまびすしく今宵蛙の鳴き出でて田の代掻の一斉に了ゆ

したたれる水のつづきて山添ひの溝はここより初まるらしき

バスを待つ時の間青き空ありて一人立ちゐる瞳の高し

鼻欠けて野仏ありぬ雑草の伸びて半ばを埋めゐる中

罰当てぬ仏の故に草埋む鼻の欠けゐることの親しく

さんさんと原に亘れる陽の光りひと日の青を草の遂げゆく

すみとふる山際の空指さして孫と瞳を一つに届かす

指さして孫と見送る鳥の消え森の梢に空の澄みたり

白き目に煮られし魚を箸に割き己れの腹を満しおへたり

庭の葉を打つ雨音を聞きゐしが頭垂れたる吾となりゐぬ

マイクもちて思はぬ高き声ひびき我にあらざるものにやすらふ

密々と重なり夏の草のあり競り合ふところみどりの深し

道しるべ古りて野中に立ちており今日とふことを言に問ひたり

作れ神話一代過ぎたる証しなく風ひようひようと夜を鳴るかな

母ちゃんと言ひたる孫は手を放し一目散に走りゆきたり

冬となる庭はまばらに苔消えて踏むにやさしき石とし見さく

雨が止み庭に戻りし陽の光りぬくときものに歩み出でたり

まとまらぬ思考に瞼閉しゐていつしか雨の音を聞きおり

身のふるふ若き羞恥の痕残り道を行きつつ声を挙げたり

木の屑の如きに触るれば飛び立ちて室の柱にも夏の来りぬ

一ところ石が当りて全面に亀裂はしれるガラスとなりぬ

熟れし実が柿の梢に残りゐて冬の夕べの茜かがやく

草焼きし池の堤のひろびろと風なき水の平らを囲む

畦の花幼なの髪にさしやりて女といふも作られてゆく

剪栽のおはりし庭に風通ひ遠く晴れたる空拡がりぬ

重き荷物積みたる車の通り過ぎ窓のガラスのしばらく震ふ

四、五日を春雨つゞき庭苔の新たなみどりに人近ずきぬ

橋脚にせかれし水は盛り上り曲りて渦を巻きて流るる

手をやきし一週間の孫なりき車見ぬ迄見送りて立つ

庭に塗るコンクリートは幾すじか時を経て来し亀裂はしりぬ

水の研ぐ岩なめらかに干上りて亘る日射しに腰を掛けたり

頼まれしリンゴ忘れて味悪き今朝のジュースを残さず飲みぬ

如何ならん言葉の医師より出でくると聴診器胸に当られており

わが体知らぬ我にて聴診器再び当てる医師を見ており

ひたすらに己れに関る瞼閉ぢ病もちゐる診断を待つ

饒舌となりゐる一人病など怖れもたざる言葉吐きつぐ

腰かける者等互に病みゐるを関りあらぬ瞼閉ぢおり

受診者の順読み上げるナース去り待合室の沈黙ふかし

コンクリートの裂目に細き草生えて乾ける土に雨降り初めぬ

夕闇が点す星光はるかなる太初（はじめ）に移る瞳ありたり

声低く語るは悩みながからん老婆二人が診断を待つ

鉄砲虫つきしいちじく垂らしゆく樹液に萎ゆる実となりきたる

ひとところ漣立ちて移りゆき小魚遊ぶ原晴れわたる

雲動く間に青き空見えて瞳届かぬものを恋ひたり

引かなんと言ひゐし草は庭隅に黄色く小さき花をつけたり

鳴く蟬の去りたる下に腰下し枝打つ男昼飯開く

痛みなきむくみを持つはわが体ふかきところの病みてゐるらし

いつ迄も孫の降りざる肩車おじいちゃんは疲れて歩む

降りゐるとあらざる雨に庭に置く石の表は濡れてゆきたり

自動車など持てる思ひのなかりしを家族各々並べて拭ふ

しろがねに光るさじもち乳をかけ苺を今の幼は食ぶる

樫の木の幹にかくるる色となり雨蛙は昼の庭にひそめり

食ふことが全てに優先なしたりしいのちの哀れも長く経て来ぬ
蜘蛛の巣に捲かれて死せる蝶のありたまたまそこを飛びたるが故
しろがねの置く露しげきアスパラとなりて時雨のとうり過ぎたり
雲低くこめて来りて濃く黒き電線空にめぐらしありぬ
幼なわが遊び呆けしこの山の石は落葉にかくれてありぬ
しろがねの光り危く芋の葉に置きゐる露に風吹き初むる
芋の葉にまろびておりしろがねの露散り落ちて再び歩む
手狎れたる音の確に釘を打つ大工は正しき間を置きぬ
せせらげる音は落葉ゆ出で来り苔青々と濡らしけるかも
餌をもてばつながる鎖のある所に犬は尾を振りつきてきたりぬ
新しく建ちゐる家に音こもり大工は一人板に釘打つ
積む砂に水の流れし襞見えて照る陽に暗き影を宿しぬ
返しては砂に伸びくる波の秀のその単純を平和と言はむ
艶を増し太れる瓜の実を眺め本を読むべき歩み返しぬ
ばらの花蝕まれいて一つ咲く残るいのちは斯くの如きか
休業と貼りしガラスに雨紋乾き錆ひろがれる扉を閉す
すいかめを母は手折りてくれたりき帰ろとごねし口にしがみき
唄ひ了へスカートを少し上ぐる女忘るる早きファンの囲む
各々は異なる声をもちており重なり合ひて打碁を評す
つながれし犬は地に伏し鈍き目を近寄る足の音に開きぬ
細き茎に大きな花を咲かせおり原より帰り来し花園は

湯宿　五首

誰も知らぬ料理が出でて口々に異なる名をばあげつらひゆく
思ひ出の話のつきず見さけたる山はいつしか闇に沈みぬ
銚子振り後一本を頼みてはつきぬ話に夜ふけてゆく
山すその湯宿の窓に朝明けて天より蝶がくだり来りぬ
動くもの湯煙りのみに山峡の出湯の町は明けてきたりぬ
真澄みたる泉の底ひ砂動き深き地より水出できたる

大和国原　七首

かすかなる森は古代の跡あらん大和国原霧に浮べり

格子ある家の残るはまれまれに大和国原時の移れり
熱き血潮ここに横笛しずめると老女の口調高まりきつゝ
差し交す葉群が作る深き蔭秋篠寺の参道冷ゆる
半眼を開きし思惟のしずけさに千年前の仏頭ありぬ
直ぐく立つ頭は眼やや俯して古代のこころしずかなるかな
盛装の坊主がせかせか走り過ぎ七百回忌人の混み合ふ
のっそりと土をもたげしつくぼうしその円錘の単純にして
轟きて車過ぎゆきガラス戸に地の震ひのしばらくつづく
隣人が金を得る故反対する原発阻止の旗の立ちたり
噴き上り盛り上る水を見てゐしが老いし瞳は地にやすらふ

みかしほ旅行

串だんご頬張る乙女も行き交しサービスエリア人の溢るる
彩多き服をペアにて着る男女車を降りて腕を組みたり
売店の前にひしめき女等はものを撰べるひとみのはやし
見るだけと言ひゐし女草の葉に強飯巻くをいくつか取りぬ
階段に織なす男女旅に出しものの歩みの軽やかにして
びっしりと並べる大型トラックの間すり抜け乗るバスさがす
一つひとつ異なる石の密々と城壁高く築かれありぬ
見上ぐるはこの石担ぎし幾万の人の力ぞ城壁高し
戦ふと備へし壕と石垣に添ひて我等の平和の歩み
いにしえに思ひめぐらす太き幹連なる果に城そびえ立つ
威圧する土の厚さに高く建つ塀あり大きく木立を囲む
家低きめぐり区切りて壁厚き塀を作りし人のこころは
誅求を恨む眼を距てたる塀とおもへり厚く高きは
くにたみの餓死せる日々も食ひ飽きてゐたるか高き塀囲む内
山川を望み見下す天守閣急こうばいの階段をもつ
越路へと続く山並み窓に見え幕府はここを押へとなせし
矢を放つ小さき窓を並び明け部屋内暗く天守閣建つ
コップ酒あふれるときに天守閣青空抜きてそびえ立ちたり
自転車を漕ぎて滝野に採りしとふ黒茸料理に先ずは箸出す

しばはりの二はい酢に打つ舌づつみ酔は頬へと昇り来たらし

土温む小春日和に弾みくる会話となりて昼食おはる

重文と記す大和絵立止まる時間あらざるに惜しさに過ぐ

しろしろと小春日和の陽を返す花の咲きゐて二期桜といふ

はなびらの細く小さく淡き白まみに収めて歩みを返す

松茸を幾箱並べひさぎゐる店あり値段読みて過ぎゆく

はるかなる谷へと紅葉のつづけるはしばらく歩み止めて眺むる

声を挙げ指さす方に目をやりて一際赤く染まる葉のあり

小春日に透きし紅葉は吹き来るかすかな風に光りを移す

お入(はい)りの方は鐘打ち下さいと小さき銅の鐘を吊せり

剪栽の届きし庭の木々ありて緋の毛せんにひだを揃へぬ

茶を捧げもちくる歩みにおのずからしずかな室の一人となりぬ

入り来り去りゆく人等ちり一つ落ちぬたたみに歩みをはこぶ

道のへりえらびておりぬ知る人と出会はむことも今日は怯みて

アスファルト溶けいて黒く光りおり炎熱は靴の裏よりも来る

届かざるところの痒きが多くなりここ両日に汗疣のふえぬ

うろうろと孫の手探し両日の汗に汗疣の多くなり来ぬ

ひらめきて電光窓を走り過ぎ来らん音に耳を塞ぎぬ

吹く風が葉群分ちて柿の実の尻つぶらかに太り来りぬ

胸に服当てたる女身をよぢり亦向きなほり鏡に見入る

いちじくはうすき紫帯びて来ぬ去年は多く蜂に食はれし

退屈故内職せると若き等の遊びに行きしに老ひたる友は

しばし止み亦揉みしだき颱風の次第に速さ増して来りぬ

扉開き押さるるままに出でてゆく他者にはあらぬ我にはあらぬ

落ちてゐる野球バットに止まりぬ削り作りし幼な日のあり

コンクリートの返す夏陽の白き照り戸を出て暫し止まりゐたり

土蛙の咥へしみみずを青蛙とびつき奪ひ呑み込み了へぬ

おのずから軒のくらきに向ひゐて光りを避くる疲る目をもつ

大きなる木が蔭おとす公園のしずかなものに今日も来りぬ

横ふる体の安し蔭ふかきベンチに瞼閉ぢてゆきたり

フェンスの緑の色ゆすかし見え草生えており乾きたる野の

寄せ合ひし頭動かぬ四、五人が事務とる隣の部屋に見えおり

繁る葉に風吹き来り青と黒の縞なす蝶が下りて来りぬ

蝶が過ぎ蟬が飛び過ぎ公園の大きなる木の蔭にいこへり

失ひし過去とふ小説読みたりき新装なれる我家を見上ぐ

脱衣場に新しき鏡おかれいていくばくも無き髪を写しぬ

吹く風が勝敗決めぬ引揚ぐる負けし球児に流る涙は

短かくて太しき指にペン握る我より出るを得ざりし我の

老斑の浮く手に残るいくばくの血潮をペンの先より垂らす

放たれむ声をしきりに犬挙ぐる放ちしことある我を見しより

くくみ鳴く鳩の夜更けて聞ゆとき手の老斑の顕ちて来りぬ

冷蔵庫にひび入る卵は生きてゐるものの粘りをもつ液まとふ

出でゆかむ思ひをもちて聞きゐれば降りゐる雨はあたりを囲む

見下して稲葉は青く競ひ立ちすずしき風の吹きて来りぬ

風通ふ木蔭のベンチに腰下しシャツのボタンを外し開きぬ

青と黒の紋様憶へある蝶の今日も来りしベンチを過ぎぬ

公園の掃除しに来し人ありて尿なしたるところも掃きぬ

吹き来る風の方なぞ見てゐしが老ひたるかなや横になりたり

葛葉に黄葉のしるく今日見えて雨まれまれに炎暑のつづく

自在なる蟻とおもへど忙しすぎ山のみどりに瞳移しぬ

葉の萠すところにみどり残りゐて伸びたる草に日照りのつづく

紋様の色あたらしく蝶の飛び大きなる木の蔭すみとふる

明朝はすゞしくなるといふニュース楽しみにして床につぶりぬ

老斑のしるけき朝や稲の穂の一夜の伸びを我は見ており

歌集 青い丘

朝顔

小野市住吉町 長谷川 利春

うつうつと出て来し今日やおのづから道の端を行く歩みなりけり

コーヒーを一口飲みて背を凭らせ一人となりし瞼閉ぢたり

活作りされたる鯛はいのちある限りのひれを打ち振ひたり

指させし鯛は俎上に乗せられぬ一匹の死の偶然にして

大きなる木蔭のベンチは鳥の糞多し払ひて寝ねにけるかも

天分つ青き峯より吹き来たり風は額の汗を拭ひぬ

顔上げて草原渡る朝風の胸内にふかしおのづからにて

朝顔の青にあしたの庭澄みて本を読むべき歩み返しぬ

耳もとに小さな声に告げ来たり少女は秘密持ち初むらしき

夕闇の覆ひくる中やや濃き闇となりゐて歩みゐるかな

渦巻きて流れし煙をさまりて箒をかつぐ媼去りゆく

名を呼べる声に振り向き久に逢ふものの互に歩み寄りたり

かりかりと自が煎餅を食ふ音の夜の底ひの室を渡りぬ

世界を圧す日本企業のまざまざと折込広告求人多し

秋おそき机の横にこほろぎの僅に動く死にてゆかむか

山上に石を組みたる人のあり担ぎし人はわらじはきしや

解け得ざるところを返し読みゐしが音立てせんべい我は食べたり

必ずや死すべく生まれ来たる身を月の光りに曝していたり

美しき死に態なども撰び得ぬ我かと花殻掃き集めつつ

輝ける雲去りゆきて大空は底なく青き渾沌となる

我は言葉を月は光りを持ちたれば移りを共になしているかな

岸上の安保の歌も戯画となり過ぎたるものは罪にも似たり

輝ける雲増えゐしが昼すぎて光とほさぬ厚さとなりぬ

庖丁を置きしてのひら血にぬるる魚のはらわた摑み出したり

コンクリートの亀裂に芽生えし草ありて生きる限りの緑を透かす

倒伏をなしたる萱葉は一夜経て秀先を少しもたげきたりぬ

クレータと岩と埃の月しろのはるかなるものは輝きて見ゆ

終戦と夾竹桃の紅き花年経て我に強く結びぬ

草の葉の露をはらひて風の過ぎ大地を踏める歩みなりけり

はらみゐし種子を落して草枯るる蕭々として風になびけり

未知の己

はしがき

今年も例の如く暑さと共に思考渋滞がやってきた。それでも八月の初め迄書きかけの小論を執筆した。本書はその後の二十日間の作品四百首余りと、一人の室以降に書きつけていた百五十首程の中より、歌の体をなさないもの百余りを捨てて集録したものである。

平成四年八月二十八日

長谷川　利春

いくばくを他人が儲けし話など関りあらぬと思ひつつ聞こゆ

すきとほる水に光の昏れのこり窓に花なき瓶の立ちたり

身の重さベンチに委ね寝しとき果なく青き空のありたり

ガラス戸に鼻をくっつけ見ておりしわれあり不意に鼻の冷たし

石階を降れる人等うつむける皆一さまの動きもちたり

打ち込みし鍬が返せる地の中の草の根無数にからまり合ひぬ

地の中にからまり合へる草の根の奪ひて生きるかたみなるべし

争ひて生きてゆくべきいのちもち草は地中に根をからませる

あきらかに水に映れる山影を時に乱して小魚およぐ

とり出せる煙草に素早く摺るマッチ若き女の指を透かせり

足跡にくぼみしクロバー草液を滲ますこゆき緑をつゞる

草液の滲みたる葉の緑濃く踏みたる跡のクロバーくぼむ

耕耘機の轍にじりし茎ゆがみクロバーの径二すじくぼむ

使へるか知れぬと置きし机など一輪車に捨つべく積みぬ

舌白く荒れしが少しなほりきて鏡の前を通れば写す

わが入らん扉をおさなの抑へおりおさなの力に合せて押しやる

やりばなき心となりてまつはれる幼に荒き声を出したり

スイッチを押して机に灯り点き本読む我の空間となる

から揚げにする豆鰺の黒き目の並ぶ包を下げて出でたり

雨が降り散歩しやれぬ犬の声曳く声ながくわれを見てをり

にちにちに犬の散歩をなしやれば罪の如しも雨ふる今日は

朝よりの雨にこもりてゐたりしが声する方に行かむと立ちぬ

直ぐく立ち朝々緑を増しゆきて植ゑし早苗は根付きたるらし

吹く風に声を挙げたる幼な子は額あらはに走り出したり

考へて考へしことを書きとむるわが残生はそれのみによし

手を挙げて孫等去りゆき今宵より二人で過す家ぬちに入りぬ

所用のある筈にて来しが年老いて思ひ出せざる歩みを返す

灯にかざし鎌の刃付を見てをりし男ふたたび砥石に当てぬ

障子開けて風の通へる室となり風来る方に瞳移しぬ

言ひ返す言葉いくつが浮びしがその卑しさに黙しゆきたり

一茶の書三百万と記しあり乞食が憐みし彼の生涯

頬を打つかすかな雨に目を上げて茫たる空のしたしさのあり

すきとほる炎となりて燃焼は自が完結を遂げてゆきをり

はらはらと風に枯葉の散り落ちて残るものなき我と知りゆく

伸びてゆくバラの若木に立つ刺の柔かなるに指をふれたり

昼寝する背中の上に乗る孫のすこやかなるは我には痛し

くさむらより飛び立つ虫の翅唸り夏は無数の死のかげをもつ

同化作用にぶくなりたる厚き葉の影の暗きに山路すぎたり

めんめんとかなしみを語りゐし女口紅塗りて鏡に笑みぬ

刺を持つ花うとましく老い来り蘭の鉢置く席に坐りぬ

おのずから頭を垂れてゆく歩み頭蓋に昇る血潮の重し

疎みゐる子等かも知れぬ一枚のちり紙をたたみポケットに蔵ふ

水流るる傍のみ葉末の直ぐく立ち草は乾ける埃に白し

書かれざる原稿紙の桝目文字未だ形をなさぬ前に坐れり

コーヒーに入れし練乳いくつかの玉と浮ききてはじけて開く

じいちゃんと言へるは誰も居らぬ時親の声聞き走り去りたり

ふざけすぎて叱られし孫はぢいちゃんと言ひて入り来て背をかき登る

童二人ようやく出でて室内に飛びゐる蠅のありしを知りぬ

蠅が来て殺虫剤もち立上るわが家でわれが制し得るもの

外燈の下遠ざかりわが影は伸びつつ闇に消えてゆきたり

炎なす木々の緑に夏の日の差せば若き日われより去りぬ

文法を言ひて詩心を言はざれば歌会への道を夏の陽が灼く

炎熱に萎えゐる草と分ち合ふ生れしものは生きねばならぬ

疲れたと言ひておりしが婦人服売りゐる店にわれが疲れぬ

どぶ川の泥にうごめく赤き虫ここにも生きるいのちを畏る

三度五度こすりても書けぬボールペン机に二日置きしが捨てぬ

心臓の鳴るは見るより明白に皮膚の内なる体のありぬ

つき当りつき当り蠅はすきとほる無明のガラスに翅打ちつける

新しき花置かるるに目を止めて路傍に事故死の忌明けのありぬ

紫に唇染めて桑の実を食べしはここらか家建ちてをり
ひし草の池の面に生ひ茂り見えざる小鮒幼な日のわれ
心弱く生き来し記憶幼な日に友と羊かん分ちしときより
コーヒーの茶の混沌に浮き出でて練乳白く己れを展く
このところ桑の実ありき少年期断たれて青く稲田そよぎぬ
この山に兎の足の早かりき少年われの脚細かりき
太洋に思ひ馳せれば小さなるつばめの羽根に日の光りたり
あまごかふ三十年をわが知れば数万匹に水の透きたり
あまごかふ紹介の記事机に積みて山中に眉白くなりきぬ
葉を綏りてながき日照りに耐へており草の命のおのずからにて
刈られたる草の照る日に乾きゆき生きゐしものの臭気を放つ
木の蔭に旬日ほどを生きゐると雌呼ぶ蟬は声ふりしぼる

C　型　溝

山裾よりC型溝のつけられて植ゑし稲田を白く貫ぬく
早苗田を白く貫くC型溝淀まぬ水の光り躍らす
淀みなく水の流れるC型溝魚のいこはん草蔭もたず
魚影を見ざるさびしさ淀みなくC型溝に水の流れつ
溝と魚相ともなひし少年期断ちて流るるC型溝は
計算をされし流れにC型溝生きゐるものの姿を寄せず
草生えず鮒の登らぬC型溝計算されて水の淀まず
水流れいきもの寄せぬC型溝近代とふをわれは見てをり
地中ながく過ごして陽の目は旬日と雌呼ぶ蟬の声のひゞけり
踏張りし足の親指大きかりそこのみわれは仁王に似て立つ
宇宙飛行に航きて帰らぬ人の夢覚めて出でたる汗のありたり
差上げてくれと幾度も孫の言ふ執念きものを讃へつつ疲る
足音に飛びし白鷺すみわたる空を画布とし翼搏ちゆく
池の堤登りて吹ける風のありそよぐ稲田は山につゞきぬ
輝きて大きな蝶の降り来り天心青くすみとほりたり
生殖をのみに出できし蟬の声はげしく鳴ける声のさびしさ
若杉の秀は天心のすみとほる果なきものを恋ひて指したり

孫の手を首の裏より差し入れて掻かんとする時背中反りたり
身をしぼる蟬鳴く声を聞けるときわが残生のいくばくかある
ノートには消したる歌の幾首かがありてペン置き立ち上りたり
百合の花剪られて今朝の無きこともはやき歩みをもてる一つか
凛と張る角ひからせて動きゐる蝸牛小さし指ふれゆきぬ
億光年星の光りの額照らすことの不思議に歩みゆくなり
羽根もつは敵を避けると読めるとき空を飛びゐることも淋しき
一足を歩めは一足星光に近づく愚かも知りつつ思へり
惑星の何れも水をもたざると湯槽に肩迄漬かりゆきたり
ひさし深き帽に顔上げ女行くテレビに見たる歩みもちゐて
昨日蛙をとりしところに立止まり犬は頭を低く見廻す
このところ転びて遊びし名の残り草ゆるやかになざれて生へぬ
夕茜映して海につながれる水は河口に動くともなし
ちっち蟬鳴きゐる声に足止めて一つ鳴きゐることのさびしさ
一匹の声といへどもちっち蟬生きる限りの声渡りゆく

生涯の大事終ると道元は三十有六才にして言ひたり
ひとところ刈り残されて撫子はうすくれなひの花を咲かせり
なでしこのうすくれなひの花咲きて刈残したる人のありたり
冷房を入れゐる車窓ガラスにて灼く陽に旗ふる男と距つ
夕霧に白く点れる外灯の茫たる下を歩みゆくかな
登り来し汗を拭ひて立つ堤水を渡れる風の冷えたり
拡大鏡もち来て大きなかまきりの構へし斧の鋭く尖る
扉押す束の間光り差し入りて鉢の若葉のみどり透きたり
出でゆきて扉の閉りテーブルの蒼き掛布は再び沈む
下の葉は枯れつつ青き芽を保ち草に日照りの続きてながし
スイッチを入れて明るき室となりわれの読むべき本の並べり
死者の家訪れ来り点もされて塵なき室に我は坐りぬ
こまかなる生毛光れる白桃を少女は食べよと差出しくるる
指の間をしたたるジュース白桃の甘きを我はかぶりゆきたり
音立てて流るる溝の水となる池の樋門を抜きし時より

露踏みて畑に通ひ来し女育つキャベツに屈みゆきたり

今日ひと日目を休めんと思ひしが机に坐れば本を開きぬ

わが作らぬ飯食ふことの不思議さによそほひくれし碗受とりぬ

死金を使ふと祖母の言ひたりきひと代を通す性にてありき

歌一首出来て書かれぬ紙片を切々として欲しゐるかな

指に押し虫の動かずなりし後死の意味問へる我となりたり

声高に他所の被害を語りては男等盃重ねてゆけり

白鷺のすぐく伸ばせる首細く茂れる草を移り行きをり

鎌を持ち歩める男山坂を変らぬ歩巾に登り過ぎたり

扉閉めて闇の中なる人となりわが足音の我にかへりぬ

競り合ひて数の増し行く掲示板監督の脚震へてをりぬ

国を愛す心をもつと思はねど平泳ぎにて日本勝ちたり

にっぽんの勝つべき柔道負けしとき声の止まりしわれの心は

彫られたる玻璃の光りの散乱は彫りたる人のよろこびなるべし

水と花映し合ひをりみずいろのあぢさゐのまり重みに垂るる

雨止みしあしたの畦は蛙多し犬の鎖を引くに疲れぬ

曇り来て影なき我となりたれば孤りの思ひに歩み止めたり

失ひしは影にてあれど曇りきて瞳締れる我となりゐぬ

朝々に目やに除きて開きゆく目とこそ思へ読まねばならぬ

うつうつと歩む堤や石投げて乱れしときに水は光れり

抜きとりしひえを下げゐるシャツの汗顔垂る汗は尚更にして

憤へる我の言葉に笑ひをり流るる汗を当然として

青濃くはるかな山の並び立ち颱風過ぎし朝の晴れたり

白鷺の集ひ止まれるいちいちの白あきらかに晴れわたりたり

山写す平らな水を見てゐしが石を投げたき心をこりぬ

雨蛙捉へてわが顔見る犬よわが愚かさを暴くことなかれ

雲が出て暑さにかざす本おろしバス停迄の道のりながし

皮たるむ下にめぐれる血をもつと日差を返すひまわりに立つ

他の人が作りし米を食ふからに残るいのちは悔なく生きん

日が没りて降り来し露か草の葉の縒りてをりしが開ききたりぬ

縒りてゐし葉を開きたるよろこびを降りて来りし雨に見ており
縒りをりし草の葉なりき降り来る雨にそよぎて開ききりゐる
なめらかに草を這ひゐるくちなわの夏に生きゐる鱗光らす
ひまわりは夏の陽差しを返しをり草液昇る太き花茎は
香と花墓に供へて尚足らぬものに瞼を閉しゆきたり
死者生者距てて向ふ墓石の冷えたるものに香をくゆらす
生前の名にまつはるは何なりし石に戒名刻みて並ぶ
応援の声ふりしぼるテレビより離れて澄める地平を眺む
顔上げて入り来し人を見てゐしが幼女は再び一人あそびぬ
食べおへて空になりたる飯碗を置きたり果なき人のいとなみ
二つの足互に出すもはるかなる時経て来しぞ歩みゆきつつ
調理するテレビを妻は眺めをり今宵は鰺のフライなるべし
満席の故に語れる人の声われの外なる声のきこゆる
自分のことのみを語れる男去りいれゐるお茶の香りたゞよふ
満席の人等去りゆき声のなき一人となりし室を見廻す
クーラーは着きておりしと松尾さん去年は窓開け乗せて貰ひぬ
クーラーある新車買ひしをことほぎぬ老年に入る君にしあれば
見はるかす稲田は山に続きゐてこの平らかは人の作りぬ
病気かと案じてゐたと三月程欠席したる源氏読む会
ふくらみしグラスの露は窓に入る光りひきつつ流れはじめぬ
案じくれる人があるとは知らざりき少しは酒を控えて飲むか
卓に置くグラスを区切り飲み残す水はふふめる光りの強し
直立する二本の脚の美しく若き女の後にレヂ待つ
犬の糞待ちゐるひまを水落つる音の田を越えつたはり来る
散歩するあしたの風のやや冷えてあきつ飛び交ふ道となりたり
あほむけに草に寝転び背を掻きて犬は自在に撓ふ身をもつ
身を裂ける声に叫べるテレビ切りおのが所在を問ひてゆきたり
汗にじむ呼吸の荒く裏露路の沿ふどぶ川のはげしく臭ふ
増設のシートの高く囲ひゐて量販店に車ひしめく
盛衰に商店街を分ちゐて量販店に人の混み合ふ

取払ふシートに見えて量販店拡張の建屋旧に倍しぬ
朝々をやに取除き開きゐるまなこと思へ読まねばならぬ
沫きつつ山より落ちて来し水はここに淀みて草を写せり
畑より行く他知らぬ鶴さんが風止む暑さに帰りゆきをり
風止みて額に垂るる汗となり灼けたる空気つちよりのぼる
ゆとりなき声に距たるわが老いか応援をなすテレビを切りぬ
炎熱に油剤が溶けて下駄につき歩める時に老は来りぬ
銀蝉の翅透くむくろ道に落ち我の幼なき記憶を顕たす
汗拭ひ上げし瞳に山が見ゆ夏の光りに紺青ふかし
次々と車過ぎゆきはるかなる動かぬ山に瞳置きたり
喰べおへてしばし体を横たへぬ胃腑のみ動きもてる安けさ
かげり来し雲が運べる風ありて汗収まりし顔に歩みぬ
撫でやりし猫はわが手の動くままに撓はせゆける背骨もちたり
手のままに撓へる猫の背を撫でつ撓ふ力に思ひの及ぶ
ほほを打つ雨に目を上げ俯むきて歩めるひまに雲のこめたり
ふり止みし雨が洗ひて道ばたの草青々と露を宿せり
やきつける真夏の昼の日の光りひまわりの花はもたげて咲きぬ
この池に打つ波あらし山越ゆるひまに層(かさ)なる雲となりきぬ
放ちたる金魚は瓶に大きなる輝く腹となりて泳ぎぬ
夏草は茂れる蔓を伸ばしゐて水涸る川のせばまりゆきぬ
真夏日の日差しを蛇の背の返し草なめらかに分ちて進む
青草のいよいよ青く蛇の背に太陽は夏の讃歌唄へり
声かぎり鳴きゐる蟬に傾けて成さねばならぬ残生のあり
かまきりはかまを構へて止まりたり風に稲葉のそよぎもちきて
白き雲多くなりきて空動く颱風は過ぎてゆきたるらしき
颱風の過ぎたる後を地(つち)伝ふ轟く水の落つる音する
そよぎきし野の草ありて走りゐる風と瞳を移しゆきたり
全天に黒き雲満ち大きなる渦となりつつ北に走れり
層(かさ)みゐし雲べったりと空閉し雨に舗道の濡れて来りぬ
急速に曇りたるらし読みがてに電気スタンドのスイッチを押ぬ

降りては止み止みては降れる朝よりの空に幾度そと出変へをり
出でむかとすれば降り来る雨となり朝より低く雲のこもらふ
白く建つ工場の浮び明け初めていきもの未だ森に眠れり
道すぐく原貫きておおつちの応へ確かな歩みもちたり
諍へる声の聞えておとろへし我の関りもつべきならず
言ひ出でて成さむ見通しあらざれば関りのなき顔に聞きをり
水底の石あきらかに映えもちて山添ひの溝苔のしずきぬ
腹の空くはよしと湖内さん言ひたりき腹の空ききて顔の浮びぬ
轢かれたる蛙は生きてゐしものの臓腑ひろげて血にまみれをり
寄りゆきしベンチに這へる蟻のあり殺して我は寝ねにけるかも
差し交す枝が落せる蔭冷えて人は静かな歩みもちたり
大きなる木蔭にベンチ置かれゐて坐りし人の本取り出しぬ
緑の灯消しては点し飛ぶ蛍一つにあれば唯にながむる
雨止みて田に水満ちし人の声さやなる声を交し合ふかも
青々と風に稲葉の波走りこの豊かさは人の作れり

人間よ人間よ斯く広々と風にそげる稲田を作る
一日を終へたる体ゆるませてうましビールの喉下りゆく
浴みおへあぐらをかきて卓の上ひと日終へたるビール注ぎたり
車椅子に押されて知りし人の来る会ふはいたまし避くるは痛む
死してゐるごとく生きむと思へども罵る言葉にふと暗きかな
生前の強欲消えし棺の顔これより何れの面輪かあらん
風信は厚き葉鳴りのひまに見ゆ高くなりゆく真澄のありと
夕風は秋近づきし冷えもちて固き葉ずれの音となりきぬ
罵れる風評なども聞えきて頬吹き過ぎる風と去りゆく
休まずに羽搏き渡る鳥ありて友の一人と重なりゆきぬ
冷房を入れむとガラスの戸を閉し原と距てる我の坐しをり
窓開けて風の中なる我となり葉摺れの音の伝はりきたる
踏む足がすりて減りたる石段の人は願ひをもちて登りき
なめらかになりし石段詣りくる人は悲しみもちて祈りき
水温の低くて鮎の小さしといのちありけりさだめありけり

窓閉めてクーラーを入れ灯を点す近代人の夏と言ひけり
田に水の満つる豊かさ諍ひて水を守りし過去を負ひ来ぬ
アーケードより降りて来りし塗装工付きしペンキにズボン硬ばる
垂れ落しペンキの乱れつくズボン塗装工はジュースあふりぬ
闊歩する若き女のししむらの豊けき夏となりにけるかも
灼きつける夏の陽差しがやしなひて木々の緑は谷に隈なし

観音堂　八首

古びたる格子開きて観音堂年に一度を集ひおろがむ
その昔尼僧の居りて仕へしと格子のさんに埃積むまま
古びたる格子開かれ灯の点り埃を払ふ人の動けり
一年の埃の堆く仏像はしろしろとして壇に並べり
いにしへの人おろがみし仏像の埃ぬぐはれ金に光りぬ
拭はれて金に光れる像並び人等坐りて壇に向へり
燈明を点して明るき堂内は唱へる経の声の満ち来ぬ
しきたりに年に一度をおろがみて信仰とふは何にありしか

悼　芝田すみれ氏　八首

誰も知らぬ夜の間に死にたりと童女の如き顔にありしと
朝飯に呼ばへば答えなかりしと苦しみし跡のなくて死にしと
生涯を一人過して来し故に夜に死にゐしことのさびしさ
みとられず苦しまずして夜死にしその静けさのとうとくありぬ
君の如き死際我も欲すれど君のみとらざりしはさびし
雲と鳥友となしたる方丈の大方君は一人生きたり
首かしげ耳に手を当突出せる顔に聞きしが思ひ出さるる
言ひたきを言ひて暮せし生涯と思へど山に一人生き来ぬ

癌検査　十六首

大便に血の混れるはひそみゐる癌の疑ひ濃厚なりと
胃カメラを呑む日定めて無いがよし有れば仕方の無しと出で来ぬ
平静と思ひてゐるに夜半を覚め手術のことに思ひの及ぶ
欠食をなさねばならぬ朝となり食へぬ思ひに食欲起る
十二時になれば食へると我に言ひ童の如く空腹に耐ゆる

空腹となれば童にかへりゆく我か時計を亦も見てをり

痺れさせ呑まねばならぬカメラなり液体ぞろりと口に含みぬ

口腔に保つ薬に痺れゆき舌や唇こはばりきたる

含みゐし痺れ薬を呑み込みてベッドの上に身を横たへぬ

差し込むと技師が出したる胃カメラの尖端点る灯りつけたり

真剣を呑める男のゐることを思ひ呑みゆくえづきに耐ゆる

ガシャリとふ音に研がるる耳となりカメラは内部撮しゐるらし

胃の壁に当てゐるカメラの感触の重さが呼びて思ひの悪しき

胃カメラが照し出しゐる内部のさま思ひてみしが浮び出で来ず

撮しおへ口より取出す胃カメラの蛇の如くに長くくねりぬ

心配は全くなしと癌検査言はれし足に帰りゆくなり

PKO反対運動　青野原に見る　八　首

かつて皆挫折をしたる学生の運動なりき亦叫ぶ声

PKO反対叫ぶ学生等亦覆面に鉄帽被る

現実に常に挫かる理論にて曽て鉄帽被りし幾度

見出でし理論に殉ずる学生の危きものも肯ひやらむ

現実を見ぬ学生の一途さも人類のもつ活力にして

反対の訴状差し出す学生と受取る司令の瞳を合はす

賛成と反対の声を常として時は全てを過去に押しやる

現実は現実のみが作りゆく理論も理想も内の一つにて

窓開けて一人留守居の目を放つ空に動ける白き雲あり

地の中に棲む虫なども思ひゐて一人留守居の室にこもりぬ

かすれつつ流るる雲を見てゐしが全く青き空となりたり

双の手にあごを支へてものおもふ重きかな人のものを思ふは

不死などは何処にもらぬと思ふとき窓にさやかな風入りきたる

人の混む街に出でんとシャツ換ふる更なる孤独に沈まんがため

みひらきし少女の瞳流星の光りは何処に消えてゆきたる

雑踏は更なる孤独揉まれつゝ漂ふ心たゞなる歩み

蛇料理蛙料理を店頭に並ばせこの地の人等生き来し

充実と言へる不思議や柿の実の甘く化したる果肉をかぶる

時蓄めて柿の実甘し老斑の浮きたる腕を揮ひ見るかな

渋かりき柿の実甘く化している熟してゆける種子と合はせり

霊送りなせし翌日水の上に飛び交ふ黒きあきつのありぬ

愛し合ふ若き男女もありたりと天主閣暗く天窓のみもつ

人間も中身より服がたかそうだ菓子の包装はぎてゆきつつ

歪みたるガラス戸越しの木の歪み救はれ難きわれの心や

われの影他人の影と並べるをわれの影のみわれは見てをり

脚むくむ重さに寝て後ながく生きて歩まん日々の続けり

偽善者にあらずや出合ひし選挙カー交して対手の健斗祈る

蜿々と続くものかな手も加へ自慢の話憬れる言葉

自分のことのみを互に語り合ひ満ちたる顔に別れゆきたり

起き出でて昨日の疲れの目のやにや冷たき水に洗面をする

われよわれ一度持ちたる嫌悪感脱け難きかなほゝえみゐるも

何処かに雌のゐるらし鳴き立てて犬は鎖を強く引っ張る

うすれゆく雲に黄の壁照り出でて山はふりゐる雨にかすみぬ

水の中に白くふくらむみみず見え命果てたるものの動かず

うすれゆく雲に細まる雨となり天つ光りを帯びて来りぬ

生ぬるき空気こもりて灰色の動かぬ雲の朝より低し

かさを増し雲こめきたり草の葉はながき旱の縒りを開きぬ

一本宛分ち植えたる玉すだれの今年のさびしき花も見て過ぐ

光りもつ雨となりきて雲うすれ窓を雀の過ぎてゆきたり

ふり止みし雨に明るき花となり蜂は光りと共に来りぬ

あきらかに現はれたるは亡き母の如何なるときの顔にてありし

危ふしと思へる程に積上げてトラックの男煙草吸ひたり

透くものを愛しゐたれば曼珠沙華群るる花軸の直ぐく立ちたり

浮き出でて老斑ありぬ手の甲に知らず移りしいのちなりけり

目薬に洗ひし眼爽かに層を増しゆく黒き雲見ゆ

いち早く白く塗れるは照り出でて丘に大きな工場建ちたり

厚き葉となりて落せる蔭ふかくすぎゆく夏の森くろずみぬ

供花に書く名を読み返し喪の家を守る母子の二人住みたり

力強く泣く子の声に朝明けて昨日より孫等帰り来てをり

渾身の力で泣けるみどり子の声は昨日より孫等のきたる

手を握り脚を伸ばして泣く声はわが家の明日を継がむ力ぞ

頬に汗光らせ走り来し男作業帽にジュース詰めてゆきたり

おとろへて日々はありけりふり止みし夏のごみ箱激しく臭ふ

朝顔は朝の光りに咲き出でて奪ふを得ざる青き色もつ

鶏頭の花の赤きをひそめたる一日とおもふ朝に見たれば

糞便の臭ひたち来て我を他に委ぬべき日の来るを怖るる

炎熱におとろへたるやごみ箱の腐る臭ひにふとくらみしは

塵芥の腐る臭ひが滲み出る汗と重なりまつはりきたる

覆ひるし雲裂かれゆき青空はすみとほる刃の鋭さをもつ

田の面をわたり来れる雲かげりかすかな稲のそよぎともなふ

水草の少なき処を鮒泳ぎ池の底ひは冷えてゐるらし

汗拭ひ吹き来る風に顔げぬとほき地平はすみとほりたり

汗垂らし男は夏を走りをり確に上げて下ろしゆく脚

脚のみが生きゐるごとく走りをりパンツを濡らす汗をたりつつ

隣席の語れる声もはるかにてコーヒー店に瞼閉ぢをり

ひさし深く帽子被りて歩みをりこの道多くの知る人通ふ

雨止みし光り及びて建ち並ぶ窓のガラスは瞠ききたる

戸を出でて夏の日差しの白く照りしばらく眩む老いし目をもつ

岩を置く間を幼なの駆けめぐり危ふし老いしものの眼に

てっぺんに登りし少年仰ぎゐる友をしばらく眺めて下りぬ

葉の影の地にゆらめきて汗収む風の中なる我となりをり

寝て見る枝を組む木の高きかな葉蔭より蝶の舞ひ降り来る

木の蔭のふかきを渡る風冷えてベンチに腰を下しゆきたり

他者の目に見れば輝くわれなるか月照る道を歩みゆきつつ

いしぶみの埃を落し木の葉揺りわが髪乱し風の過ぎたり

種子被ぎあさき緑の透くを見ぬコンクリートの割れ目にあれば

大きなる目の紋様の蝶とびて夏ふかまりし木蔭のありぬ

立ち上り立ち上りゐしが吹く風の強くて萱はつちに伏したり

晩秋の冷えゆく空の澄みとうり鶏頭の花緋のきはまりぬ
必ずや死する体を明らかに月の照して一人なりけり

寂光院　八首

苔をもつ枝差し交し葉のつくる蔭のふかさに参道ありぬ
見えて来し屋根の意外に小さくて中宮はここに仏に仕ふ
拭きこみし艶もつ木目の椽板に寂光院は古りて立ちたり
せゝらぎの音を立たせる砂石の色あきらかに見えて流るる
幾年のかなしみ過ぎて澄める目に流るる水を眺めたまひし
みほとけに仕ふ心すみとふほり水落つる音を聞きたまゐしか
われの耳中宮の耳水落つる音は千古のひゞきを伝ふ
千年を古りたる苔のしずけさに水落つる音の地を伝へり

魚屋　五首

鉢巻を締めたる男魚を指し売らねばならぬ声を挙げたり
目の前に泳ぎて来しを指差しぬ一匹の死の偶然にして
指差せし魚は網にすくはれて大きな板の上に放らる
左手に魚をおさへし魚屋は光る庖丁を腹に入れたり
割かれゆく魚の肉の白く透きわれは食ふべきものの目となる

戦争は悪なりき　四首

戦争は罪悪なりき若き日を異国に死にし友の碑に立つ
流れ出る血潮に叫びし痛む声耳の底ひに未だ新らし
寒熱と飢餓とを共に分ちたる君の青春はいしぶみとして
若き血を捧げて死にてゆきたりき罪とふ言葉を我は許せぬ
車窓よりリンゴを買ひてナイフ無きことも妻より遠く離るる
商用のおはりて見ゆる葱畑のしろがねの露は乾きてゐたり
刈られたる稲田の跡に人を見ずたでは紅葉のふかさ増しゆく
いしぶみとなりし戦友の前に立つ生死分ちし寸刻ありき
はじめてのいのちは海に生れしと今うすずみの夕道歩む
抜き出でて咲かむ心よサルビアの緋にひしめくを眺めてゐたり
生れつぐあぶくなるとも消えゆきて還らぬものになが立ちたり
地に折れてダリヤ咲きをりひたすらに燃え立つ赤き色は見放けつ

いなづまは男の眼竟にわがもつを得ざりし口惜しさに立つ
灰色に光さえぎる雲こめて吹き来る風は耳を凍らす
西の空凍てて茜のすきとほる彼処殉教者ありたりしかな
展けゆく考へのみに関りてその余のことは全て疎まし

書　店　六　首

さまざまの本が並べる書店にて未知の己れと会はむと廻る
読まざれば知らざれば我が過ぎゆきし悲しき日々と本に向へり
びっしりと棚に書物の並べるをあれにもあらぬこれにもあらぬ
全てみな読みたきものを限りあるいのちのもてる時の尊さ
悩みゐる問に答ふる本のなく自動扉の前に歩みぬ
並びゐる絵本の棚に手を伸ばし女は幼の未来を開く

洗ひおへ白く艶もつ大根を女は下げて立上りたり
空気切るするどき音に群鳥の飛びゆき澄みし冬空ありぬ
赤き花に光り差しゐて音のなく媼一人の住む家ありぬ
赤き花咲かせてここに住まへると女名一つの表札掲ぐ
渋滞と思へど孫等の帰りくる予定を既に二時間過ぎぬ
咲き初めしかにサボテンの白き花明日は十一咲くと数へぬ
今飲みし水はたちまち汗に出ぬ後一杯を飲むべく立ちぬ
痛快なる水戸黄門の映画見つ斯る印籠今無きはよし
さびしきと幾度も井上徳二言ふさびしさを糧に生きてゐるらし
飲みをへし茶をかたはらに押しやりてさて徐ろにペンを取り出す
剪るために咲かせられたる水仙の黄のはなびらの光りを返す

喫茶店　ぐれーす

ドア閉めてゆるりと室を見廻しぬこの落着の何処より来る
沈む茶の色に統べたる室内は厚き木質の器具を調ふ
手に応ふ椅子引き寄せて腰おろし高雅な店の我となりゆく
コーヒーを一口飲みて我は我読むべき本を取り出しひらく
下駄さんと通ひ来りて三回目ウエイトレスは誰に聞きしか
撓やかに直ぐく立ちゐる細き脚ウエイトレスはコーヒー運ぶ
虹のごと残像ありて装ほひし若き女等出でてゆきたり

伴ひてコーヒー飲むはこの店にせむとおもひを一人決めゐつ

一すじに直ぐくひきゆく航跡雲志(し)のならざりし我を立たしむ

頭丸き土筆の姿の単純に軽き歩みとなりてゐるかな

曳く犬の不意に引っ張り飛びかゝり蛙背を乾す渚となりぬ

クロバーの繁り来りて人通ふ一すじ細き径のくぼめり

疲れ来し眼は低く鳴く犬の声に障子を開きゆきたり

蛇を見し犬は咥へて振り殺し激しき夏の日差し亘りぬ

半身の濡るると思ひつ雨宿りなしゐる君に声をかけたり

頼むもの二本の脚とはく下駄にバス停迄を歩みゆくかな

知る人が車に追ひ越し行き過ぎて知りゐる故のさびしさをもつ

歌集

緑の斑

はしがき

今年は冷夏のお蔭で思考渋滞がなかった。併し七月の二十五日に書いていた小文がおわり、一応これ迄の思考の総決算と、未来の展望の立脚点が出来たと思ったので、頭休めに盆迄歌を作ることにした。二十日間あるので八百首と思ったが、出来たのは六百余首であった。天成の意志薄弱の致すところである。

例によって去年の「未知の己」以降の作品二百余首との中から五百余首を撰し、其の他を焚刑に処することにした。何分興に任せて作ったものであり、短時日の多作で殆んど推敲らしきものもしていないので江湖の御批判に堪え得るものではない。併し印刷すれば何百冊か作らなければならない。御迷惑と思うが読み捨て下されば幸甚である。

平成五年八月二十四日

長谷川　利　春

かしましく森を満して蟬鳴けり一つ一つの懸命の声

姦しく蟬鳴き競ふ森の中鳴かざる蟬の居りて動かず

蟬の声はたと止みたる公園の冷えくる風に瞼閉ぢたり

重なれる照葉の下に昼の闇ふかしおどろのものを棲はす

喉下る水に還れる我のあり歩み来りし汗を拭ひぬ

颱風に散りしわくら葉掃かれゐて青葉の青く公園ありぬ

颱風がわくら葉払ひて公園の青葉さや鳴る下を歩みぬ

厚き葉の葉蔭に瞳移しゆき歩み来りし呼吸しずまる

円型に石の置かれて木のそびえ蔭のベンチに腰を下しぬ

夜の卓にビールを飲むと注ぎ交すコップを出せり子との交はり

偶然に生もちたるを偶然の死を拒みゐて薬など飲む

死にゆくも全て偶然と思ひつつ偶然とふ語の涙をもたず

一夜経し新たな声に雀鳴き窓に差入る光り届きぬ

腰上げてペタル踏みたる幼見え柵ある坂を登りきりたり

杉山に霧立ちのぼりその昔杉鉄砲の弾丸を拾ひぬ

一銭五厘の命と言はれき成程と思ひき戦時徴兵のこと

お互に自分の時計を覗き見て明日の出会ひの約束をする

重量は力と言へる人ありきそば立つ鉄の舷側に立つ

巨きなる舷側に立ちぬ時永き営に人はこれを作れり

ゆるゆると巨船入港す海に向ふ時永きかな人の営み

盆供養怠り本を読みてをり生涯の不孝の証しなりけり

忠実に己に生きむはおのづから親に叛ける生涯なりき

子に叛かるは身を裂くに似るといふ言葉思ひ出し居り亡き父母の墓

仮借なく魚のはらわた引きちぎり桶に捨てをり生きゆくがため

すきとほる魚のさしみ食べてをり一寸刻みの肉を食べをり

戸を閉す姜となりゐてタイヤー焼く煙がやがて覆ひはじめぬ

草を刈るエンヂンの音ひびき合ひ盆の休みも農に出でゆく

田の畦の草刈りおへし清しさに盆を祖先の霊迎ふるか

止まりたる車を眺め信号の青青に行く王者に似たり

この顔に髭の生へくる不思議さに生れて三月の嬰子笑まひぬ

曇りたる空を飛びゐる鳥の群光り返さぬものの黒さに
競ひ合ひ育つ稲葉と見てゐしが下葉は既に黄色く病みぬ
繁り合ふ所に闇の生れゐて葉肉厚きは古りて来りぬ
窓を閉めて雨降る音に囲まれし我あり背すじ伸ばして坐る
分銅を振れる時計の飾られ唯それのみが動きてをりぬ
まだ読まむ本にてあれば目を閉ぢて首をしばらく後に反らす

回想の譜　七首

歌に問い歌に答へしみちのくのもののふとうき昔なりけり
知盛の亡霊ここに呼びゐたれ我に一首の歌の生れぬ
雲白く小諸に浮かび藤村の瞳とわれの瞳並びぬ
孝の心何時の代か失せ養老の落ちくる酒は水に変りぬ
鏡池に鏡沈むととほき日に山越え幾月夫を尋ねし
潰されし目に雀追ふほうほうの老婆の声は文字に遺さる
静はここを行きしならずや足の血を流せし萱と茨生へをり
目に見えぬ程に小さきだにと言ふ鋭き爪をもつが写さる
若き等のさざめ合ひて行く傍へ我は我にて首立て歩む
七十五の今日の日のあり大空をゆるゆる舞へる鳶を見てをり
足裏のくすぐる如き感触はむくみゐるらし素足に歩む
学休となりて伸びたる少女等の脚歩みゐる村道となる
盆すぎし十六日も休みにて我等の得たる平和のながし
垂るる汗に稗引く男顔上げぬ剃らざるひげの白く光りて
掛声にバレーボールをなせし日のありと思へず腰曲りをり
南方のいかつき像を見たる目に野仏は円く引く眉もちぬ
七十を過ぎれば清き我なると思ひをりしがあまり変らぬ
一すじの空見えてゐて石段は杉の木の間を高く登りぬ

信長公記　三首

一声に数万の人を殺したる英雄伝が書店に並ぶ
一人の意志に数十万人殺したる信長公記讃辞を連ぬ
数十万の人を殺して讃へらる一人の意志というを問ふべし
三国志、戦国時代の英雄伝並べ売らるる時代の意志は

散歩請う犬は昨日と同じ声に鳴きをり犬の一日にして

散歩請う犬は権利の如く鳴き時間が来ればわが出でてゆく

一日の言葉を消して夕闇は地よりのぼり我を包みぬ

夕暮れは闇の言葉を携へて己れ問ふべき我となりゆく

太陽と沈みてゆける言葉あり足に歩みて出会ひし人等

明日は亦明日の言葉の生まるると今沈みゆく太陽に向く

焼かれたる堤の区切り土盛るは父祖耕して野菜を植ゑぬ

征韓の舟を作りて献ぜしと舟木の水音はつかにあらず

寝転びて淡くなりゆくいのちあり煎餅とりてはりはりと噛む

ものを食ふいのち太初（はじめ）にありたりきはりはりと鳴る煎餅を噛む

まだ早き時間に待つは一人にてはるかな山に瞳を置きぬ

爆笑に若き等屯ろなしてをり亦湧き上る笑ひゐる声

笑ひ声絶えず起せる若き等と本を読むべく少し離れぬ

欲望の淡くなり来て弾みゐる若き声聞く欲望尊し

冷えてくる夕の風に蟬の声止みて一人の我のありたり

この軽き体に声を挙げゐたり蟬のむくろの風に転びぬ

犬の前に跳びし蛙の殺されぬ偶然とふを我は見てをり

朱夏⁉この鮮かに鶏頭の咲きて鳴く声蟬交し合ふ

一人にも倦みて玄関立ち出でぬ人にも倦みて帰りくるべし

祀らる木霊　六首

蔭ふかき葉の拡がりに木の古りて根元に小さき祠建てらる

木霊なほ祀られてゐる祠あり陶の燭台拭はれてゐて

空洞となりたる幹の中朽ちて蔭冷ゆる迄枝葉拡げぬ

古代の心我の心と異なれど祠建ちたる木蔭の深し

鈴を振る布まだ白く祠あり錆びたる銅の屋根より垂るる

木の霊を祀る祠の屋根錆びて布の白きは今も拝めり

草の間を蛇するすると移りゆき炎昼は稲を青く育てぬ

炎昼の光りが生みて稲の青少女の直ぐく立つ脚ありぬ

日に焼けし顔に白き歯覗かせて少年バスに押し合ひて乗る

人を斬る刃の鍛冶の多く住み冬の水にて焼入れせしと

人を斬る刃を腰に携へて肩に風切る人もはるかに

吹く風に泰山木の大き葉がゆれゐて広き空とつながる

鱗雲出れば明日降る雨ありとわれは言葉を紡ぎゆきたり

夕蜘蛛は魔朝蜘蛛は福と伝へたり闇の深さの尋ね得るなく

帰りたる孫が残して吹くものの無きハーモニカが灯りを映す

仕入れたる品を僅に高く売り宵のビールに額ほてらす

朝読みし新聞の記事忘れゐて人が語れば知るとおもひぬ

作りたる歌書き止むと紙もちて出で来りしがペンを忘れぬ

抜けてゐる方が面白しと言ひ呉るる日日の暮しに大変困る

夕昏るる道となりきて信号は光り増したる赤に変りぬ

光り増す青き赤きの目に映えて変る夕べの信号に立つ

傘を打つ雨降る音の高くなり沫に裾の濡れて来りぬ

傾けし傘に歩むを溜りたる水跳ねとばし車過ぎゆく

鞄掲げ降りゐる雨を走りくる青年したしき笑みを向けたり

池蝦はこの頃乏し食べませと小皿に盛りて持ち来下さる

戴きし池蝦少し分ち置き冷蔵庫にとしまひけるかも

たまゆらを目の向く記事は被災などバスの来りて新聞放る

はがしたる後を歪みて爪の生へはつかに白き三ケ月も見ゆ

砂摑み砂掻き廻す幼な児の手よおのづから育ちゆくもの

摑みては砂を投げゐる幼な児よ内より動けるものの無心に

さんさんと青き稲田に光り差し水の流る音の響きぬ

母ちゃんと言ひて幼な児走りゆき赤き水筒残されて立つ

子のために蟬を採りゐし母親は鳴きゐる方に姿を消しぬ

破れたる帽子を慌てて被ぎ来て人目に敏き歩みもちをり

厚き葉の蔭が作れる闇見えて分たぬものに行かむとおもふ

一時間本読む慣ひの喫茶店慣ひの瞳しずかなりゐて

シャツ脱ぎて風にちかなる胸となり歩み帰りし汗収まりぬ

わがおもふ涯なき海の浜に立ち大きな船を夢見し人を

波寄する涯なき海の呼べる声竜馬の像は望み立ちたり

母も祖母も一代苦しみ生きたりき安らぐおもひ持ってはならぬ

方代を読みて　　碁席　　二十八首

困ったな俺が打とうと思ってる所を先に打たれてしまった
弱そうな奴と思って打ったのに一度見てから打つのであった
そこへ打てと言ひたくて言ひたくて身をだんだんに乗り出して見る
勝ってゐる奴は組んでる腕を解き煙草の煙をゆるゆると吐く
火を着けた煙草がそまま灰となり考へゐるは負けてゐるらし
若者に打ってやろうと言ったのに良い所なく負けてしまった
気付かざる対手の石の死がありてぞくぞくし乍ら手段を残す
頓狂な声を挙げゐる方見ればでっぷり肥る銀行員なり
打って呉れなくなると俺が困るからと負けたる方が言ひて帰りぬ
着手みなへまばかりして打ってゐる者等の傍を離れ難くをり
勝ち筋が見えて来りて相手にもたっぷりお茶を注ぎてやりたり
苦んで考へゐるのにかたへからもう死んどるといふ声かかる
冷静と思ひてゐるに大石が亦殺されて打石崩す
入れくれし茶の冷えゐるに気が付きぬ負けたる盤の石を収めて
午後五時の会ふ約束にまだあると思ひ打ちゐて遅れてしまふ
はっはっはぁ一寸力を入れたならこんなもんだと勝ちたる方は
弱いのうと一石毎に言ひ合ひて会へば必ず対局をする
弱かりし者に三局連敗し少し口惜しく賞めてやりをり
坐り直しお願ひしますと礼されてさてその局を負けてしまひぬ
連勝して今日はこれでと口惜しげな顔を眺めつ酒飲みに出る
指摘するに解ってをったといふ男石取ることの好きな碁を打つ
どう打つも悪しき一隅平然を装ほひ着手を他(ほか)に移しぬ
勝敗は必ずあるを碁を囲み負けし思ひを抱きて帰る
三目や五目の勝では勝った気がせぬとふ男負けるが多し
赤き顔更に赤くて負けし碁を平然とゐる態に打ちをり
大勝と思ひをりしに逆転をなされてながく腕を組みたり
負けし碁の思ひは残れ半日を智力つくせしさはやかに出づ
癒へて来し幸せを言ひをり病まざれば幸はせ知らぬ我にあらむか
耳をもつ目をもつ幸せ数ふれば万の幸せもつにあらむか

白き粉を列なし蟻の運べるを踏みたき心兆してをりぬ
同じ言葉くり返しては笑ひゐるそのすこやかに居酒屋ありぬ
玄関にせはしく動く蟻のゐて常より早き歩みとなりぬ

村の神社　三首

埃積む中に神の名書かれあり時を距てて古人に向かう
百度石と刻まる石も傾きぬ落葉めぐりて見る人のなく
村当番ありて時折覗くのみ童等遊びて神の名知らず

道の辺に猫うずくまり行き過ぎて振り向き見たる眼の合ひぬ
種子被ぎ草芽生えゐて育ちゐるものに親しき歩みとなりぬ
夏草の猛き間に刈られゐて芽吹ける淡きみどりありたり
雨長き後に照りたるひと日にて布団を乾せる屋根の並びぬ
生れたる蟷螂が細き斧構ふそのさびしさに歩み返しぬ
夜のしじま破りて電話の鳴り響きまがごとか知れぬ心構へぬ
若き等は犬と並びて走りをり我は引かれて後より歩む
雨止みし濡る舗道の暮れ来たり沿ふ家並の灯り映しぬ

忽然と朝顔の花芽今朝ありて化すとふものを我は見てをり
何処より来れる花と咲く見れば我に目のあることの不思議さ
仰向けになりて瞼を閉ぢてをり憂ひなき顔に剃られてをらん
口開けて男が昼を寝てをり愚かを人の原型として
刈られたる草の芽を吹く畦ありて稚きものに触れつつ歩む
過去を捨てる生き態少し持ち得しかこはばる相手の顔と向ひぬ
熟したるトマトが畑に並びゐて腐る過程を具さに見せぬ
炎昼を行ける苦しさ分ちゐてみみずは道の半ばを過ぎぬ
夕蜘蛛を怖れし祖母の目のやにのふと顕ち来り窓暮れゆきぬ
鉢巻を締めて叫べる男の前人に食はるる魚の並びぬ
朝市の風の流るる台の上小鰺は黒き目を並べたり
かすかなる呼吸に命つなぎつつ我は眠りに入らんとする
頸太く陽に向きて咲くひまわりと今日生きるべき声をかけ合ふ
朝市に法蓮草の束売らる土つくままを新鮮として
炎天を稔る恵と稗を抜く老夫はシャツに汗したたらす

円型に樹木を描く額掲ぐ喫茶店にてゆっくりと飲む
明日のあることの不安に老いゆくと学童の横を通り過ぎたり
いつよりか明日は不安となりきたり老斑しるく浮ける手をもつ
大型車通れることの多くなり亀裂入れるは道の傾むく
川べりの草打伏して泥まとひ颱風明けし川のありたり
竹群の青明らかに幹並び冷えたる風の通ひ来りぬ
がま口を開けし少女は千円札たたむ二枚の一つを取りぬ
一羽ゐし枝に一羽の飛び来り撓めるものに飛び立ちゆきぬ
止まりたる雀一羽の重さにて萩は盛んに花ふりこぼす
亡き夫の墓に供ふる花いくつ咲かせて寡婦は一人住みをり
婚席に飾らるるべく培はるカーネーションは色を競へり
屋根直ぐき工場の上をゆるゆると雲の流れて広き視野なり
外面に無数の露を浮かしめてコップの氷溶けてゆきをり
太陽の光り野に満ち柿の実の尻つぶらかに育ち来りぬ
照り出でて光りと影の野となるを眺めをりしが瞳疲れぬ
旬日に死すべく生れ来し蟬の鳴く声谷を渡りゆきをり
知らざれば死などはあらぬ蝶々の花より花へ渡りゆきをり
鉄腕をもたざりしかばほほ笑みて肯きて一代過ごし来りぬ

悟りとふ文字　八首

悟りとふ文字に逢ひしは小学校六年生のときにてありき
悟りとふ文字読みしとき電光の明るきものが胸を走りぬ
悟りとふ文字より放つ電光の其の後の我の生きを定めぬ
明光は常に苦悩と共にあり他(ほか)より見えぬものにてありき
俗事みな我に価値なきものにして指差し人は笑ひを向けぬ
俗事より背向ける我に父母は困惑しぬと今にておもふ
自転車に三田の禅門訪ねゆき幾月も経ず連れ戻されき
戦ひの背のうに西田幾多郎の本潜ませぬ解り得ざりき
使はむと出しきてナイフの錆をりぬ常は何処にあるかを知らず
北に向き走れる朝の雲黒く出でゆく今日の心構へる
つばくろのむくろが庭に落ちをりて海原越ゆるからだ小さし

たやすくに肯くくせを我のもち其の後のおもひたやすくあらず
ひるがへり窓を過ぎゆくつばくろよ我も越ゆべき海原をもつ

電車　六首

白き線引かれてありて電車待つ人の並べる後に従ふ
旅の宿不倫の記事の雑誌等の広告眺め電車を待ちぬ
満員の電車が来りなだれ乗る人に押されて詰め込められぬ
ひしめける人の間を吊皮にすがれのみに立ちてをりたり
後より押さるるままに電車降り出口と書かれし方に歩みぬ
大勢の中の一人に生きゐるとつくづく知りて出口に向かふ
ひと月に百数十首の撰すると藤木千恵子は説き去り止まず
雨止みし稲の青葉をそよがせて一人に清しき風入り来たる
窓ガラスを流るる雨滴の光り増し雲の分れて白くなり来ぬ
窓開けて雨の上みたる冷えし風稲葉渡りて額に及びぬ
窓前を一羽のつばめ過ぎゆけり即ち我の瞳締まりぬ
さよならと言ひたる後を玄関にながく立ちゐて久しぶりなり
厚き葉となりし木蔭の幽暗に入りて瞳の安らぎゆきぬ
穂肥にと袋持ち来し男にて炎昼にゴムのズボンをはきぬ
巾広きズボンをはきて肩ゆすり昼を並びて男の行きぬ
清濁を併せて呑むという言葉今の政界に要らなくなりぬ
訪ねくる人亦ありと老い来ては人の心を量るに疲る
晩秋には残り少なき蛙にて生れしいのち畦に飛び交ふ
群がりておたまじゃくしの泳ぎゐしがいくばく蛙となりて跳びをり
ひざの力失せたる我と僅かなる傾斜をなせる坂を登りぬ
袋携げし女屈みて去りし後もの焼く煙がのぼり初めぬ

不燃ごみ監視当番　五首

新しきガラス食器の捨てられて老女等幾度も指差し合ひぬ
大きなる欠けざる皿の捨てあるに移る世代を語り合ひをり
使へるか知れぬと蓄めて置きたりとガラスの板を抱へて来たる
新しいのにと移る世代を嘆く声抗議をなさん力をもたず
欠けしものばかりを出して捨てゐるは白髪混る女等にして

天　女　　三首

美しき女を天に泳がせしいにしえ人の心を愛す

薄衣を着たる女のししむらのはつかに白ししなやかに伸ぶ

うす衣の風にふくらみ天泳ぐ女自在にししむら伸ばす

残りなき肉の豊かに志功描く天女は円く頬紅を塗る

金属音残りて飛機の過ぎゆきぬ空飛ぶロマンの成りしうつつに

風止みて騒がぬ堀の水となり流るる白き雲を映しぬ

タイヤー焼く煙の風になびきゆき黒くうねれるものは禍しき

太陽の熱き光りに株の殖え稲は見渡す一せいの青

一切か零かを我は撰択す黙してゐるは零を撰びし

傘を差し長靴はきて胡瓜など拵ぎ来し妻は子等に送りぬ

何買うて来たかと老婆問ひかくる田舎のながき隣人として

スレートを切る音鋭くひびきゐて炎昼の屋根に人の蹲まる

走り出でしガソリン店の二人にて一人はガラス拭き初めたり

平和の文字　　三首

平和の文字書店に何時しか消えたるを我は奥歯を噛みつゝ思ふ

変りゆく何を見るべき書店より平和の文字の消えてゆきしを

ナチズムの再び起るドイツの記世界は如何なる動きを見せて

美しく不倫の文字の刷られゐて婦人雑誌の大方掲ぐ

セックスへ大きく傾きゆく雑誌常に滅びの序章にありき

安保とふ闘争ありき忘られてコーヒー店に若き等笑ふ

一杯は喉を越す冷え二杯目のしみじみうまく水を飲み乾す

午後三時切りたる西瓜がつくり来し甘きジュースよ命ありけり

語りゐる己が言葉に激しゆき貧しきかもよ繰返せるは

長雨に乏しき野菜の値上りを言ひつつ腐る胡瓜を捨てる

いち日を打ち伏す様を見たる目を風止む夕の草に置きをり

足を抜く泥の濁りし田の水に老夫の汗の光りて落ちぬ

確なる羽鳴りに蜂の飛び来り雨の止みたる庭明るみぬ

ごみ箱に大きな鴉一羽ゐて詰(なじ)れる眼我と向け合ふ

出でて来ぬ言葉はコーヒー手に取りて相手の先に切出すを待つ
風の吹くままになびける稲の葉の生きてゆくべき姿見てをり
一斉に葉の騒立ちて風吹きぬ一斉なるは我に淋しく
大海原越ゆべき羽根をもちたればつばめは風に逆ひて飛ぶ
マッチの火囲ひて血の透く細き指女は客の煙草に点す
水の音立つる所は魚跳びし圃場整備の後は影見ず
はるかなる灯り点りて今日生きしいのちを我は我に確かむ
頭上げ頭上げゆく稲の葉の風の中なるいのち見てをり
寄り合ひて互の言葉分ち合ふ分ち合ひゆき言葉は生まる
ひさし深く帽子被りて距たりし人等の中を歩みゆきをり
入り来る人に背の向く席ありてそこにて何時もコーヒーを飲む
喫茶店の隅にコーヒー飲み了へて会はねばならぬ呼吸整ふ
雀一羽庭に来りて目を上げぬ動けるものを恋ひてをりたり
童等を率(ひ)きゐる女四五人の明るき声が坂下りゆく
亡き妻を嘆ける歌の切々と流るる水の畔に読みをり

大空に鳶舞ひてをり迷ひなきものの変らぬ速さ保ちて
風止みてしなひし枝の戻りたるその安けきに本を開きぬ
蚊の口目掻きたる爪の伸びゐたり立ちて引出しなどを開きぬ
強く吹く風に伏しては亦直ぐき稲葉に見ゆるいのちありけり
握りゐし抽きたる稗をほうり上げ顔を振ひて汗を払ひぬ
しっぽもつ女描けり解説に女が女描きたりしと
刈払機担ぎし男山に消えやがてエンヂンの音のひびきぬ
菜根譚座右に置くとふ女あり如何なる悩み経て来りしか
若き等の出でてゆきたる山峡の田の荒廃を老人歩む
幸福と強く言ひゐる女あり劣等感を背負ひてきしや
自転車を降りし少女等直ぐき脚並び立たせる一団となる
枯れし花を先に着けたる円ら実が春の光りを受けて輝く
適切な応へ返りし会話にて軽き歩みに帰りゆくなり
ユーモアも混りて応へ返りくるさかしき女と向ひゐるなり
あるだけの枝を撓はせ風吹きぬしなひて生きる樹にてあるべし

つづまりを満さんものは会話にて応へ素直に女の返す
漬物の口に涼しきもの撰び食品店の夏を出で来ぬ
ジュース類瓜類並ぶ夏の店はりはりと鳴る漬物買ひぬ
漬物の一つを出すは我のみに食品店のレヂの賑はふ
薬湯のにほひさやかに飲み乾しぬ老いし命を守るとおもへ
やに取れば血管の浮く目にあるを今日を見るべき顔を洗ひぬ
砕かれし石は鋭き角をもち尖れる黒き影を落しぬ
続く血と言ひけり黒衣連なりて葬りのバスの中に入りゆく
一と月前飲みて語りし友なりき焼香未だ遊戯の如く
風に騒ぐ木の間に遠き山見えて動かぬものに瞳置きたり
入院と聞きしが訃報もたらさる岡本よ少し早いのではないか
花園の中に雑草生えをりて負けてはならぬ青の鮮らし
全てみな暗く映して腐りたる水が眼の如くにありぬ
くれなひの楠一葉わがために晴れし空より贈りくれたり
呼ぶ声は命の限り蟬鳴けり旬日のみを生きるその声

降り止みし庭に雀の下り来り飛翔なりたる鳴く声をもつ
亡き母の一代のかなしみわが知れば一行のみの碑名のさびしさ
燃え残る掃溜の火の小さきが顕ちて昏れゆく夕となりぬ
仰向けにベンチに寝ねて下りてくる青空ありぬ包みて広し
にちにちに出合ふ白鷺逃げて飛ぶ我との距離の短かくなりぬ
履き変へし左右の下駄しばらくは拒む応へを返してゐたり
亡き母の悲しみの量ほど碑銘あれ一行のみが石に刻まる
大きなる木蔭の石に腰下ろし先ずははるかな山に目を置く
炎昼を走り来りし童等は木蔭の石に坐すを争ふ
石に腰かくるを争ふために来し童か暫しに炎天に出る
炎上げ燃えたる薪はしづかなる灰となりしが散りてゆきたり
大空をいろどり開き光りつつ散りゆく終りを花火はもちぬ
残りなくいろどり開き燃えつきて花火は闇に消えてゆきたり
夜の空に開きし花火の消ゆるとき竟のあり処は闇と思ひぬ
血族のつながる涙流しつつ黒き喪服の列連なりぬ

炎なす夏の陽差しに真向ひて咲くひまわりに姿勢を合はす
雑踏の一人となりて行先に着くことのみの思ひとなりぬ

空缶ごみの当番　三首

戸を出でて帽子をとりに引き返す空缶ごみの当番として
音立てて空きたる缶の捨てらるる斯くも飲みたるビールやジュース
誰も皆袋に空缶溢れしむ渇きを医やす斯く豊かにて
遊びゐる童の声の聞えきて我はいつより一人を好む
窓に入る涼しき風も机に置く原稿用紙を乱せば閉ぢぬ
この辺は有難いねえ道南の地震をテレビに見居る人等は
朝の窓開きて見ゆる稲の青朝朝に見て青限りなし

夏祭　八首

車より藍の浴衣の少女等の降りてひしめく人群となる
夕風は頬にやさしくひしめける瞳あつめて花火上げらる
ひろがれる緑の花火その中に赤き花火がひろがりゆきぬ
次々と花火上げられ夜の空は三つの重なるいろどりとなる
大きなる花火が開きひろがりて爆ける音が空を震はす
ひろがれる花火見てゐし童等はやがて露店の前を廻りぬ
われ等にも幼き時のありたりき露店の灯りに金魚ひしめく
親の手を引っ張りをりし童にて大き綿菓子ねぶりつつ来る
緑蔭に生れたる風は野に遊び蛇は育ちし皮を脱ぎたり
行き詰る思ひはペンをかたはらに置きて煎餅摘み上げたり
胸半ば露はに酒を注ぎくれて罪美しく夜更けてゆく
艶をもつくれなひとなり散り落し楠の葉は一つを拾ふ
白刃のひらめきもちて電光はガラスの窓を次次襲ふ
殺意ふと呼び起されて一匹の蠅が障子を飛び立ちゆきぬ
灯を消してわれの姿も共に消え窓に雨降る音のありたり
四日間に二人のつくりしごみにして一輪車の上に積上ぐ
青竹を艶もち刷りし美術缶潰し捨つべく槌ふり上げる
ごみ箱に集積のごみ溢れゐて近代産業はこれが支ふる
飲む水が汗に出ずるを拭ひ了へ帰り来りし腰を下ろしぬ

年毎に老樹は高き秀を成すを目覚めし夜半に思ひてゐたり
窓を打つ風雨の音の募りくるつばめは既に海越えたりや
花着けし時は卓上に賞でたりき今軒下に枯れかけてをる
めぐりゐる蜂がこぼせる萩の花あえかにあかき山路のつづく
胸に当て鏡に映し見てゐたる女は別の服をとりたり
ひしめきて歩める群とガラス一つ距てて事務とる人等俯く
とりどりの干物あらぬさびしさに細く雨降るアパートありぬ
道の上に道重なりてどの道も車ひしめき街はありたり
足の裏ほてる靴脱ぎ喫茶店の冷房利きし椅子に凭れぬ
ひざ上のししむら白く乙女等の歩める街に出でてきたりぬ

モデルの女　四首

デザインをされし姿態の動きにてモデルは次々現はれて去る
尖端を粧ほふモデルの上ぐる顔デザインされし誇り見てをり
設計をされたままの動作にてモデルは服の裾を上げたり
軽やかなターンもデザインされてゐて裾翻へしモデル去りゆく
はがれたる爪の痛みを人の問ふ我の痛みは我のみによし
両側に壁立てられし車道にて見えざるものを瞳疎みぬ
窓のガラス拭ひて展く視野となりはるかな空に鳶舞ひをりぬ
降る雨に窓のガラスの曇り来てくるしき我の瞳となりぬ
盛り上り花園に花咲きゐるを病める下葉にわが目の向かふ
窓のガラス伝ひて流るる雨のまま歪める庭の木木となりたり
腰掛の下に落ちたるボールペン拾はんとして太り過ぎたり
脚の腫れ手の甲の腫れの癒へざるを本を読むべき励ましとする
赤き服胸に当てたる女にて自足の笑みを鏡に映す
色赤きシャツ着るべしと買ひくるる老いとシャツとは関り無きを
川底の沈める瓶に魚の居て出で得ぬものの鱗光らす
玉葱の葉の養へる濃きみどり媼はひざを突きて草ひく
犬は鼻を草の根につけ我は目を真澄に向けてしばらく休む
緋の鯉の雨紋に色を散らしゆき幾匹泳ぐ堀のありたり
濡れて来て緑を透かす若き葉の雨降りたれば雨の明るさ

みどり子の便を綺麗と言ひ切りぬ医師となりたる吾子利路の
緑の斑シャツに若葉の落しゐて過ぎし齢に還らんとする
そそり立つホテルの裏に屋根錆びし低き住家のありて明けゆく
ふかぶかと頭下げられ戸を開けて後は他者なる旅館を出でぬ
頂と裾とを霧の分つとき山おごそかにそびえ立ちたり
隣席に女人の坐り鞄より甘栗出さんことをつつしむ
晴れわたる空となりきて天心の瞳届かぬものを仰ぎぬ
きんぽうげたんぽぽの花咲き満ちて我も陽炎にゆれゐるひとつ
大黄の秀の伸び切りて風にゆれ春の盛りは過ぎゆくらしき
自分等が勝手に噂を作り出し打消す我を疑ひをりぬ
咲く花は一日にしてたんぽぽの金色散らす草道となる
車窓には何れの景も過ぎ去りて我に還らん瞼閉ぢたり
朝凪の水の面のあきらかに映せるものに歩み寄りたり
時折に羽根を振ひて水弾き雨降る中に小鳥啄ばむ
一夜経しくれなひ増して窓に置くかにサボテンの蒼揃ひぬ

汗ばめる春の陽差しとなり来り池に牛蛙の今日より鳴きぬ
ひしの葉の池の面に見え初めて堤登りし背の汗ばみぬ
夏草の秀の伸びきりて下葉枯れ吹きくる風は冷えをもちたり
曼珠沙華紅く咲きゐる原冷えて秋の光りはすみとほりたり
電線をめぐらす間に晴れし空見えて掲げる青限りなし
うらうらと秋の光りの亘りゐて尾花は赤き穂を揃へたり
鉄条網張りて囲へる空地あり互に容(ゆる)さぬものを人持つ
照り出でて黄熟の稲一斉に輝き渡りわが村はあり
後よりビールが来り隣より裂いかくれて旅の昼餉は
どのビルも非常階段つけられて我に危く街はありたり
宿る旅は商ひ廃めて四年ぶり防府の駅を歩み出でたり
鎌売りに幾度通りしこの辺り新しき家建ち思ひ出還らず
細く長く幹の伸びたる木となりて深き谷間に光り恋ひたり
東大寺にゆかりをもつといふのみに傍への人と語り合ひをり
大きなる珠数を廻して経唱ふ声の次第に高まり来る

たたきゐる大鼓のテンポ早まりて唱ふる経の堂に満ちゆく

誦経する声は一つに和してゆき法悦帯びる顔となりきぬ

朝霧は動き初めて山すその木木うすずみに現れきたる

東大寺用材運びし佐波川の上流は岩のせめぎ合ひをり

せめぎ合ふ岩を拓きて堰作り巨きなる木を流し運びし

巨大なる用材伐りし峡谷の労苦を石に刻みて遺す

説明をされても不思議に用材を運びし佐波川流の細し

さしわたし五尺長さ十文の用材となるが群れて生えゐし

不屈なる魂もつは斯るかと重源像に真向ひて立つ

酷使せし人等も後を讃えゐる重源像をしばし仰ぎぬ

石段を登りし上に藁葺の月輪寺端然のたたずまひもつ

入組みて構へし堂宇見て来たる目に藁葺のさやに立ちたり

たたなはる山次々と展けゆきバスは峠を越えたるらしき

起臥ここに暫く本を読みゐたき思ひに寺の閑寂は見る

岩風呂はかまど作りて内側に人の坐らん席敷きたり

病医す風呂は焚火の残熱に汗を流さん仕組にありし

谷登る棚日なべてに稲植ゑてこの山奥の人等営む

坑道は暗き口開け地中深く働く人等入りてゆきにし

カンテラの灯す範囲を視野としてのみと鎚とに生きてゐたりし

朝顔のふくらむ莟を闇覆ふはるかな母胎にわが帰るべく

首に指当てて揉みつつ細きかな思考に疲れし頭を支ふ

幼等の笑へる声の聞えきて窓よりカレーのにほひ流るる

爪青く少女塗りをり今日ひと日内に棲はす小悪魔として

老斑のしるく浮きたる手をもてば読まねばならぬ書かねばならぬ

読まざりし過ぎたる日日の償ひの瞳を並ぶ書物に向けぬ

傾きし日差しに風の冷えを増し遊びてをりし子等も帰りぬ

ひしめきて茂りし草の枯れ沈み水平らかに山を映せり

蛙等は土に潜みて刈株の曝れしに白く冬の日の照る

草の枯れ沈みし水の平らにて冬は乱せる魚影を見ず

白鳥は影を乱さず泳ぎゆき今日は風なき冬のしづけさ

亘る陽に凍てたる土のゆるびゆきこの下万の虫の潜めり
幾度も車のミラーに突き当りせきれいは映る己れを恋ひぬ
夜の街に雪の降りたり電飾に赤き雪青き雪のふりたり
写りゐる池の面の森影は波の起伏のままに歪めり
雲雀二羽いつもここより走り出ぬ野焼なされて灰吹れをり
飛び立ちし二羽のかけすは鳴き立てて犬と吾との上を廻りぬ
泥足に喜ぶ犬よ汚るれば俺が文句を聞かねばならぬ

野　焼　　五首

冬畦の枯草焼くは村人の行事にありき春を希ひき
畦焼の布令が廻りて家毎に一人が出でて草を焼きにし
去年の草焼きて新た萠え希ふ古き祈りの炎の弾く
春となる日差しを呼びて野焼する炎は天に向ひゆきたり
野焼せし跡くろぐろと畦展け新草生ふべき地に日の差す
音立てて西風（にし）に枯草なびきゆき冬は曝れたる光りの白し
刈取機通はむ畦の草刈られ稲穂は熟れて垂れて来りぬ
ごみ箱に二羽の鴉が降り来り己が胃腑へと啄みはじむ
箱に乗り空へ吊られてゆく二人ペンキの缶を携げて立ちたり
シャツの言葉或はあるか若者等異なる色に通りすぎたり
風の言葉草の言葉の中歩み人の言葉を拒みてゐたり
風紋は形を変へゆき砂歩むわが足跡も半ば消えたり
爆音を立てて走れる若者の爆音闇に消えてゆきたり
小魚の集ひて黒きをりをりに腹の光りて冬の川あり
激しくる言葉に青すじふくらめる男の額を我は見てをり
激しくる言葉が青すじ立たしめて立つ青すじに言葉激しぬ
祝はれてゐるかも知れぬ散華して止まざる萩の山路通へり
夕闇の暗きに犬の吠え立つを人も昔は尾をもちゐたり
朝の窓開けて入りくる風冷えて葉ずれの音の固くなり来ぬ
鮮しき造花を飾る喫茶店オーバーの襟立てて入り来ぬ
沫立ち雨の降りたる朝明けて秋の冷えもつ風の入り来ぬ
波打ちて光の渡り稲の穂は実のふくらみを調へきたる

まだ出るか知れぬくしゃみに暫し経て素直な我となりてをりたり
鞄置き眼鏡外して汗を拭きセールスマンは名刺を出しぬ
水面を乱して小さき黒きものもぐるは鳰の生れたるらし
晴れ渡る空となりきて繁る樹の光りと影に夏山ふかし
横薙ぎの煙いつしか直ぐく立ち秋の光りの原に亘りぬ
冷房に窓開けざりし夏過ぎて金魚は堀に生きてをりたり
千の露葉末に結びしたたらせふるとなき雨朝よりつづく
衰退の焦りまざまざ共産党糾弾のビラ今日も配りぬ
民衆のよきことのみが載れるビラよきことのみがあるを信ぜず
ほそほそと降りゐる雨に濡れ来たり若葉透きたる庭となりたり
供花の種落ちたるらしも鶏頭の墓石めぐり緋のきはまりぬ
菊の花供へおはりて新しき彼岸の墓に光り渡りぬ
拭ひおへおごそかに立つ石塔の頂ゆ水を灌ぎまひらす
爪の色変へて向はんいち日か女塗り了へ笑みをふふみぬ
これのみの変化に充さる女かと爪を塗りゐる女見てをり
窓に差す陽の届きゐるひとところたたみの蓄め し温とさのあり

黄門劇　四首

印籠を上ぐれば人等伏しゆくその痛快を否み観てをり
黄門の一語に悪者伏するを肯なふ心のあれば怖るる
己が悪を怖るるならず黄門を恐れて人等平伏したり
黄門の印籠欲ししと言ひ合ふをわれは無き世をよろこびとする
厚き葉のつくれる蔭のすずしさもしばに出でぬ一人にあれば
雨の中パンダの玩具捨てありて沫打ちゐる顔あどけなし
放屁せしわれを人等の笑ひをり我も一緒になりて笑ひぬ
犬は肉われらは野菜朝食が厨の台に調へられる

歌集 向日葵

吟詠旅行

小野市住吉町
長谷川 利春

苔生ふる幹の崖より垂れ下がり冷えたる空気かすかに動く

右に谷左に崖の道細く渡れる風の冷えを増し来ぬ

苔生ふる木木の梢をそよがせて風は深山の冷えを伴ふ

山坂を登りて増しくる冷えのあり小紫博子霊気を語る

滝に入る道に掲げし門額の読み難なるは口口にして

山の道登り来りて高く立つ断崖沫く水したたらす

岩をめくりささ蟹取りし井上徳二笑へる声を谷にひびかす

山深き滝に祠の建ちてをり高きより落つる水は拝まむ

岩山に生えゐる木木の幹細くわづかなる葉を木末に掲ぐ

みどり透く葉にふり仰ぎ日の光りさえぎる山の裏陰ふかし

笑はさるることの楽しく滝を背に二枚の記念写真をとりぬ

円らかに大きな岩を研ぐ流れ古りし時間に吾は立ちたり

巨きなる岩が囲みて淵をなし水の底ひは青さ極る

ときながき流れが研ぎし巨きなる岩の円きは腰を掛けゆく

滑かに流れが研きし時のたり岩のはだへにてのひら当てぬ

人間を微小に立たせ巨きなる岩円らかに研ぎし時あり

護れるは敵の手勢語はむ術なき日日に山越えたまふ

幾山河越えて小さき平あり後醍醐帝の休まれしところ

たたなはる山の間に平あり一夜の輦御駐めたまひし

山坂を越え来し輦御にちにちに削られたまひし御心ならむ

朝明けてしたたためられし十字の詩湧きしは笑みか涙なりしか

照り出でて緑輝く山なみを時に雲影ゆるゆるわたる

樹の蔭にベンチ幾つか並びゐて辨当食ふべき腰を下しぬ

おのづから内藤先生井上徳二酒を好めるものの集ひぬ

歌作る心に集ひ見ゆるもの全て笑ひを生みつつあゆむ

分ち合ふ笑ひは疲るる脚にも生れ吟行旅行の坂道登る

きざまれて樹肌に並ぶ名の二つ過ぎたる時の拡がりをもつ

高原の風の冷えゐて秋草は色やや浅き花を咲かせぬ

肩並べ木蔭の冷ゆる山を行く交はす言葉に見るは新し

山脈をゆるゆるわたる雲影は車のシートに凭れて眺む

はしがき

歌書公害という言葉があるらしい。実際読みたくない本を読まされるのは酒を無理強いされるようなものである。公害を撒きちらすのもと思って今年は止めようかと思った。併し八月二日に書きかけた小論が完ったし、本年は特に暑いのでままよと例年の如く歌作に入った。

八月十八日に数えると四百五十首ばかりあった。それと緑の斑以後に作ったのが二百首ばかりあったので、計六百五十首程の中から五百余首を清書して創造社にお願いすることにした。余りたくさん作って公害を大ならしめることを恐れたのである。読んでやろうと思われた方は読んでいただきたい。

平成六年八月二十三日

長谷川　利　春

美しき緑にわかめ戻されてはりはりと鳴る胡瓜と食べる
今日降ればよみがへるかと芯葉のみ青さを保つ傍へすぎつつ

夕陽に魚跳ぶ　三首

夕茜差しきて乱るる水面(おもて)魚はひらめき跳びはじめたり
茜差す光りを招く御手として魚(さかな)のしげし跳び継き止まず
ひたすらに魚跳びたり茜差す光りは空にわたりゆきたり
旱天に葉の大方は枯れて落ちキューイは小さき実を並べたり
累ねゐし落葉も風吹く一夜過ぎ乾ける土の露はにありぬ
乾きたる泥の割れゐて反れたるが砕ける音に歩みゆきつつ

幼の砂遊び　六首

連れゐるに倦みて来たれば遊べよと砂置く所に幼を放す
摑みては開きて砂を落しゆくその単純をくりかへしをり
集めては両手に砂を散らしゆく或はいのちの相(すがた)か知れぬ
手を入れて動き廻せる砂山の自在にあれば帰ると言はず
亦くると賺して服と手を払ひ漸く砂場離れしめたり
くり返す日々に過ぎると思ほへば幼なの単純おろそかならず

コーヒーを飲むと掛けたり手を伸ばせば届く範囲に汝はありぬ
くしゃみして見廻す四囲(あたり)変らざる様に普断の顔立ちかへる
作歌にも読書にも倦み坐りゐしがかたはらに置く煎餅とりぬ
振り返り見るは越え来し山脈に日の差し照りて動かざりけり
ひまわりの太き花くび深く曲り重し多くの実を結べるは
戸を開けてわっと襲へる炎熱に汗絞らるる歩みなりけり
およぎゐるしおたまじゃくしを食べ尽す白鷺か畦に此頃見えず
赤土の赤きを見れば戦争に死にてゆきたる友一人あり
木の先ははぐくみ止まず空洞に朽ちてゆく木を見上げてをれば
名を呼ばれ相手の名前を忘れをりしらしらとして立てる暫らく
走馬燈の如く頭のめぐりつつ目の前の男思ひ出されぬ
脂濃き土用の鰻を食ひたれば力つくさむ残れるいのち
夕光は茜を差して渡りくるふり向く勿れ残生少なし
茜差す夕べの光りひたすらに己れ輝き落ちてゆくなり

争ひにルールのあれば碁を打ちて帰れる人のさはやかにして
地に向ける瞳の安く公園の木の下道を歩み過ぎたり
照り来り我は片側の闇を見る一本の木に凭りてをりたり

小野祭に人行く　五首

五六発空に爆でたる音聞えこれより祭初まると告ぐ
切れるなく車の続き祭へと向ふ少女は粧ひゐたり
赤き着物着たる少女の早む足祭へ向ふ人連なりぬ
子を抱く男の横に悠々と女歩みて人群続く
少し動き長く止まりて車行く蜿々として連なりてをり
鎖引き後の肢に立上り散歩へ犬は我を迎ふる

ひしの葉の重なり合ひて水見えず猛く照りたる日差しのつづく
大きなる空洞となり朽ちてゆく椎の木の下椎の木の生ふ

孫等とスーパーマーケットに行く　十二首

整然と並べられたる商品に灯り輝きスーパーはあり
ともすれば孫の姿の見えずなりスーパーマーケット人の混合ふ
店内に入りたる孫は駆け出しぬ何求むるといふにはあらず
玩具店の全部欲しいと言ひゐつつながくかかりて一つ撰びぬ
エスカレーターを駆けて登れる孫の後つきゆきゐしが腰を下しぬ
ぢいちゃんはここにて待つと腰下ろし孫の撰ぶを眺めてをりぬ
子を抱く夫従へ両の手に買物下げて女旺んなり
買へと言ひ手を引きゐし幼寝転びて喚ける声を出しはじめたり
地団太ふみ喚き寝転ぶ幼児の一代ひそまむ声にあるべし
声挙げて足ばたつかせ寝転びし幼きいのちも承けて来りぬ
買へと言ひわめき寝転び動かぬも人が伝へて来たりし一つ
手も交え笑ひ語りてゐたりしが食べゐる顔の真剣にして
近づきて赤ばみたるは枯るるらし垣に炎暑の長かりしかな
いけ垣のところどころの枯れゐるは土少なきに植はりたるらし
一斉に空に向かひて頭上げ爆ぜし花火はひろがりゆけり

露　店　六首

水槽に焦点当てて灯もされて金魚は赤き尾びれを振ふ

綿菓子も売られてをりて幼なわが欲せし如くふくらみてゆく

烏賊を焼く匂ひ香ばしく流れ来て幼なは親の指を引きをり

焼烏賊を歯に裂き唇濡らしたる少女もをりて人の群れたり

眺めては金魚の袋もちゐるにわれは来たらん死を思ひをり

破れ易き金魚をすくふ紙の網われもすくはん誘ひをもてり

集まりて買ふとなさざる群の中ながなが男の雄辯つづく

汗少なき歩みとなりて久しぶりに池の堤を登りゆきたり

炎熱に来ざりし池は水蓮の葉の重なりて猛く茂りぬ

考ふることのみ我を充たせると長く生き来て知りたりしかな

ひしの葉の重なり合ひて水を見ず猛く照りたる日差しのつづく

一本の枝のみとなり朽ちてゆく椎の木の下椎の木生ゆる

蟻一匹這ひて崩れし思考など持てばベンチを離れゆきたり

滴たれるところ小さき玉生れ光りて消えて山の道あり

このごろは肥って来たと言はれをりメーター七十一にて止まれ

およぎゐるしおたまじゃくしを食べ尽す白鷺か畦に此頃見えず

盆二日大方寝ねて目のやにの少なくなりし瞳に歩む

こもりゐて歌を作りし二日程何れの時も充つるとおもふ

盆迄と暑さに耐へて来りしが朝の廊下のほてりのつづく

ひんやりと朝の空気の中に立つ幾日ぶりぞ昼は暑しと

体温を越えたる日々の去りたれど弱りし体に歩みの暑し

薬粉の白くまつはる稲田見え早暁音を立てしはここか

脱糞を了へたる後のさはやかに犬は鎖を強く引きたり

朝々を窓より見ゆる裏山の変らぬものは深く宿らむ

納得の行かぬ思ひも痛むなきことにてあれば肯ずきゆきぬ

奪ふ意志乏しく生れ奪はれて生きて来りぬこれからも亦

言ひたるは果すと決めて簡単に肯なふ性をわれのもちたり

働かず気ままに暮らすあんな人死んでもよいと我のことなり

生き切りて我あり死ぬればさよならの一言のみに葬りゆくべし

細き首かしげて水に見入りゐる白鷺鋭きくちばしをもつ

撒水の庭に夕映え渡り来て絞るホースに茜散りゆく

羽根あればおのずから飛ぶなし得ざることを為さむとする事勿れ

己が脚に歩む外なきバス停への道は炎暑にあぶら溶けたり

戸を閉しパンツ一つの我となり帰り来りし汗を拭ひぬ

葉の裏と表は違ふ色をもつはつ夏の山風の吹きゐて

冷房の切れて目覚めし夜半にて夜半の言葉紡ぎゆきたり

大きなる頭を運ぶ尾を振りておたまじゃくしは逃げてゆきたり

寝ころびてペン持ち考へゐたりしが枕によだれ付きて眠りし

上向けて迸る水輝けり水撒くときに二三度すること

平成六年その名止めむ夏の照り灯りに虫の来らざりしと

酒飲むと大きくかぶり食ふ鰻あぶら多きを夏と言ひけり

鰻食ふあぶらに濡れし唇を覚えて熱き酒を飲みゆく

捨てられし包丁にさとく目のゆきてながく刃物をひさぎて生きぬ

鍛冶工ありき　四首

焼入れの温度わずかに違ふるも刃先の色に出でて来りぬ

窓に蓆夏も垂らして焼ける刃の色を見つむる業にてありき

蓆掛け闇なる室に焼く鉄（かね）の赤らむ色を見つめてゐたり

この刃先切味よしと灯にすかし見定めたるも遠く過ぎたり

従（つ）き来よといふ言葉竟に持たざりき内に見つめるのみに生きたり

球根は袋の中にしまはれて鉢植の鉢重ね置かれぬ

さはさはと音立て稲葉鳴り合ひて秋に向へる風吹き来たる

緑濃く稲葉の伸びて光り差しうねり大きく風吹き過ぐる

稲の葉に光り走らせて風の吹き飛びし帽子を犬と追ひゆく

鳶の子は巣立ちたるらし護られて空に小さき弧を描きゆく

ひとところ鳶群れてをり小さなる弧円に飛べる幾匹もゐて

しずかなる老年ならんと思ひしが残るいくばく如何に生きゆく

尖る秀の正しく並ぶ杉山に霧うすれつつ渡りゆきたり

しずくして落ちゐるところ水ゆらぎ底ひの白き石の光りぬ

畚（ふご）に棒とんがショベルに拓きたる田畑も廃り用を了へたり

葉の騒ぎおさまりし後のしずけさに我の顕ち来て夕闇迫る

突然に倒れし人を語りしも四五日にして居酒屋賑はふ

轢死せし犬のめぐりに人集ひ名犬なれば価語らる

カーテンに顔をかくして亦見るを幼笑ひて飽くことのなし

喧燥に生きる臂力をもたざるとベンチに一人凭れてをりぬ

臂力弱く生れ来れば世を離れ己れの内に生きて来りぬ

青雲の昇りてゆくを仰がする幼の瞳またたかずあり

先に居し蟻にてあれど腰かけしベンチに這ふは指にて潰す

夕風の吹きくる方に目を上げて候鳥高く飛び去りゆきぬ

騒ぎたる梢のありて風来る夕一人の瞼閉ぢたり

空見れば空に騒音消えてゆくベンチに掛けて凭れてゐたり

密々と稲葉は原に競ひ合ひ稔りを持たむ緑の濃し

豊作か穫って見なけりゃ分らんと農に生き来し苦しみながし

さはさはと葉鳴りを立てて風にゆれ稲は豊かな稔りを約す

炎熱の陽が傾きて風生れぬひと日の嘆き運びゆくべく

夕闇の迫り来れば鳩よ鳴け口惜しきひと日の過去作りしと

百円で買物をするといふ孫はもらひし金を亦かぞへをり

新聞の気象の欄を先ず開き炎熱の日日三旬越ゆる

生涯を賭けて一人に池堀りしと原の血潮に水流るかな

集ひ寄る白鷺の姿なくなりしことに気付きて稲田の乾く

鎌で刈りし草整然と並べられ一人の男農に老いたり

鎌で刈る老人ありて立止まり近頃見ざる声をかけたり

買物に連れ来し孫は菓子などを出して収めて移りゆきをり

細る葉にトマトはありぬ張りし根の届くかぎりを乾きゆくらし

盆　七首

香を焚き花を供へて経唱ふ祖先の霊を迎ふると来し

われも亦死ぬとおもへば石塔の冷えたるものにてのひら当てぬ

清めたる石に灌ぎてゆける水刻む碑名のしずかに濡れて

石塔につながる祖先記さるる名前は伝へし言葉の住まふ

何の墓も香煙ゆらぎ花飾り祖先の霊を村人迎ふ

亡き夫の墓に供ふと養ひて祀らる花の色豊かなり

祖先の霊帰り留まる盆二日家に居りたり蒲団に寝ねて

道標崩れてあればはるかなる人の立てたる声のかなしさ
蟻が噛みし痒き背中に我ありて眠らざる目に本を開きぬ

病院　十六首

午後二時と書かれし予約の紙渡し待合室に順番を待つ
井上生子待合室に笑ひつつ我を見てをり傍に掛く
病もつ人等の深き沈黙も狎れて持ち来し本を開きぬ
病状を語り合ひゐる低き声ときに笑ひて長く病むらし
黙す人目を閉したる人等居て皆それぞれの病を抱く
突然に我を呼ぶ声しずかなる空気乱して知る人来る
診察の順読み上ぐるナースの声私語の止まりて耳の鋭し
呼ばれたる人順々に立ちゆきてまばらな室に待つ我となる
「よう」「よう」と声掛け合ひて友来り共に病みゐる笑ひを交す
病むものを常となしたる病院の交せる声の暗さをもたず
知る人の病をもちて近づくを互に満ちしほゝえみうかぶ
診察のシャツを脱ぎつつ如何ならん病状となる我にてありや
何ごとも知ると思へるわが体何も知らざる体にありて
血圧を計りおへたる医師の顔笑み含めるを先ずは見てとる
閻魔のみ知ると言ひつつ血圧の数値書かるを我は見てをり
胃カメラを飲んでみるかと言はるるをあれはまずいと先に伸しぬ

朝　三首

目が覚めて差しくる光りの新しく一夜寝ねたる手足を伸ばす
力ある声に雀の鳴き交し障子に昇る日の差し来たる
雀等は既に鳴きをり樹々移る一夜を経たる新しき声
水の冷えふふめる風の吹き来たり小川に沿える細き径行く
池の水渡り来れる風冷えぬ炎暑の道を歩み来れり
水蓮の円葉光りて波にゆれ吹きくる風の汗を収めぬ
計算器指に押す術(すべ)教へたる孫は度々室に入りくる
雨といふ叫べる声に見上げしがぱらぱらと降り日照りのつづく
道標(みちしるべ)文字の崩れて立ちたればわれの歩みも過去となりゆく
育毛と書きしスプレー吹付けつつ希ひのなしと言ひたるは嘘

蓮ものに家康悩むと書きたれば蟻に嚙まれしわが面白きかな

少　年　三首

並びゐて水に礫を投げ合へる少年己が臂力を愛す

届きたる礫を己が範囲とし少年乱せし水を眺むる

石投げて拡がる波紋とひろがりて少年ひそかな笑みをもちたり

信号は赤き自愛に輝けり通り過ぐべき歩みを止む

信号は赤き恍惚少年の竟に抜けざるわが歩みゆく

一滴の油が水に落ちゆきてああ広きかなひろがりゆける

幾匹の蟻がズボンを登りきて読みゐし涼しき木蔭を去りぬ

目を凝らし再び眺めて彼なりき歳月頭を白く変へたり

源氏を読む会　九首

来よといふ電話のありて出でてゆく行く先もてる歩み確かに

耳底に来よ言ひたる言葉もちバス停迄を歩みゆくかな

月々に見たる顔なれバス停へ会はむ歩みの少しく早し

珍しき話の無ければほほえみを交さん歩みのおのづと早し

読まざるは己れのみなる読む会の少しおくるる時間に出づる

声立てて笑へる声に迎へられ内藤先生不在に怯む

ひと月に一回出会ふ笑み交し読みゐる会の席に坐りぬ

読む声に文字を追ひゆき不審など思へばたちまち何処か分らず

コーヒーを飲みて別るを倣ひとし既に幾年席に連なる

街に入りバスは音立てゆれ初むる工事に道を堀ること多し

いずこにか流るる水の音聞え木蔭の深き山の静けさ

遠き世の声を伝へて石立てり道標ここに道の岐るる

散歩する時間となれば犬の呼ぶ鳴きゐる声の聞えて来たる

めす犬の通れば低き声に鳴きおすには吠えてつながれてをり

中心に細る渦紋の美しくでんでん虫は木の幹這ひぬ

寝て見れば重量の無きもののごと人等の来り歩み去りゆく

水の減る魚を獲ると集ひたる鳥の乱れし足跡ありぬ

日に干せしズボンに蜂のありしこと過ぎるひと日の運命にして

毒をもつはげしき色に蜂の飛び炎熱は昼の頭蓋を灼きぬ

棚行に来りし僧は時計見てそそくさとして帰りゆきたり
美しき脚もつ女透き見ゆる黒きズボンに歩み運びぬ
訪ふ人の少なくなりて門に鳴るベルにも少し怯みもちきぬ
捨てられしガラス器惜しみ立止まり思ひ出多く戦中にもつ
炎天に葉の枯れて落ちひしめきて実れるキューイの未だ小さし
人の目と合はぬ安けさ地に這へる蟻幾匹の動き見てをり
石を蹴るも脚よりいのち溢るると少年の後をつきてゆきつつ
死ぬるべく生れ来ればべんけいの立ちたるままの姿羨しも
迸ばしる蛇口の水に腕洗ひ頭よりかけ呑みて去りたり
右やしろ左じょうどじと道標文字のくずれて田の中に立つ
本を閉ぢ涼しき木蔭も立去りぬ蟻幾匹を殺したる後
争はぬ歩みに行ける人のゐて閉せし本を再び開く
投げつけるごとくベンチに腰下し帽子を脱ぎて汗を拭ひぬ
帽子脱ぎ目に入る汗を先ず拭ひボタン外し腋迄拭ふ
汗に濡れしシャツべったりとはりつきてバスの冷房に冷えて来りぬ
集れば居らざるものの悪口を言ひて村人結びの固し
しなやかに猫は屋根より跳び降りぬ少年なりしわが日はるかに
瀬に躍る鮠に躍りし少年のはるかなる日に川流れゆく
外燈に集ひし虫は舞ひ初めぬ狂ひて朝に死なむいのちは
走るべき世界もたねばつながれし犬は僅に目を動かしぬ
表情を変へざる顔にテレビ見て幼は友に心はしらす
うとましさ丸出しにして返事するを気付かぬ対手の話聞きをり
昨日より今日は暑しと言ひ重ぬ愚は知りつつ亦も出したり
土に這ふ蟻幾匹に目を移し疎む話の終るを待ちぬ
自生せし朝顔の花咲き出でて午後の三時に移る時あり
ちり箱にちり無きことのしづかにて近くのベンチに腰を下しぬ
本を閉じ瞼を閉ぢて凭れゆくしばらく風に委ねをりたし
飛び降りて亦樹に還る雀ゐて少し近くに寄るべくなりぬ
しんかんと樹の幹ありぬ道に背を向けてベンチに掛けたる時に
足を這ふ蟻をあはてて潰したり聖者の如く石に掛けゐて

大花火が山の彼方に上るとき賑ひ持たねばならぬ人なり
ひまわりの燃ゆる黄の花天に咲き生きねばならぬ声降りくる
この席より木蓮の白き花賞でぬ伐られてダンプが出入りなしをり
曇りきて陰影もたぬ景となり何見るとなき瞳に歩む
下の葉は枯れて落ちつつ芽の青く草はひでりの命を保つ
ものなべて萎へたる庭に開きゐるブーゲンビリヤの花赤きかな
平池に大賀蓮咲くと報ずるを忙しからねど去年も見ざりき
言はれたるあほうの言葉思ひ出で竟にあほうと我なれざりし
生涯を思索に生きんと決めてよりほかなる悔は捨てて来りし
蛭に血を吸はしてをりし祖母の肩夫亡く働く肩にてありし
夕陽に歩める影の長く伸び果てなる闇と結びてゐたり
やうやくにバスに間の合ふ息の切れかくす術なく老いて来りぬ
影長く落つる夕日に伸びてゆく混迷の地混迷の胸
誘ふ声うるさしうるさきもののなき淋しさなどに思ひ及びつ
中北明子居らなくなりて笑ひ顔見えざる室に入ること少なし
混迷の胸もつ故に鳴く鳩の深まる闇に止む事知らず
公園の木々さゆらぎて風来りベンチに背中凭らせゆけり
集ふもの六人なれば机寄せ声の親しき空間作る
腰掛けて直に笑ふ高き声小女は肩をたたき合ひたり
友の来し翌朝にして蒲団よりはみ出し孫のよく眠りゐる
ひまわり園に孫と来てをり貧婪に陽を吸ひ蓄めて大きく開く
犬ちゃんは何うして舌を出すのかと連れ来し幼の問ひの鋭し
つば広きむぎわら帽子を取り出しぬ照りゐる昼の光りの白し
乾く田を見廻りをりし四五人は頭を垂れて別れゆきたり
挙げし手を音立つ迄に打合はせ久方ぶりの握手をなしぬ
首猛きひまわりの花炎なす昼の陽差しに向ひて咲けり

大原美術館　九首

斧かざし木を伐る男の握る指踏む足先の力は眺む
ゴッホ描くひまわりの絵はこれなると長く立ちしが竟に解らぬ
天才が生涯賭けて描きたるひまわりなれば解るはずなし

至り得ぬ我の眼とゴッホ描くひまわりの前を離れゆきつつ

くりかへし近藤美代子の語りたる青目の女の前は止どまる

書き撲るとよりほかには見えぬ抽象画わが目は過去に移りたるらし

セザンヌはこれかと瞠き眺めしが肩を落して次に移りぬ

天分に思ひ及べば一つの画のなりし時間の果なく長し

画の心解らぬままよひたに見て目に温めてもち帰るべし

厚き木の調度に構ふ喫茶店本を読むべく日々通ふ

にちにちに通ひ来れば待ゐしと言ふ声ありてほゝえみ交はす

白く伸びし脚賞めたれば長き服つけて再び出すことのなし

よく冷えし牛乳飲みて書きかけの原稿のある室にもどりぬ

葉先迄登りつめたる尺取は躯回して下りはじめぬ

土を踏む確かな応へ失なへる脚とおぼへつバス停に行く

額より流るる汗の大方は目に入り老ひし歩みを運ぶ

汗拭ひ干したるシャツも大方は乾きて休みし木蔭を出づる

用のなきときに下げゐる手の重さポケットに入れて歩みゆきをり

芽生へるため胚子のありき実るため芽生えのありき秋の風鳴る

実の固くしまり充ちきて茨(さゝ)の枯れ野に団円の時近づきぬ

汗拭ひ稗引く男踞まりぬ幾代累ねて来たる姿に

幾世代伝へ流せる汗なると稗ひく男のあごより落つる

束の間を爆ぜらす花火が展きゐて久方ぶりに家族揃ひぬ

居酒屋　十一首

顔見知り誰か来てゐる居酒屋の心置きなし戸を開きゆく

戸を開けて笑顔を見せる二三人隣りの椅子を指差しくるる

ニュースなど一応語り女へと話題移るを常となしゐて

女へと話移りて声弾みわれは一人の酒を運びぬ

奪ひ合ふ如き言葉に笑ひ合ひ女の話つきるともなし

亦一人はゐり来りて言ひ出せしことに話題は移りゆきたり

刃物研ぐ一日終えて冷酒を一息に飲む喉鳴り語る

仕事了へ帰りに冷酒二三杯飲みて満ちたる日々なると

てらてらと赤く鼻照り頬の照りひと日の疲れにコップ傾く

女のこと言はんが為に酒飲むと一口飲みては置きて語りぬ
日々飲める仲間の話大凡は似てゐて同じ笑ひ声挙ぐ
室の戸を開けて食事を伝へくる久しぶりにて孫の来れり
すこやかに孫は寝息を立てをり一つの屋根に夜を迎へぬ
炎熱に被るヘルメットは灼けあらんガードマンは赤き旗出す
唯黒く焼けたる顔に旗を振るガードマン見ゆ生きねばならぬ
ひげ生やす若き男が工事場の旗を振りゐて不況の長し
工事場の旗に握れる生活もちガードマンは焼けし手を振る
陥へたる蛙呑み込む蛙見えつづまりわれも持つと思ひき
後よりつきくる靴の音聞こゆわれの背中のさびしくあるな
泥白く乾ける溝の底見えて炎暑に草の黄ばみ初めたり
おしぼりの冷えにうなじも拭ひおり歩み来りし道白く照る
断水のニューステレビの報じゐて捨つべき水のグラスに澄みぬ
灌漑を求むる旗の何の田にも立ちゐて雨降る気配のあらず
炎昼の羽根光らせて白鷺は水の減りたる池に集ひぬ
水の減る池に白鷺集ひゐて魚を獲らんくちばし伸ばす
汗拭きて風に曝せる爽快も今日すこやかないのちもつ故
白き柵に日の照り来り人の住む窓は小暗き口を開けたり
おびただしきたたみの蟻を殲滅す日曜のわがガリバー戦記
防除機の轟く音に目を上げて薬粉にかすみ人等の動く
農薬の異臭窓より入りくるをこの中人のはたらきてをり
防除作業終りて窓に虫集ひ稲の葉白く粉をまとひぬ
立山に飲みたる水も売られゐて日本列島水の汚るる
炎昼を溜り水替ふ四五人が立ちをり白く稲田の乾く
ホースより水迸り溜り水替えゐる四五人かたはらに立つ
送水の太きホースが道よぎりときにうねりのふくらみをもつ
花咲きしままに命の枯る希ひカリフラワーを女作れり
花咲けるままに枯らせしカリフラワーのしなびし無残も眺め過ぎゆく
溝の泥白く乾きて底の見え水を欲る旗何の田も立ちぬ
久しぶりに降りたる雨に縒りてゐし葉を開きたる草道となる

暑さにも狎れて来たらし塔尖の抽きゐる空に瞳の向かふ

よく泣ける童にありき子を抱く妻を従へ歩みて来る

松食ひに枯れたる山に風吹きぬ衰亡の譜を運ばんとして

あざあざと赤き斑点ふとらせて毒蛇は夏の森にひそめり

波立ておたまじゃくしの逃げてゆく多くは蛙にならず死ぬるを

炎昼の畦に腰掛く人のあり自が田に入れる水を見守る

音立てて満ちたる水の流れゆく傍へ確かな歩みもちたり

響る水は早苗生ふ田に流れ入り植えたる人等昼を眠れり

踏む径の下を流るる水音のかすかなものに寄りてゆきたり

樋門より出でくる水は噴き上り育つ稲葉の鋭く尖る

トンネルの灰色の壁つづきゐて光り輝き出口のありぬ

削られし土新らしく大きなる山ふた分けに道貫きぬ

怒りもつ声の次第に早くなりこめかみの血筋浮きて来りぬ

流れゐる水の起せる風ありて草の葉先のかすかにふるう

求めゐし菓子食べおへし幼児は昼の暑きを寝息立てをり

ほてりたる空気は地より昇りきてむれたる草の臭ひともなふ

一杯はたちまち汗に噴き出でて後一杯の水飲みて去る

一夜寝し頭の重さにくぼみたる枕の跡を遺して起きぬ

争ひてはつ夏の風入り来り早苗は根付く青さを増しぬ

脚の肉押せばむくみの増しをりぬ炎熱の日々ながく続けり

茜色増して来りし夕陽に蔭ふかまりし草径となる

むくめるは心臓弱りきたるらし炎熱の日日ながくつづきぬ

輝きて白鷺発ちし数十羽杉の青葉を織りつつ渡る

汗が出て汗を冷せる風の吹き夏には夏の顔上げ歩む

炎なす陽の差し来り電線に見えゐるし鳥も影をひそめぬ

かすかなる音立てポストに落ちゆきてわれの言葉はわれを離れぬ

見られたる思ひの無ければはく下駄の欠けたるさまも人の語りぬ

炎熱に乳剤溶ける道となり入道雲の動くともせず

降り止みし林に一つ蟬鳴きて競ふる声の湧きて来りぬ

帰り来し汗を拭ひつこれからの暑さを怖る汗疣のいくつ

音立てて水路に水の流れゐて稲田は育つ葉先揃はす

直(じか)に触るる空気有難し炎昼を帰り来りしシャツ脱ぎ捨てる

ひたと見る運転なせせる目となりて高速道に車乗りたり

キー差せば音立て外るる施錠にて日に幾度か心さやけし

自転車に凭れる如く押してゐし老夫は坂を登りおへたり

赤光に夕べの空の満ちたるを残生我にいくばくかある

金メッキはげれば捨てんと思ひたる時計なりしがまだ動きゐる

朝々に窓より見えて育ちゆく稲と向き合ふ本読む室に

目を凝らし車窓の景を見てゐしが坐席にもたれ瞼閉ぢたり

いづこより来たる芽吹きと問へる時開きゆく葉の限りもあらず

凝らし見る瞳となりてスピードのぐんぐん上る車となりぬ

後へと飛び去る景の速くなり運転する目の鋭さ増しぬ

降り止みし道に溜れる水澄みてしばし足りゐる歩みとなりぬ

たかまりしよべの思ひも一夜過ぎありえし常の一つとなりぬ

すれ違ふのみと思へど一々に心動ける我のありたり

思ひ出の口惜しき声のおのずから出でて来れる過ぎし日をもつ

澄みとほる原となりゐて雨の止み瞳は届く限りを恋ひぬ

大空を飛びゐし鳥の山に消え一人立ちゐる我のありたり

育ちゆく早苗の青き葉の色を朝々にして目に確かむる

幼な日に登りて枝に腰掛けし松も今年の芽をつはらせる

豊かなる水平かに空映し動くとあらず海にそそげり

アンデスの写真いくつを眺めをり未だ知らざるものは輝く

生涯に流す涙の量などを思ひつ無縁仏に立ちぬ

はたらきてこの世支へし人等なると無縁仏の前を過ぎつつ

祀らるも祀られざるも死ゆけば同じとおもふされど無縁仏

無縁仏積まるる前に立てるとき数限りなし形なき死者

豊かなる平らな水のゆるゆると流れの終る河口見てをり

机の上を蜘蛛が這ひをり命もつといへども室の同じは疎む

燃えつきし焚火の後の灰白く吹きくる風に散らばりゆきぬ

燃えつきしものの軽さに灰ありて吹きくる風に行方を知らず

一匹の蠅がなかなか捕へ得ず考へゐたることを忘れぬ
冬長く覆ひし脚の艶をもちショートパンツに歩巾の広し
幾曲り山坂下り平かに雲を映せる池畔に出でぬ
風と木の鳴り合ふ音に耳研ぎて夜の深さにひとり覚めをり
根付きたるものの確に青さ増し早苗は吹きくる風にそよげり
土ふかく伸ばしてゆける根のありと早苗はひと日の青さを増しぬ

婦人服店にて　六首

胸に服当てて鏡に見入りゐる女恍惚の顔をかくさず
胸に当て鏡に写し裏返し女は服にあくことのなし
洋服を撰ぶ女の見詰めゐる眼の光りを不意に怖れぬ
胸に服当てて鏡に見入りゐる我と異なる性を見てをり
服位に輝く目かと胸に当てし鏡の中の女見てをり
洋品店出でし隣は八百屋にて老婆大根下げて出でくる
盛り上る乳房は強張されてゐて頭をすぐく女歩みぬ
隣席の老婆立ちゆきその後に如何なる人の坐すも思ひつ
ごみ箱に昨日のごみを捨て入れて媼きびすを返しゆきたり
耳の垢とり除きつつ斯く悪しき臭ひ放つを体のつくる
代掻の後平かに水の張りつばめは虫獲る身をひるがへす
去年より小さく牡丹の花咲きぬ忘れて草を引かざりしかな
畦草を刈るエンヂンの響き合ひ早苗を植ふる時近ずきぬ
何処迄も音昇りゆき冬晴れの原にパイルの打込まれをり

胚　七首

柿食ふと割かれし種子に白き胚見えて生ふべき樹木を宿す
種子の中胚芽は茎と葉の白く生へくる形を既に備ふる
限りなき過去と未来を宿せると胚あらはなる種子を手に載す
この胚の土に芽生えて育ちゆき実を成らしむることをかしこむ
仰ぎ見る高き象もひそめると種子の中なる白き胚芽は
切られたる胚芽は芽生ふることのなし運命とふをわれは問ひたり
胚のもつ力さまざま思ひしが人の来りてごみ箱に捨つ
ほつほつと芽生えるものを持たざると春の野原を行きて戻りぬ

生毛もつ若き葉群に光り透き生ひゆくものを亦も眺むる

池畔の夕　五首

足もとに寄りくる波の打つ音の顕ちくる夕となりにけるかも
寄せる波返せる波の乱しゐる光りの白く夕昏れゆく
もの全て蒼く昏れゆきすきとふる我となりたる歩みなりけり
畦草は夕の闇に沈みゆき池の面に光り残りぬ
夕闇はものの象を沈めゆきわれは帰らん歩み返しぬ
水通ふ冷えもちゐると瓶に挿すはなびらの肌に触れたるときに
今も尚自己陶酔を越え得ざる我かと歌稿読み返しをり

蝶　二　匹　七首

もつれつつ飛びゐる蝶の鮮かに光りを返す日和なりけり
黄と白に光り乱して返しつつ蝶々二匹は昇りて下る
黄と白にもつれ合ひつつ蝶二匹たはむる命は高く昇りぬ
去りしかと見えたる蝶はかへり来てもつれ合ひては亦飛びゆきぬ
離れては亦もつれ合ふ蝶々の原の光りを飜しつつ
もつれ合ひ高く舞ひゆく蝶二匹狂ふいのちのおのづからにて
生きの日の短かき蝶よもつれ合ひ舞へる姿のはなやかにあれ

刀剣展　七首

飾られてガラスの中に収められる人を斬るべく鍛へし刀は
殺むべき刃（やいば）は光り返しをりもののふこれを魂となす
もののふが魂（たま）となしたる刃の研がれひたすら斬らん光を返す
敵の骨断たん希ひのひたすらに研がれて刀の刃先澄みたり
切っ尖（さき）の鋭きものを陽にかざし恍惚として眺めたりしか
人を斬る刃を差して街中に肩そびやかし歩みゐたりし
刀剣が支配なしたる長き過去祖先は鍬もち営みたりき
幾年を眺めて過ぎし畦の花犬ふぐりとふ名を知りて見る
紅き傘差せる女の歩み来ぬ雨に朝より人を見ざりし
紅き傘差しゐし女も歩み去り窓は朝よりしとしとと雨
我を知るものの一人が死にたりと読みゐる本を閉しゆきたり
目礼を交せしときのほゝえみを保ちもちゐる歩みなりけり

航跡雲　七首

噴き出でて航跡雲の伸びてゆく少年の血の還りくるべく

蒼穹の果なきものを恋ひたりき航跡雲は貫き渡る

英雄を内に棲まはせし若き日よ航跡雲は大空渡る

貫きて生きたることの何ありや航跡雲を見上げたるまま

成らざりし夢といへども甘美にて航跡雲に顕ち来る過去

大空をふた分けにして進みゆく航跡雲は向ひ見るべし

すぐくひく航跡雲を見上げつつ雄心失せし手のしわをもつ

いち日が過ぎて夕の酒ふふむ唯あり胃腑よりひろごれる酔

昔遍路なるものありき　七首

枯草の間に小さき花覗き一期一会の言葉を交す

菜種梅雨過ぎたる池の水満ちて畔はつかに青草伸びぬ

音立てて車の荷台に土落しショベルは堀らん爪下ろしゆく

土に爪下ろせしショベルは二度三度ゆすりて深く喰込ませゆく

悲しみをここに断つると笠に書く金剛遍照同行二人

み仏にすがるいのちとわらじより立つる埃にひたすら歩む

喜捨に生き求めざりせば一すじの白く乾ける道歩むかな

山川は仏の胸と抱かれて知らざる道を歩みゆくなり

みこころに任せる日々よ今日ひと日歩み終りし足を洗ひぬ

喜捨受けし糧に足りゐて明日も亦歩み運ばむ夕餉をはる

一枚の蒲団といへど御仏の腕と疲れし体横たふ

窓開けて飛び立ちゆける鳥のあり驚き合へることの親しさ

半袖となりたる腕のあたらしく風の吹きゐる畦歩むかな

かすかなる光りと翳のゆらめきて堀の底ひに湧く水のあり

紅ばらの蔭に咲きゐる霞草ありて瞳をしばらくとどむ

月光の届く限りを夜の澄み身を照らされて歩みゆくかな

灰色の空より雪の降り来たり空を映せる水に消えゆく

雪つもる朝の道を赤き服着たる幼が連なり歩む

動くもの見えて幼の走りゆき残されてわが老斑をもつ

窓開けて光り差し入り卓上に置きゐる白き花明るみぬ

厄神に行くから横に乗れという厄年などは無いと答へる

みかしほ旅行　五首

点列する島の緑の盛り上り海は晴れたる空を映せり
くねりたる枝は木の古り見下せる海は岩噛む波の寄せ来ぬ
急坂を登りて展ける海となりはるかな山は霞に淡し
照りしかと見れば雨もつ雲の出で岩噛む波に飛沫立ちたり
うねりゐる水澄みたればここに泳ぐ魚の刺身の味を語りつ

浦島狂乱　みかしほ旅行　十四首

乙姫の肢態まざまざまなうらを占めてひと日を浜に待ち佗ぶ
日を映し一すじ海の光るれば乙姫の乗る潮路か知れぬ
舞ひ踊り共に臥したる乙姫の柔かなるが腕にあたらし
目の記憶腕の記憶の熱くして乙姫を待つ一日暮れゆく
夕闇は嬋なる姫のまぼろしを消して寄せくる波の聞こゆる
来らざる姫と思へど血のしたふ今日も暮れたり帰りゆくべし
はるかなる波寄す方に乙姫のあれば明日亦此処に来たらむ
乙姫の声未だ耳に熱くして渡しくれたる玉手箱抱く
乙姫と一すじつなぐ玉手箱熱き血潮はここより来る
玉手箱抱けば撓へる乙姫のそびらは腕にまだ柔かし
夕陽を映せる金波ひたすらに姫と狂ひし日々に重なる
寄せてくる波は飛沫と砕け散り姫との日々の胸を裂きゆく
乙姫の声に誓ひし玉手箱開けてはならぬ開けてはならぬ
楽しかりし日々は過ぎ去り還らぬか今は玉手箱開きゆくべし

み　の　虫　六首

ゆうらゆら西に東に風来坊みの虫は日差し恋ひて下りぬ
ぶらりんこ垂らせし糸に風のままみの虫よ風はなかなか止まぬ
風止みし日差し温としみの虫は袋より顔を出しはじめたり
山茶花の葉を噛りゐるみの虫の生きねばならぬ音を立てをり
音立てて葉を食ひ散らすみの虫の食ふとふことを我はおそるる
漂泊の心を呼びてみの虫は吹きくる風にゆられてをりぬ
いら虫は生きねばならぬ葉を噛り殺虫剤をもちてわが寄る

爆音を立てて走りし若者の帽子脱ぎたる顔のおさなし

ガラス戸に蠅は幾度も当りをり見えゐて至り得ざるいのちは

十薬を煎じる臭ひ漂はせわれも守らんいのちもちたり

へに曲げし口の変らずしわ増えて同じ年なる男の歩む

同じ程頭の禿げし親しさに後の席より眺めてをりぬ

すみとふる空の高きを飛ぶ鳥を瞳はながく追ひてゆきたり

泣くくせにと子供の時に言はれたり形を変へて今ももちゐる

目薬を差して眼球動かせり即ち見ゆる天井動く

歌集

應答

人間よ文字に綴りし永き日の悲しみのみの燦とあるなれ
ガラス戸に結びし露は解けてきて集ふ重さに流れ初めたり
ひたすらに天のくれなひ集めゐてバラは無音の昼に咲きたり
顔を振り汗を払ひて稗を引く男再びかがまりゆきぬ
土深く差し伸びゆきし根の白く抜き捨てられて稗乾きゆく
走りゐる車見定め道渡り生きんいのちを我ももちたり
吹く風にまろびてゐたる枯れし葉と道の角にて別れきしなり
闇の冷えまさり来りて日に萎えし草甦る露の降るらし
小止みなく雨紋の立ちて大池のはるかな水は雨にかすみぬ
無残なる死に態われにある勿れ高血圧の薬包を切る
渇水に死にたる去年の魚埋め池底の水すみとほりたり
流れゆく雲影に顕つ草原の光る緑に抱かれてをり
手にすくひ飲みたる記憶を距てゆき溝に泡浮き水流れをり
すきあれば茂る雑草生命の強きを我は憎み引きをり
紙をもて造りし花は枯れざると死ぬるいのちを与へ給へり

張りし腰あどけなき顔大胆な言葉を吐きて少女笑へり
ばんそう膏はがせる皮ふの伸びきたり老いてゆけるは隠しも非ず
ちぢみては伸びてみみずの道渡る如何なる声に呼ばはれをらん
研ぎ合ひて音を立てゆく青嵐われは一人の眼にながむ
どくだみの真白き花の咲き盛り竹薮の蔭深くなりきぬ
竹薮に夕ははやく昏れてゆきどくだみの花白く咲きたり
去年乾き魚影見えぬ水底の凄惨として澄みとほりたり
夕闇はわれを消し来て合歓の葉の合せるものに寄りてゆきたり
葉の蔭に祠の立ちて老いし木の今年も多に実を結びたり
鏡の中写してネクタイ締めをれば影が操るわれかも知れぬ
一年の枝葉伸ばせる老いし木を見上ぐるときに眼くぼめり
如何ならん蝶に化すかと道に這ふ毛虫踏まんとするをやめたり
草の間に小さく咲ける花なりき来年を継ぐ種子を結びぬ
あをみどろいつしか生まれ領じきて水の流れぬ溝のありたり
稲育つ水の溜りて澄みてをり老いの瞳の休まむところ

蝶二匹とび交ひ高く舞ひ上り雄と雌とを神のつくれり
室の扉閉して安らぎゐるなれば無数の傷を負ひてゐるべし
幼な子の唇に似るぐみの実を多に手に載せ帰りゆくなり
おのずから結びゐる実の少なくて砂地に生えし草枯れゆきぬ
杉の秀に白みし雨はたちまちにわが窓打ちて通りすぎたり
追ひおりし蝶を見上げて犬の立ち春の光りは原に亘りぬ
酸ゆくない梅甘くない菓子食卓の移れるものに頭垂れをり
曇りたる窓のガラスに距てられ切々外の景恋ひゐたり
サボテンの大輪の花開きたり沙漠は明るき光りとおもう
沈丁花匂ひ来たりぬいち日のいのち互にありたる夕
夕闇の光り集めて水のありさすらふ眼のよりゆくところ
沼水に夜の光りの集ひゐて一人の思ひそこより来たる
皮のむけ枝のもげゐて松立ちぬ斯る形に命終れり
飛び立ちし鳥を幼は見てゐたり我は枯れゆく松見てゐたり
支柱越え伸びたる蔓は天空にゆれてをりしが垂れて下がりぬ

胸の出て腰のおくれて老婆行く田に働きし体型にして
柔かき若芽にたかるあぶろじの撰ぶといふもおのづからにて
白鷺の羽根輝きて飛びゆけば地の果眺めし若き日をもつ
すきとほる底ひにかすかに砂動き水湧く心にかへらんとする
稲植ゑむ水平かに満たされて並びたる田は天を映せり
灯を映す石けんの泡湯に流し汚れ落ちたる体に立ちぬ
目はゆきて池に満ちたる水見ゆる去年は田植の水を憂ひし
拭ひたるガラスはみどり明らかに移れる春を映し出したり
くされたる水にわが目の写りゐて覗くわが目を覗き返せり
星と我はるかなものをつなぎゐる光りなるべし額に受くる
燈明のゆらぎに重なる霊ありて初盆の経を唱えまゐらす
田を植ゑし濁り沈みて水光りつばめは触れて翻りたり
金ぼうげたんぽぽの茎伸び切りて咲きたるものに移ろひはやし
ひいやりと頬を打ちたる雨滴空はいつしか雲重なりぬ
ごみ箱に鴉を防ぐ網かぶせ距てて互の営をもつ

純白の輝く雪に神見しと雪に住まへる人にはあらず

純白は神の衣にありたりき木蓮の花天に開きぬ

毒をもつ蜂輝きて飛びてをり夏の日差しは舗道灼きゆく

ひたすらに捨てて生きたる古のひじりの言葉につながれてをり

捨て切りてあるものは何寒風に冷え徹る迄歩みゐるなり

たんぽぽの絮は離れてゆきたりき遠くに神と約なしたれば

昨日より早く走りし幼児は立止まりたるときに笑へり

森閑と沼は木末を映しをり真の言葉求むるもののため

山上に立ちて双手を差上げぬ見ゆる限りと応答なさん

手を上げて待たれておれば幼な児は伸ばせし距離に走りゆきたり

苗箱に稲は青さを増してゆき溝の普請の布令廻りくる

自転車を漸く習ひ乗る孫に飯だと三度(たび)告げに来りぬ

今年も来し竹籠売と笑ひ合ふ声を交しつ竹籠要らず

声挙げて今年も来たる竹籠売一年経たる腰の曲りぬ

水に写る梢の影のゆるるとき歪み見る目を我のもちたり

ガラス戸を距てて汗拭き歩めるを眺めてをりぬ他者といひけり

足にふれしたんぽぽの絮飛びゆきて知らぬ行方に瞳のながし

草青く堤に光り返しゆき渚に牛蛙背を並べたり

聞けといふ男大方埒もなき言葉と高き声をもちたり

わが内部かすかに暗く雲の出で影の消えたる地を見てをり

死者生者棺の板の一枚に距てて門を出でてくるかな

祝日に必ず国旗を掲ぐ家ありて老いたる一人が住まふ

かすかなる笑まひは何処より来るかと仏の像に向ひてながし

距てもつ未来か知れぬ孫二人よく似たる顔並べ寝ねをり

たんぽぽの花茎の長く伸び来り花より多く絮を掲げぬ

死者載せる車は木蔭に消えゆきて暫し残らん歩みを返す

滲み出し如くに赤き花びらが雨降る中に散りて落ちをり

山肌の土新しくえぐられてショベルは高く旋回したり

発ちてゆく霊柩者を見送りて誰も死をもつ沈黙ふかし

かがやきて草葉の風にひるがへり面を上げて君の来りぬ

わがために咲きたる花にあらねども瞳すずしく歩みゆくかな
山上に昇る煙の直ぐく立ち瞳はるかな日和なりけり
おのづから鳥等は森に眠れるを昏れゆくものに言葉覚めをり
病む蝶は木蔭に羽根をたたみをりしづかなるかな移りゆけるは
灯を消して臥床の中に身を入れぬ対ふものなき闇のやさしさ
耳垢をとるべく綿棒入れをりしばし無心のときとおもひつ
しんしんと降りゐる日差し萌え出でてすぐき緑にアスパラガスは
夜をとうし蛙は声を交し合ひ卵産むべき水のぬるみぬ
読みくるるもののあらぬと思ひつつ浮ぶ言葉をペン走らせる
木蓮の花いち日の霜に銹び悲運の歌を風の運べり
咲き初めしたんぽぽの花そこここに今日の変貌原の遂げゆく
ほつほつと土筆の土を被き出で脊の暖かき歩みなりけり
行き交す人皆離りゆきたれば誰もかなしみもつと思へり
あかぎれの手にひさぎゐる卵など食べて華やぐわれのいのちか
灯を消してわれの姿も共に消ゆ重き塊立上りたり

生きて来し時の重さに出す足の蹟き易く歩みゆくかな
置かれゐる鏡のあればふととまり訪ねてゆかん髪をかき上ぐ
あたたかき日差しの土に沁み入りて冬眠の虫を呼ぶ声渡る
天と地を分つところの澄みわたり深き呼吸を我はなしたり
飛び立ちし白鷺の羽根輝きて高さ増しゆく空となりたり
吹く風が水の平らを乱すとき千の光りを生れしめゐたり
人去りし後の机に書きかけの原稿ありておのれにかへる
落ち水に生れて消えゆく束の間を泡(あぶく)は光り映してゐたり
貴の花に勝ちし曙は異邦人了見せまき我と思ひつ
木蓮の匂ふはなびら天を差し仰ぐわが目をわれは愛せり
吾の目と亡き母の目をつなぎゐて木蓮白く天に匂へり
輝きて蒸気の直ぐく立昇り冬の野原を統(す)べてゆきたり
焚火する路傍のあり無駄話しては笑へる仲間に入りぬ
あかあかと入りゆく夕日に真向へば残る命のいくばくかあり
必ずや死ぬる病と言はれたるルソーはひたすら読みたりしとぞ

一日の終るときとぞ夕映えは隈なく空を染めてゆきたり
華燭照りケーキ分たんナイフもつ苦き人生に入りゆくがため
鳥の声が裂きて渡りし大空より青き血潮のしたたりやまず
草未だもえざる水の平かに瞳を置きて老い来るなり
たんぽぽの低く咲き出で頬過ぎる風やはらかくなりて来りぬ
霜のなき四五日続き蚕豆の育ちゆけるは葉を上向けぬ
枯草の曝れて白きが日を返し冬も残るはひと月となる
照り出でて霜の置きゐし蚕豆の葉群みどりの戻りはじめぬ
一摑み出してくれたるちり紙の一枚とりて残りをたたむ
勁ずみし葉群に風の渡るときけものは穴に目を開きたり
天心にかかりて冴ゆる月光に額照らさるる歩みなりけり
元気やのうあほうを言うなぼんこつよ朝の道に行き交したり
夜の胸となりたる空に流星は撃たれし如くはしり消えゆく
被災せるしつかわ碧の作品が三月号に載せられありぬ
印肉が染みゐて半ば赤くなりし亡父の判が出でて来りぬ

半円に天を映して半円に大地を映し露の結べり
暖めてをりたる室が開けられて冷えをり昨日より孫の来りぬ
飛びおりし鳥の去りたる空の青老いし呼吸は深くなすべし
立こむる霧の中より人の出で霧の中へと消えてゆきたり
川中に立ちておりたる白鷺はくちばし低くのばしてゆきぬ
ひしの実の黒く枯れしが寄せられて冬の渚は水の澄みたり
置く霜のとけたる後のくろぐろと冬田は土の露はにありぬ
前肢をかけて来りて離さざる犬よひと日をつながれたるは
ガリ版に松本才逸摺りたりし歌誌も茶色にさびて並びぬ
照りつづき枯れて来りしコスモスの二日降りたる青葉を掲ぐ
照りつづく夏にてありき何の田にも稲穂揃ふは人の努むる
百の花競ひ咲きたる花園の一つ一つの色は見て過ぐ
水の湧く底ひの見えて砂動き光と陰ののぼりて沈む
声限り鳴きたる蟬のむくろにて風の運びし行方を知らず
双の肘机につきて掌に頭支ふる頭重たし

窓開けて草をわたれる風来りはるかな空と呼吸のつなぐ

夕風はほてりを冷やしはるかなる空に一つの星点もりたり

木の影の伸びて来りて窓開けぬ夕の風は冷えをもちたり

朝庭に光りの渡りひたすらに紅を掲げてバラの咲きたり

澄みわたる視界となりて雨上り山並み青く迫り来りぬ

窓開けて人の往き来を見てゐしが閉しぬしばし茫とありたし

山深き苔にしたたる水ありてすきとほりたる光り動きぬ

朝々に冷えの増しきてコスモスの花に光りの澄みとほりたり

なおちゃんに見られたからね亀さんが恥しいってうらうらと照る

緑濃く稲葉伸びおり満ち亘る日差しを蓄めて日差しに向かふ

目を閉ずれ隣席の人はるかなりコーヒー店に入りて凭れぬ

宿酔の血すじ淀める目を写し階段に鏡かかりてをりぬ

雨止みて葉毎に置けるしろがねの露光り合ふ原となりたり

七十余年追ひ詰め得ざりし我なると一人坐しゐる夕昏れゆく

坐りたるままにわが顔見つめゐる仔犬の傍に近寄りゆきぬ

すこやかに左右の足を交し出す厚き地表の応へ確に

飛ぶ鳥の声消えゆきて果て知らぬ青さに空の晴れわたりたり

引く鎖を拒み踏ん張りくさむらに犬は鼻先突出してゆく

細く長く絞れる声の間を置きて犬は一夜をつながれてをり

雨止みし稲田の畦をあゆみゐし女止まりかがまりゆきぬ

空よりも映れる雲の光りもち水は憧れ深く湛へる

一日の言葉の反逆甘きかな少女が爪に塗りてゆく青

高層の建物故にあはあはと霧に消されてゆくを見てをり

大きなる鏡の置かれてゐるなればシャツのボタンの一つを掛る

待ちゐるを忘れたるにはあらざるか服購ふと妻入りゆきて

地下水は流れてつきず清冽の言葉を我に溢れさすべく

街に出て目に過ぎゆきし人数多いねて覚ゆる思いのあらず

糠に漬けて茄子の紫まされるを朝の飯に添へて出さるる

スイッチを入れて灯りの点もりたりものの象のせめぎゐる室

天と地を分つところの澄みとほり無底の心無辺の希ひ

騒立てる飛翔の希ひ行き行きて青空唯に青くあらむを

はらはらと降りかかる葉を肩に受くおのが滅びに徹せんがため

風通ふところを撰び犬の寝ね稗引く男汗を流せり

畦越ゆる水の流れて夜を降りし雨にどよめく山野となりぬ

峯覆ふ雲の動きて白くなり細まる雨の光り帯びきぬ

はらわたを血に染め亀の轢かれをり命もちゐるものの死として

清楚とは如何なる事かと尋ねたる乙女ほほえみ頭下げたり

細胞のいとなむ不思議を読みてをり疎める人も尊くなりて

白き石のり越す水のうねりもちうねりに石の白くきらめく

枯れたりと思ひておりし庭の松幾つか青葉出せしは仰ぐ

清らかに水に映れる白鷺のくちばし尖り生きねばならぬ

一息に冷えたる水を仰向きて喉のほてりを洗ひ流しぬ

食卓に皿満ち簞笥に服の満ちおどけしテレビに笑ひて寝ねる

降るとなき雨に舗道の濡れてゆき遥かな山は木木の煙りぬ

光りゐる水につばくろ触れて飛び目のゆく限りを田植終りぬ

吹く風にふるへる草のしょう条と夕の来りベンチを立ちぬ

公園の草を引きゐし人去りぬ残るは神に撰ばれたりや

手を振れる少女となりて走りゆき改札口に友現はれぬ

たじろげる我あらしめて南瓜は十日太りし光りを返す

しろがねの落つる光りが埋めゆき杉生ふ谷を日照雨渡りぬ

美しき嘘重ね合ふ女等は自足の笑みを湛へてゆきぬ

葉の蔭に泰山木の白く咲き本を読むべく今日も来りぬ

七月の田の水未だ冷たしと株張り少なき稲を指差す

歩みゐる上を鳴き立つ二羽ありて近くに育つひなのゐるらし

打上げし花火の消えし暗き空頭上にありて祭り終りぬ

魅かれたるものを見ざりし目の乾き暮るる夕の歩みを運ぶ

知る人の来りたるらし輝ける瞳となりて少女立ちたり

結論の既に出されてゐるらしき争ふ声の激し来たらず

炎なす日照りのつづきどんらんに肥料(こえ)吸ふ稲の株張り来たる

実を結びおえたる草の葉の枯れて土に落つべき種子を養ふ

歌会に行かん心の騒立ちて如何なる言葉生れんとする

埋立地に生えゐる草の疎らにて懸命に伸ばす細き根ならん

誰の背もひとしく濡れしシャツまとひ若き男等リュックを下す

美しく大きく咲きしバラにして瓶にさすべく撰ばれ切らる

冬は唯日を経て秋より続けるを葉をふり落し裸木立ちぬ

天と地の分るところ淡く澄み一人の瞳はるかなりけり

転落の音とは斯くも激しきか激し自販機の底に立ちたり

輝きて並び打つ羽根白鷺は杉立つ山を過ぎてゆきたり

さかのぼるざり蟹爪を上ぐるとき人はさびしき歩みもちたり

出る汗は油と照りて稗をひく男答へん顔を上げたり

水面の上と下とに映し合ひ白鷺白く輝きて立つ

研ぎ上げしナイフを日差しにかざし見る男恍惚の顔をかくさず

緑濃く育ちし故の萎えふかく胡瓜の畑に日照りのつづく

ふり返ればめくらざる書の累累としはの立つ手をぶらさげるかな

くされたるものの臭ひの溝を発ち炎をなす照りの今日も続きぬ

風止みてなびかぬ草となりし野の一つの方に向ひ伏したり

刈り捨つる草にはあれど萌え出でしうすき緑に光り透きたり

どうしようと思ひをりしが時間となり出でて行くべき靴を取出す

刈られたる草は平たき先となり緑まばらに伸びて来りぬ

いつよりの水の青さぞすきとほりそそり立ちたる山に抱かる

曽つて聞きし言葉を沈めてもつなればほほえみ消えし顔に向ひぬ

浮袋を抱へし幼は炎昼の陽差しの中へ走り出でたり

華麗なる花一日に咲きおへしサボテン明日より忘れらるべし

親を捨て走らん思ひもひそむるとアイスクリームを少女なめをり

小さなる西瓜頭が三つ浮び線香花火は撥けはじめぬ

夏の夜に流星いくつ仰ぎたりまだクーラーの無きときなりき

満天の星を寝ころび語りたり何の家も床机というものありき

輝きて夜の空流れ滅ぶ星クーラー設けしそれより見ざり

孵りたるおたまじゃくしに飛び来り白鷺尖る喙に並びぬ

夕闇に草木の沈み山沈み宇宙の胎にかへりゆくなり

鍬担ぎ炎熱の畦を廻る見ゆ伸びゆく稲の青き葉の見ゆ

わが過去をあばき立てゐるものの声事実にあれば黙しうべなふ

如何ならん評価を与へられたるか思ふ我あり殺してしまへ

道角の尖れ石も見の易く住まゐて永き歩みを運ぶ

紫のつゆけき茄子を下げ籠に満して妻は畑よりかへる

去年より今年ひろがりコスモスの道辺の草の中に生き継ぐ

白鷺の餌となるとも水ぬるみおたまじゃくしは生れねばならぬ

暑いのう暑うないと米が出けへんがい稗引く男踢まりゆきぬ

産卵に鮒さかのぼる習性を獲らん手段(てだて)に歩みゆくなり

ホース絞り虹生れたれば生れしめて庭に朝の水を撒きをり

窓のカーテン開きて河畔のバスとなりさざ波千の光りを返す

かげり来て映れる木木の蒼さ増し山に囲まる池しずまりぬ

みどり透く果肉に皮のむかれゐて皿にまくわの盛り上げられぬ

コーヒーを置くとわずかに俯するとき少女の胸のひふの透たり

言はざりし言葉の次次言葉生み別れし後を歩みゐるかな

一年の木の営がもちてゐる花の開くは十日程にて

賞められてゐるものの前に立ちゐつつ心さもしき黙にてあるな

讃えやる言葉吐きつつ充たされぬひびきを持てる声とおもひぬ

一口の酒に及ばぬ言葉なり腹より拡がりゆくものもたず

夕光に稲葉の鋭く尖るとき暗き歴史を米のもちたり

窓の葉に日の差し来り新しくあらん朝の眼を洗ふ

鉄と鉄組まるる力のひしひしと広き工場の建てられゆきぬ

自転車に乗る技おぼへし幼孫帰ろうと言はぬものに昏れゆく

炎昼の光りの渡り稲の青満ちてざんぶと冷水かぶる

木の蔭がもてるかすかな形へとものを見る目は移りゆきたり

吊り上げしクレーンの鉄が組まれゆく一つ加へて力の強し

張りおへし巣の中央に掛りたる虫の如くに蜘蛛の潜みぬ

鳴りつづく電話に歩み寄りゐつつ奪はる我の時間にあらん

目の前のしばし明るくバスを待つ前を女の通りすぎたり

捨てられし臺の立つ菜は天に向きつぼみの限りの花開きゆく

頭ふりおたまじゃくしは逃げてゆく大きな頭はのろのろとして
錐の先鋭く尖りこの廊に誰か使ひて忘れたるらし
夫婦して来りつちかふ畑なりきこのごろ媼一人が来る
居酒屋に昨日と似たる話なし顔ほてらせて帰りゆきをり
目を上げてバス停迄のはるかなり一足づつの歩みを運ぶ
炎熱の稲葉の間にシャツの背のうごめき草を除りゐるらしき

灯に集ふ虫　十六首

夕闇に光りをひきて虫来り外燈めぐりて舞ひ初めたり
光域に入りたる虫はともし火に直ぐく飛びくる鋭さにして
深みゆく闇と飛びくる虫の増し光りに飛び交ひ競ひ乱るる
四方より飛びくる虫の光箭の如きが見えて群のひろがる
灯を恋へる虫の眼や舞ひめぐり次第にはげしさ増してきたりぬ
しっ黒の暗より来る虫の増しいのちの限りを飛び交ひめぐる
灯をめぐり飛びゐる虫は舞ひ狂ひ狂ひて舞ひて夜の更けゆく
灯をめぐり一夜狂ひし虫の目のいのちはるかに承けて来りし
承けて来しいのちに一夜狂ひしと朝の庭にむくろ累なる
灯に狂ふ一夜に尽きしいのちなると重なる虫のむくろ眺めつ
生きてゐるいのちをもてば火に狂ひ死したる虫に瞳を置きぬ
朝の日に庭に累なる虫の死の狂ひて舞ひしむくろ小さし
火に狂ひ舞ひて一夜に死にたるも虫のいのちの一代なるべし
生涯を一夜に代へて舞ひ狂ひ死したる虫にながく立ちたり
外燈の明りに飛びて死にゆきし虫の眼をゴッホにつなぐ
夜をとうし狂ひ舞ひたる虫の死を老婆は集めてごみ箱に捨つ
光り透く若き葉群を見てゐしがベンチに掛けて瞼閉しぬ
うす暗きところに瞳移しゆき何考へるといふことのなし
帽子脱ぎて頭の汗に風わたるこの快哉に夏の日のあり
欲望を底ひに沈ませ澱ませて人目に清く歩みゆくなり
降り止みて葉毎に置けるしろがねの露光り合ふ原となりたり
七十の半ば超えたる我なると透明の風吹き過ぎる中

電燈の点もりて室を照しゐしろうそくの火は吹きて消されぬ
刈られたる稲田に広き原となりコスモスの花そよぎ咲きたり
紫にはるかな山の澄みとほり吹きゐる風は胸に通ひぬ
しがみつく葉を引きはがし木枯しは唸れる音に空はしりゆく
白き雲末生以前の空青く知らざる歩みもちてゐるかな
大空を隈なく染めし夕陽はひと日終へたる没りてゆきたり
母と子の池畔をそぞろに歩みゆきあしべ萌ゆべき光りわたりぬ
輝きて蒸気のすぐく立昇り冬の蒼穹を統べてゆきたり
一番の痒きは届かぬところにて柱の角に背を寄せてゆく
青桐の青さの増してのぼりゐる樹液はげしき季の来りぬ
直線に降りくる日差し逡巡のわが襟首をむんずと摑む
落ちてゐるものを啖ふを当然となしゐる犬と数歩を距つ
病む蝶は木蔭に翅をたたみおりしずかなるかな移りゆけるは
葉の散りし梢こまかに天を差し瞳研がれて冬の澄みたり
夕闇の残る光を集めゐて雨に溜りし水の瞠りぬ

満ちてくる潮の如き文字に逢ふ覚悟定めん息を吸ひたり
絶叫の連呼に廻る選挙カーの声の消えゆく空を見てをり
選挙カー亦一台の入り来り撃ち合ふ声の空をはしりぬ
水の鳴る音満ち草の青満ちて二日降りたる雨上りたり
はるかなる峯明らかに澄みわたり二日降りたる雨上りたり
そそり立つ岩山踏まむ登山靴青年取りては離してえらぶ
線刻の見えて頽れし石の立ちここに祈りし人ありたりき
追ひおりし蝶を見上げて犬の立ち春の光りは原を亘りぬ
着るパジャマピエロに似ると人言ふをピエロになりて足を上げたり
大空を飛びゆく鳥を見上げたる人の希ひの永かりしかな
何事に犬の吠えをり我も亦もちてをりたる余裕なき声
手に財布持ちたる女過ぎゆけり小さきものを近くに買はん
間違はず教へし道を行きたりや越ゆべき山は人の稀なり
次次と上る花火は夜の水に映りて光り交し合ひたり
蜘蛛の巣に枯葉の集ひこの家に住みゐし人の行方は知らず

一息に冷えし牛乳飲み干して出でてゆくべき靴取り出しぬ
ふり上ぐる爪いつよりか失ひぬざり蟹這へる傍を過ぎつつ
くり返す変らざる日にあるべしと残り少なき生き態定む
蒼穹に向ひて双手差上げぬ天の開くる限りのあらず
歌会に行かむ心の騒立ちて如何なる言葉生れんとする
古びたる己が歌帳を開きおり今も作りつ進歩のあらず
ガラス戸の向ふは光り明るくて蠅は越ゆべく身を打当てる
竹群の蔭の冷えゐて風通ひ汗のあえたる歩みを止む
盛り上る葉群の厚く艶失せて木蔭は深さ増して来りぬ

七年四月十八日　歴史を知る会の旅行詠

シャツのボタン外れてゐるを指摘され朝まだ早き門を出でゆく
しべ多き梢となりて若葉出で桜に春の移れる早し
散り敷ける花びらを掃く人の見え春の盛りは過ぎてゆくらし
今日ひと日行動を共になす人等笑ひ交してバスに入りゆく
バスの席に腰を下ろして日常を断ちたるもの笑ふ声挙ぐ
笑ひ声高く立ちたる一ところ久方ぶりに出会ひたるらし
世話をする人等の頭寄せゐるを笑ひ語りつ窓より眺む
カーブにて体大きく傾くも笑ひの声の湧きて来りつ
若草の萌え出で来たる春の野の去年の枯れたる草を見てをり
このあたりこぶしの花の多かりき白く咲けるに今年も出合ふ
山桜はほのかに白し茂りゐる山の緑を綴りて咲きぬ
松食ひに頽れし幹の並べるを緊まる瞳となりて来りぬ
しべの歌作りて出でし小野の町綾部は花の咲き盛りたり
十日程おくれて咲ける桜など綾部の街は語りつつ過ぐ
黒き幹目に立つ柿の梢には若葉幾片つき初めたり
藁屋根をトタンに包む家並び古りたる柿の枝を垂れたり
連なりて岸に桜の咲き盛り水平かに川の流るる
旅に見て桜の花の匂へるを知りおり常は忙しくありし

旅行の内の美山の里　十首

山の間に霧立ちのぼり萱葺の古りたる家のふもとに並ぶ

萱に葺く屋根の並びて何の家も敷地狭きは貧しく生きし

べんがらを塗りし柱の煤に古り拭き磨かれて艶をもちたり

植木屋のあらざる里は古びたる松を手粗く切り込みゐたり

へっついに神を祀りし古の人の心に言葉あらなく

物を置く場所少なきはつつましく営む日日に生きて来りし

立ちこめし炊事の煙に生きたりと屋根裏黒く煤に古りたり

萱葺の小さき家を並べたる里は豊かに水仙咲かす

山深き美山の里に醸(かも)したるやや黄に濁る酒購ひぬ

そそり立つ山を綴りて咲く白に瞳凝らしてこぶしと眺む

水分(みまくり)はここらなるべしトンネルを越えて流れの反対となる

芝桜庭より道に垂らしゐて山に沿ひたる家の並びぬ

旅行詠の内護国王寺　八首

争ふに耐ふを得ざりし御心は深山に住家求めたまひし

古りし木の坂を登りて光厳帝傷む心を養ひたまふ

坐禅組む三昧の日日を送らると光厳帝は古りし木の中

権力は争ひ合ふを常とせば光厳帝は山深き中

隠るるといへども帝の住み給ふ在所は広くたたみを敷きぬ

庭池に春の日の差しゆるゆると鯉は尾を振り行き交ひおよぐ

枝古りし楓の池にかざしゐて芽ぐむ若葉が日差しに透きぬ

九重に咲く花びらをもちたりと枝垂れ桜は柵囲ふ中

昼食に飲みたる酒に饒舌となりゐてバスの中に入りゆく

こぶしの花左右に見えてバス走る羊腸の道を傾きゐつつ

旅行詠内高尾高山寺

高雄とは京と聞きつつ幾曲り山道のみを過ぎて来りぬ

幹太く苔むす楓の萌え初めて並び生えゐる高雄と言へり

萼赤き中より若葉の透きて萌え楓の幹は太く苔むす

匂ひ立つ宮女の歩みもつはものの歩みもありし山路とおもへ

苔のむす幹にまつはるつたの見え深山の木木は高く立ちたり

時永く都のありしこのあたり草木も言葉を宿すとおもふ

掃かれたる直ぐなる参道萌え初めし楓の若葉が左右に並ぶ

山深き参詣道の澄みとほり椿の花の紅きを散らす

手洗に赤き椿を咲かしめて吉水院は木立に隠る

粗石を並べし段(きだ)に息喘ぎ高山寺金堂辿りつきたり

投げられし兎足挙げたのしげに鳥羽僧上の戯画のありたり

神護寺に向へる人を見送りて茶を飲み休む老いたりしかな

こまやかな緑の泡の茶をすすり芽ぐむ楓の群に目をやる

見下して楓の川になだり生え秋の紅葉に思ひを運ぶ

平成七年八月十五日

第二集

歌集 青い丘

わが身体

小野市住吉町

長谷川 利春

はじめに

長谷川　利　春

我々は生命として死をもつものである。この運命としての死に打ち克つことによってのみ生きてゆくものである。それは一歩一歩の建設であり、無限の努力である。そこに見えたものが世界であり歴史である。そこに私達は死の方向に悲しみをもち、生の方向に歓びをもつのである。詩は斯かる生の営みの、底より出てくる声を直下に捉えるものであり、言葉に生を表わすものである。

我々の合同歌集「青い丘」が出版されてから十年が経つ。日進月歩に代えて、分進秒歩と言われる現代の進歩発展は著しい。世界は国民国家を脱して国際化することを否応なく求めている。そして短歌はそれに呼応する如く膨張を早め、大歌会より募集が引きも切らない有り様である。

私はそこに国際化によって霞んでいく自己としての個性を、伝統の中に求めようとする創造的意識が働いているように思う。伝統が現在を包むことによって、新しい自己の個性としての存在を、伝統と結びつくことに確かめようとする創造的意識が働いたのであると思う。伝統が現在を包むことが新しいものが生れるということである。短歌の形式の中に世相を見ることによって我々はより大きな自分を見るのである。そのような背景によって月一回の歌会は活発な発言と笑いの渦巻くところである。それは一ヶ月蓄めて来た力の爆発であり、亦日常生活の慰藉であり、救済である。

「青い丘」第二集は斯かる熱情が十年錯節を切り拓いた集成であり、変転極まりない世の中にあって、日々の営みを言葉に映し、言葉を営みに映して、感覚を研ぎ感情を陶冶した結晶である。歌集を出すということは、次の段階への足場を作ったことであると思う。これを踏台に一層の切磋琢磨をもち、より充実した第三集を期したいと思う。

目に絵画耳に音楽芸術の永遠なるは身体にこそ

細胞の六十兆を調へし三十余億年我の齢ぞ

生命は二十億年の営みに死を持つことを獲得せしと

死をもちて死に打ち克てる荘厳の相（すがた）を人は獲得したり

細胞の六十兆の身体は生死の苦悩の蓄積にして

営みし単細胞より多細胞幾億年の生死になりし

蓄積をされし細胞限りなき生死の苦悩を統べたるものぞ

生と死のたたかひ合ひし永き時苦悩に我等現れたりし

死ぬるは苦生きるは歓びなひまぜて営み積みし億年の日日

細胞の六十兆は限りなき哀歓統べて蓄めたるものぞ

限りなく営み蓄めし哀歓の陰影ぞ今文化と言へる

細胞の六十兆を調へし三十余億を宇宙としてもつ

今の我宇宙の我と一にして一挙手永遠の現れとする

庭前に花を咲かすも営みし三十余億年の現れにして

細胞の六十兆をもつことがすでに永遠の現前にして

生死せし無限の哀歓潜めもつ六十兆の細胞にして

百年の生死を言はず歌作る友よ永遠の現前にあれ

手を伸ばす麦藁帽子亦転び戯画の一人となりて後追ふ

解らうと努めて来しが結局は解らぬといふが解りぬ

雲が出て光と影の原に消え内に還らん歩みを運ぶ

かげろふの一日の命に飛び来り我等承けたる命のながし

竹とんぼ過去へ過去へと還りゆきわれに小さきてのひらありき

笑ふとき皆一様の顔となり論たたかはす集会つづく

ふくらめるつぼみに待ちし白梅の朝の光を受けて咲きをり

なにごとの運ぶ命ぞ昨日より歩みの軽く癒えて来りぬ

ひんやりと湿布薬の貼られゆき痛みにほてる肉体をもつ

さやかなる水の記憶を喉にもつ小川はあぶく浮きて流るる

ユニフォーム風を流して汗かわき山にしばしのいこひを終る

枯れてゐる草に瞳のながくして萌え出る堤を歩みゆくかな

降臨の気分暫く味はひて犬引き山坂下りゆくかな

長谷川利春　遺歌集

平成二十年七月　発行

著　者　長谷川　利春
発行者　長谷川　利路

〒六七五―一三六一
兵庫県小野市住吉町一八九―二
電話（〇七九四）六七―〇〇三四

印刷　兵庫県小野市来住町八八三―二
株式会社　吉本宝文堂